財団法人八尾市文化財調査研究会報告63

Ⅰ　植　松　遺　跡（第４次調査）

Ⅱ　東　郷　遺　跡（第50次調査）

Ⅲ　八尾寺内町遺跡（第１次調査）

Ⅳ　八 尾 南 遺 跡（第23次調査）

１９９９年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

正　誤　表

報告63

	誤	正
Ⅲ八尾寺内町遺跡第１次調査 （ＹＣ95－１）27項目の９行目	桂穴	柱穴
報告書抄録 東郷遺跡（第50次調査）	生産移行	生産遺構

財団法人八尾市文化財調査研究会報告63

Ⅰ　植　松　遺　跡（第４次調査）

Ⅱ　東　郷　遺　跡（第50次調査）

Ⅲ　八尾寺内町遺跡（第１次調査）

Ⅳ　八 尾 南 遺 跡（第23次調査）

１９９９年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

長びく経済不況下にあって大規模な開発工事が激減している昨今ではありますが、小規模ながらも市内においては公共下水道ならびに民間の宅地開発をはじめ、未来に向けて人々のより良い暮らしを求めるべく開発工事が進められております。しかしながら、その代償に開発規模の大小に関わらず失われるのが、地中に眠る埋蔵文化遺産であります。我々調査団体は、文化財の保護継承の一環として開発事前の遺跡調査を通して記録保存し、後世の人々に伝承すべく日々努めております。

本書は、平成７年度に実施しました植松遺跡第４次・東郷遺跡第50次・八尾寺内町遺跡第１次・八尾南遺跡第23次の４件の発掘調査の成果を報告するものであります。各遺跡の成果について概略しますと、植松遺跡では弥生時代中期末頃の生活面、東郷遺跡では中世期の池状遺構、八尾寺内町遺跡では弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての集落、八尾南遺跡では弥生時代後期末の井戸がそれぞれ見つかりました。

最後になりましたが、調査に関して御尽力・御協力頂きました関係各位、また、地元の方々に御理解・御協力を頂きましたことに深く感謝いたします。今後も我々は文化財の保護継承の一つである調査・研究にさらなる努力を重ねてまいる所存ですので、皆様方の御協力・御理解を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

平成11年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　木　山　丈　司

序

1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施した発掘調査成果の報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成11年３月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は、下記のとおりである。
1．本書に収録した各調査報告の執筆、全体の構成・編集は岡田清一が行った。
1．本書掲載の地図は、八尾市役所発行の2,500分の１地形図（平成８年７月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成８年10月１日改訂）を使用した。
1．本書で用いた標高の基準はT.P.（東京湾標準潮位）である。
1．本書で用いた方位は、座標北及び磁北である。
1．遺構は下記の略号で示した。

竪穴住居－ＳＩ　井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　ピット（小穴）－ＳＰ
落ち込み－ＳＯ　自然河川－ＮＲ

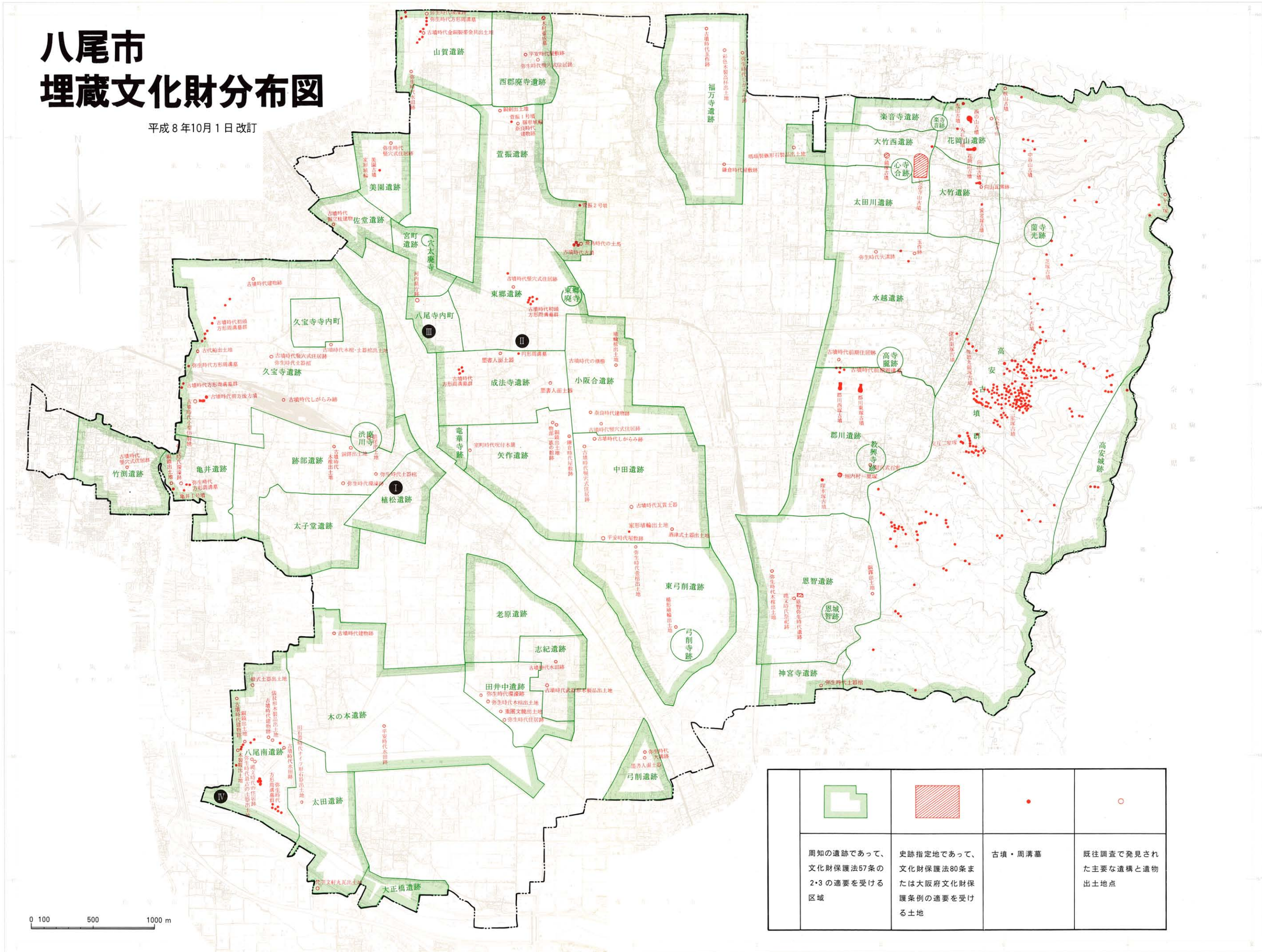
1．各地層の土色については、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版　標準土色帖』に従った。
1．調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目　　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　植　松　遺　跡第４次調査（ＵＭ95－４）……1
Ⅱ　東　郷　遺　跡第50次調査（ＴＧ95－50）……15
Ⅲ　八尾寺内町遺跡第１次調査（ＹＣ95－１）……21
Ⅳ　八　尾　南　遺　跡第23次調査（ＹＳ95－23）……37
報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成８年10月１日改訂



周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適要を受ける区域	史跡指定地であって、文化財保護法80条または大阪府文化財保護条例の適要を受ける土地	古墳・周溝墓	既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点

Ⅰ　植松遺跡第４次調査（UM95－４）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市植松町３・５丁目地内で実施した公共下水道（７－20工区）工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する植松遺跡第４次調査（ＵＭ95－４）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋363－３号　平成７年10月２日付）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年３月18日～３月27日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は43.2㎡を測る。なお、現地調査にあたっては、垣内洋平・辻野優子・八田雅美が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－岩沢玲子・坂田典彦・辻野・中村百合・水木純司・村本恵一郎、遺構および遺物の図面トレース－辻野、遺物写真撮影－岡田が行った。

1．石材の鑑定については、八尾市立曙川小学校教諭　奥田尚氏から御教示を頂いた。

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
第２章　調査概要……2
　第１節　調査の方法と経過……2
　第２節　基本層序……2
　第３節　検出遺構と出土遺物……3
　第４節　出土遺物観察表……10
第３章　まとめ……12

挿　図　目　次

第１図　調査地位置および周辺図（Ｓ＝１／5,000）……1
第２図　調査区位置図（Ｓ＝１／800）……2
第３図　北壁断面図（Ｓ＝１／80）……3
第４図　第１遺構面実測図（Ｓ＝１／80）……4
第５図　ＳＤ－103出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……4
第６図　ＳＤ－105出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……5
第７図　第２遺構面実測図（Ｓ＝１／80）……5
第８図　ＳＫ－201出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……6
第９図　ＳＤ－202出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……7
第10図　ＳＤ－203出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……7
第11図　第４層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……8
第12図　第11層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……9

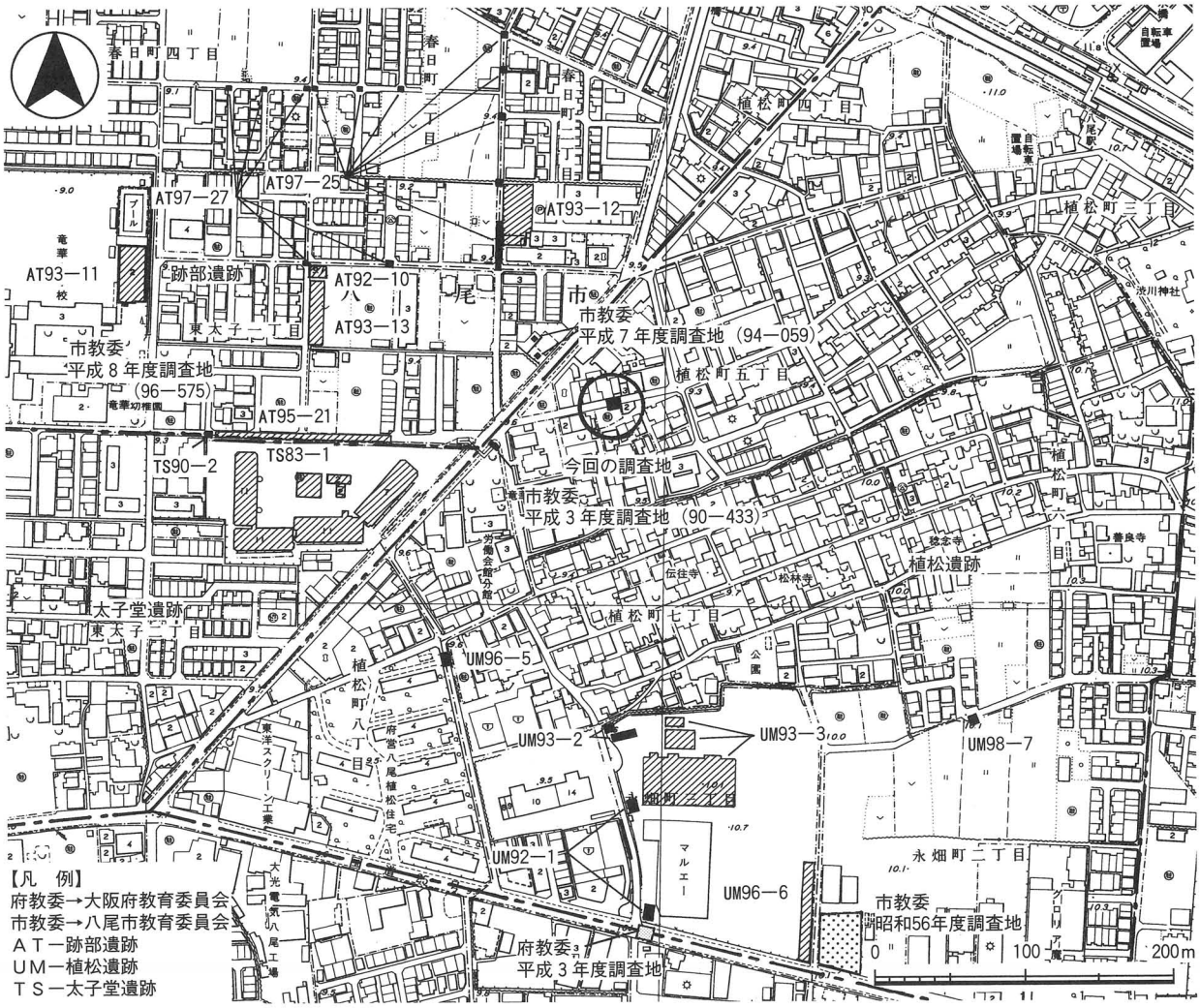
図　版　目　次

図版一　第１遺構面(西から)　第２遺構面(西から)　北壁断面(南西から)　西壁断面(東から)
図版二　ＳＤ－103・ＳＤ－105・ＳＫ－201　出土遺物
図版三　ＳＫ－201・ＳＤ－202・ＳＤ－203　出土遺物
図版四　第４層・第11層　出土遺物
図版五　第11層　出土遺物

第１章　はじめに

植松遺跡は八尾市の西部に位置し、南東から北西方向に流れる旧大和川の主流であった長瀬川左岸に形成された自然堤防上に位置する。遺跡の推定範囲は東西および南北方向ともに約0.6kmを測り、現在の行政区画上では植松町３～８丁目、永畑町２・３丁目一帯にあたる。周辺の遺跡には、北西に跡部遺跡・渋川廃寺、南西に太子堂遺跡、北東に竜華寺跡・矢作遺跡が隣接する。

当遺跡内における現在までの調査をみると、昭和56年度に八尾市教育委員会が実施した永畑町２丁目の店舗建設に伴う調査で平安時代前期の掘立柱建物跡や溝群、平成３年度に大阪府教育委員会が実施した永畑町３丁目[註1]の国道25号線上における公共下水道工事に伴う調査で古墳時代～平安時代の土層、同年八尾市教育委員会が実施した植松町５丁目地内における公共下水道工事[註2]に伴う調査で古墳時代後期の河川跡をそれぞれ検出している。また、当研究会が本遺跡内で実施した発掘調査[註3]件数は現在のところ、永畑町３丁目で４件、植松町５・７丁目で２件の計６件を数える。そのなかで特筆すべき成果として、平成５年度に共同住宅建設に伴って実施された第３次調査が挙げられる。この調査では、弥生時代前期～中期にかけての居住域あるいは墓域を示唆する溝[註4]、古墳時代前期の落ち込み状遺構、奈良時代の生産遺構および農耕祭祀に関連するとみられる土



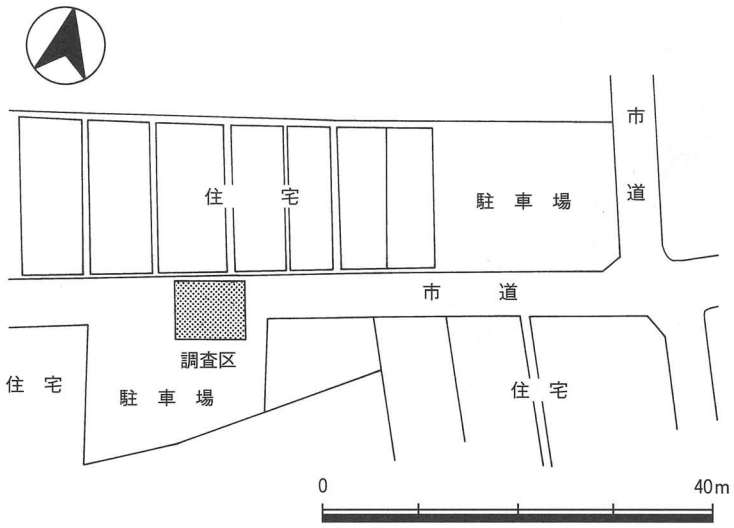
第１図　調査地位置および周辺図（Ｓ＝１／5,000）

釜・竈や日常雑器類、平安時代末から鎌倉時代にかけての生産域といった遺構・遺物が重層的に検出され、本遺跡の動向を知る上で貴重な成果を得ている。

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道工事（７－20工区）に伴うもので、当研究会が当遺跡内で実施する第４次調査（ＵＭ95－４）となる。調査対象となる立坑の規模は、南北長6.0m×東西長7.2mの面積43.2㎡を測る。掘削深度は、現地表（T.P.＋10.0m前後）から５m前後を測る。調査の方法は現地表から0.6m前後の盛土・撹乱層部分を重機により排除した後、以下、4.4m前後間の土層を重機と人力を併用して上から順次層理に従って掘削・精査を行い、遺構・遺物の検出に努めた。



第２図　調査区位置図（Ｓ＝１／800）

調査の結果、T.P.＋8.5m前後（第１遺構面）で中世に比定される溝１条（ＳＤ－101）・奈良時代に比定される溝４条（ＳＤ－102～ＳＤ－105）とT.P.＋6.4m前後（第２遺構面）で弥生時代中期末に比定される土坑１基（ＳＫ－201）・溝４条（ＳＤ－201～ＳＤ－204）を検出した。全体の遺物量は包含層も含め、コンテナバットで３箱を数える。

第２節　基本層序

調査区内で確認できた堆積土層は第０層～第12層の計13層である。以下、調査区内で普遍的にみられる堆積層について概説する。なお、記述以外の堆積土層については**第３図**を参照されたい。

第０層：盛土（客土）および撹乱層（T.P.＋9.5～10.0m）は、現代の道路造成時の客土および旧水道管埋設工事等の撹乱によって構成されるもので、層厚0.5m前後を測る。

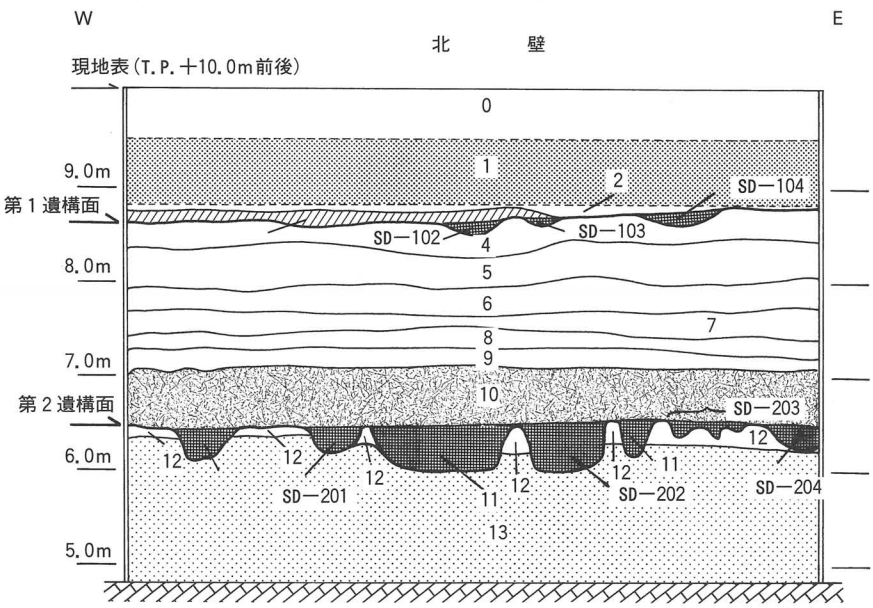
第１層：7.5YR7/6橙色極細粒砂（T.P.＋8.9～9.5m）は層厚0.6m前後を測るもので、含有する土器片と周辺における既往の調査から、中世頃の河川の氾濫による洪水層と思われる。

第２層：7.5YR7/8黄橙色シルト（T.P.＋8.8m前後）は層厚0.1m前後を測る水成による堆積層で、遺物は含まれない。

第３層：10YR3/3暗褐色シルト（T.P.＋8.7m前後）は層厚0.1m前後を測る土層で、層内には古墳時代～奈良時代の遺物が含まれるが、調査区西部にしか見られない。

第４層～第９層間(T.P.＋7.0～8.5m)に堆積する1.6m前後を測る灰色系シルトと粘土の互層は、周辺における既往の調査から弥生時代後期～古墳時代に相当すると思われ、度重なる河川の氾濫を明示する。遺物は皆無であり生活痕跡は確認されない。

第10層：N3/暗灰色～N2/黒色細礫混じり粘土質シルト(T.P.＋6.4～7.0m)は弥生時代中期末（畿内第Ⅳ様式新段階）に比定される遺物包含層である。本層内では上層よりも下層に遺物が多く含まれる。



【層　序】
第０層：盛土（客土）および撹乱層
第１層：7.5YR7/6橙色極粗粒砂
第２層：7.5YR7/8黄橙色シルト
第３層：10YR3/3暗褐色シルト
第４層：7.5YR7/3にぶい橙色～10BG6/1青灰色シルト
第５層：N6/灰色砂質シルト
第６層：N7/灰白色極粗粒砂
第７層：N5/灰色砂質シルト
第８層：N5/灰色シルト質粘土
第９層：5B6/1青灰色シルト質粘土
第10層：N3/暗灰色～N21黒色細礫混じり粘土質シルト
第11層：2.5YR3/1黒褐色細礫混じり砂質シルト
第12層：10GY7/1明緑灰色シルト
第13草：N8/灰白色細粒砂～粗粒砂

【遺構内埋土】
SD－102～SD－104→2.5YR3/1黒褐色細礫混じり砂質シルト
SK－201・SD－201～SD－204→N3/暗灰色細礫混じり粘土質シルト

第３図　北壁断面図(Ｓ＝１／80)

第11層：2.5YR3/1黒褐色細礫混じり砂質シルトは、弥生時代中期末（畿内第Ⅳ様式新段階）に比定される遺構内埋土と考えられる。

第12層：10GY7/1明緑灰色シルト（T.P.＋6.3m前後）は層厚0.1m前後を測る弥生時代中期末（畿内第Ⅳ様式新段階）の遺構構築層にあたる。

第13層：N8/灰白色細粒砂～粗粒砂は層厚1.6m以上を測る厚い砂層の堆積で、周辺における既往の調査から弥生時代中期以前の埋没河川である可能性が強い。

第３節　検出遺構と出土遺物

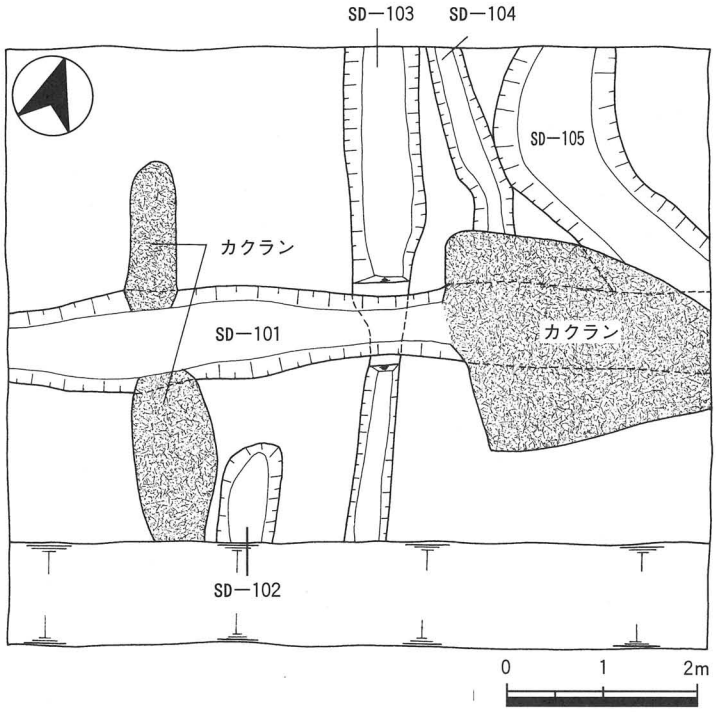
第１遺構面

＜中世＞

溝（ＳＤ）

ＳＤ－101

調査区中央で東西に伸びる。結果的に水道管埋設工事の際の撹乱により奈良時代の遺構面と同一面で捉えることとなったが、遺構内遺物および埋土の状況から中世に比定される。溝の東部約1/3は撹乱によって削平されている。規模は、幅0.6～0.9m・深さ0.3m前後を測る。断面の形状は「Ｕ」字形を呈する。埋土は浅黄橙色細粒砂の単一層で、河川の氾濫によって埋没した様子が窺える。内部からは土師器および瓦質土器の小破片が僅かに出土したが図化できるものはなかった。



第４図　第１遺構面実測図（Ｓ＝１／80）

＜奈良時代＞

溝（ＳＤ）

ＳＤ－102

調査区の南西部で検出した。東隣で検出した溝ＳＤ－103に並行して南北方向に伸びる。規模は、検出長1.0m・幅0.6m前後・深さ0.17mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は黒褐色細礫混じり砂質シルトの単一層で、遺物は出土しなかった。

ＳＤ－103

調査区中央で南北方向に直線的に伸びる。中央部は、東西方向に伸びる中世の溝ＳＤ－101によって一部切られる。規模は幅0.3～0.7m・深さ0.09mを測る。断面の形状は椀形を呈する。埋土は黒褐色細礫混じり砂質シルトの単一層である。遺物は弥生土器：壺、須恵器：壺、土師器：皿、土師器：甕が出土した。その中で図化できたものは、弥生土器壺（１）、須恵器長頸壺（２）、土師器皿（３）および甕（４）の４点である。

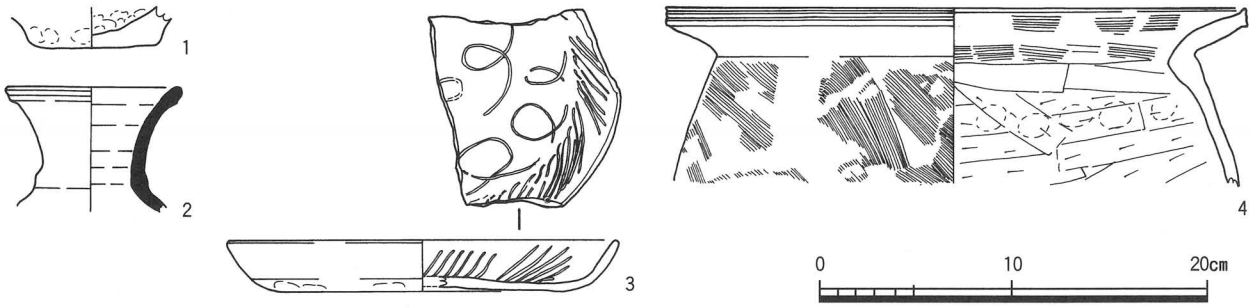
弥生土器壺（１）は底部のみ残存するもので、層位的に混入品と思われる。

須恵器長頸壺（２）は、すぼまった頸部から外反して伸びる口縁部を持ち、口縁端部は肥厚して外面に弱い凹凸を有す。

土師器皿（３）の内面には、口縁部に１段の放射状暗文と底部内面には連弧状暗文が施される。

土師器甕（４）は、大きく外反する口縁部を有し、口縁端部外面には２条の凹線がめぐらされる。

土師器皿（３）と土師器甕（４）については時期的に平城宮Ⅱ～Ⅲに併行するものである。[註5]



第５図　ＳＤ－103出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

ＳＤ－104

ＳＤ－103の東隣で検出した。南部は現代の攪乱によって削平されているため詳細は不明であるが、ＳＤ－103と並行して南北方向に伸びるものと推定される。規模は幅0.4m前後・深さ0.08mを測る。断面の形状は浅い椀形を呈する。埋土は黒褐色細礫混じり砂質シルトの単一層である。

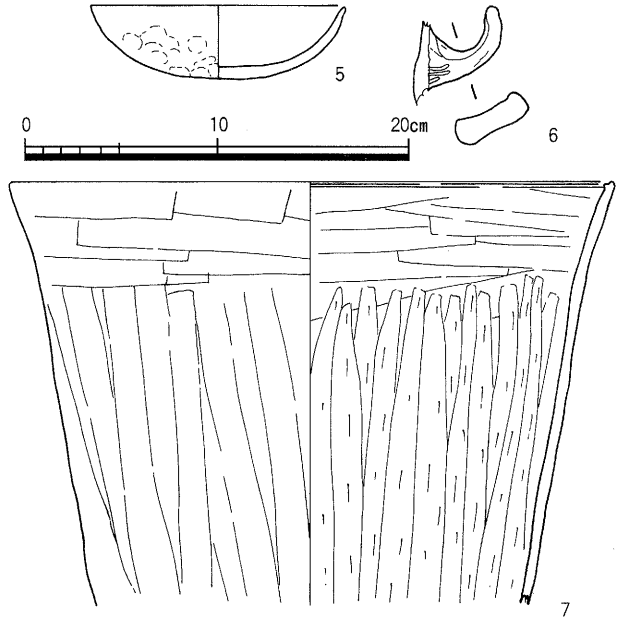
内部からは土師器の小破片が僅かに出土したが、図化できるものはなかった。

ＳＤ－105

調査区の北東隅で検出した。北－南東方向に彎曲して伸びる溝である。南東部の一部は攪乱によって削平される。規模は幅1.0～1.2m・深さ0.15m前後を測る。断面の形状は皿形を呈する。埋土は黒褐色細礫混じり砂質シルトの単一層である。内部からは土師器類が僅かに出土した。その中で図化できたものは、土師器杯（５）、土師器把手（６）、土師器甑（７）の３点である。

杯（５）は、小さな平底から内彎しながら斜上方に伸びる口縁部に至る。平城宮Ⅲに併行するものと思われる。

（６）は甑または鍋の把手とみられ、舌状を呈する。甑（７）は、口縁端部をヨコナデすることによって内傾する面を作っている。（６）の把手と（７）の甑は出土地点が近接していることと胎土・色調が類似することから同一個体である可能性が高い。

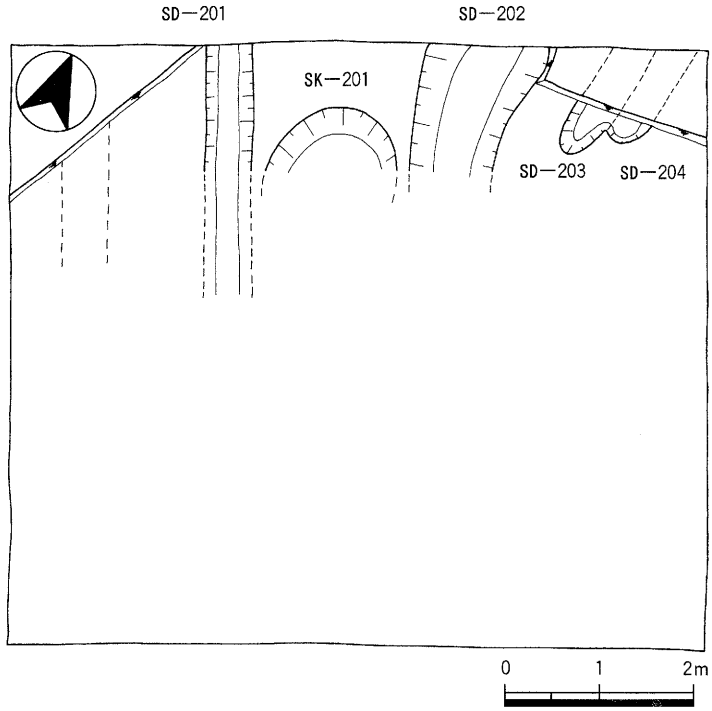


第６図　ＳＤ－105出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

第２遺構面

＜弥生時代中期末＞

該期の遺構面については、ベース層となる第12層10GY7/1明緑灰色シルトが調査区南部で希薄になるのにくわえ、その下層となる第13層N8/灰白色細粒砂～粗粒砂からの湧水が著しく、各遺構の南部を明確に捉えることができなかった。よって、各遺構の掘形および法量等については、**第３図・第４図**に示す様に調査区内の平・断（壁）面からの復原・推定が多分に含まれるものである。なお、遺構および包含層から出土した土器類は、すべて弥生時代中期末、型式的には河内Ⅳ－４様式[註6]に比定されるものである。



第７図　第２遺構面実測図（Ｓ＝１／80）

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－201

調査区の北部中央で検出した。平面形状は径1.3m前後のほぼ円形を呈するものと思われる。深さは最深部で0.5m前後

を測る。断面の形状は、やや偏平な逆台形を呈する。埋土は暗灰色細礫混じり粘土質シルトの単一層であるが、下位にはレンズ状に薄く炭化物が堆積する。内部からは壺・甕・高杯・鉢・砥石が出土した。そのなかで図化できたものは、広口壺（８・10)、無頸壺（９)、壺（11・12)、甕(13)、高杯（14)、砥石（15）の計８点である。

広口壺（８・10）の口頸部はいずれも垂下して面を持つ口縁を有するが、（８）の小型のものが無紋であるのに対し、(10）の大型は外面を簾状文によって加飾される。

無頸壺（９）の口縁部は、肥厚させて折り返すものである。

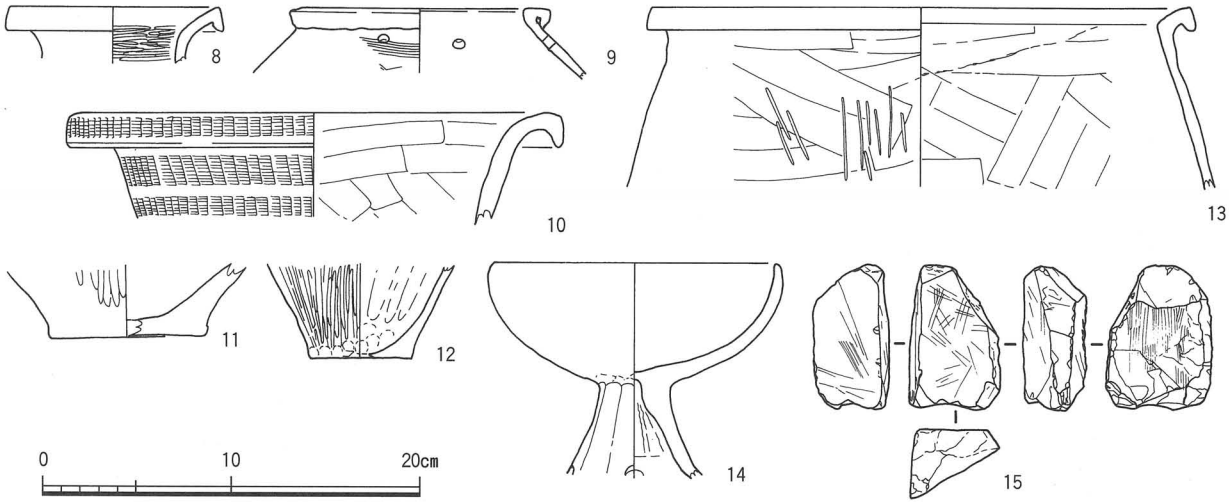
壺（11）は底部のみの残存で、外面を縦方向のヘラミガキによって調整される。

壺（12）は、底部が穿孔されている。

甕（13）は口縁端部の折り返しが顕著に窺えるが、外面が摩滅気味で調整が不明瞭である。該期の特徴から推定すると、この種の甕は外面全体をヘラミガキ調整されるものと思われる。

高杯（14）は椀形の杯部を有するもので、弥生時代中期末から後期（河内第Ｖ様式）へと継続される形態である。

砥石（15）は砂岩製で、４面に使用痕が確認される。



第８図　ＳＫ－201出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

溝（ＳＤ）

ＳＤ－201

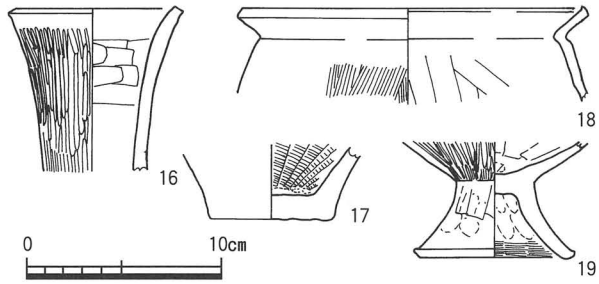
ＳＫ－201の西側で検出した。南北方向に伸びる溝と思われる。確認できた規模は、検出長2.5ｍ・幅0.45ｍ前後・深さ0.3～0.4ｍを測る。溝底は北部へいくにしたがい徐々に深さを増す。断面の形状は、椀形を呈する。埋土は暗灰色細礫混じり粘土質シルトの単一層である。遺物は土器の小破片が僅かに出土したが、図化できるものはなかった。

ＳＤ－202

ＳＫ－201の東側で検出した。ＳＤ－201に並行して伸びる溝と推定されるが、北部の調査区外に向かってやや広がりをみせるものと推定される。確認できた規模は、検出長0.85ｍ・幅0.6～1.0ｍ・深さ0.3～0.4ｍを測る。溝底はＳＤ－201と同様、北部へいくにしたがい徐々に深さを増す。断面の形状は、南部では椀形、北部では「Ｕ」字形を呈するようになる。埋土は暗灰色細礫混じり粘土質シルトの単一層である。遺物は弥生時代中期末に比定される壺・甕が出土した。そ

のなかで図化できたものは、細頸壺（16）・壺の底部（17）・甕（18）・脚台部（19）の４点である。

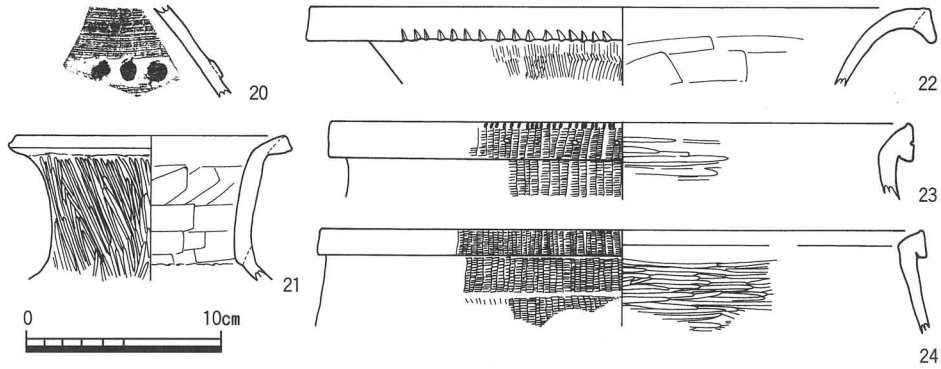
細頸壺（16）は、その名の通り細長い筒状の口頸部をもつ壺で、口縁端部は外傾する面を有する。口頸部に簾状文を有する形態から引き継がれるものであろう。



第９図　ＳＤ－202出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

壺（17）は底部のみの残存で、平底を呈し、内面にはクモの巣状のハケ目が見られる。

甕（18）は頸部のくびれが鋭く、口縁端部には外傾する面を有する。体部外面はハケ目調整される。



第10図　ＳＤ－203出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

（19）は小型の台付の鉢か壺の脚台であろう。

ＳＤ－203・ＳＤ－204

調査区北東隅で検出した。これらの溝２条は、並行して北東－南西方向に伸びるものと推定されるが、制約された調査区であるうえ、遺構構築層の下層（第13層）からの湧水が著しいため、遺構の全容を明確に捉えることができなかった。確認できた検出長はＳＤ－203が1.4m、ＳＤ－204が1.2mで、双方とも幅0.3m前後・深さ0.15mを測る。また、断面の形状は双方ともに椀形を呈し、埋土は暗灰色細礫混じり粘土質シルトの単一層である。出土遺物についてはＳＤ－203から壺・甕・鉢等が出土したが、ＳＤ－204から遺物は出土しなかった。ＳＤ－203から出土した遺物のなかで図化できたものは、壺（20）、広口壺（21・22）、大型鉢（23・24）の５点である。

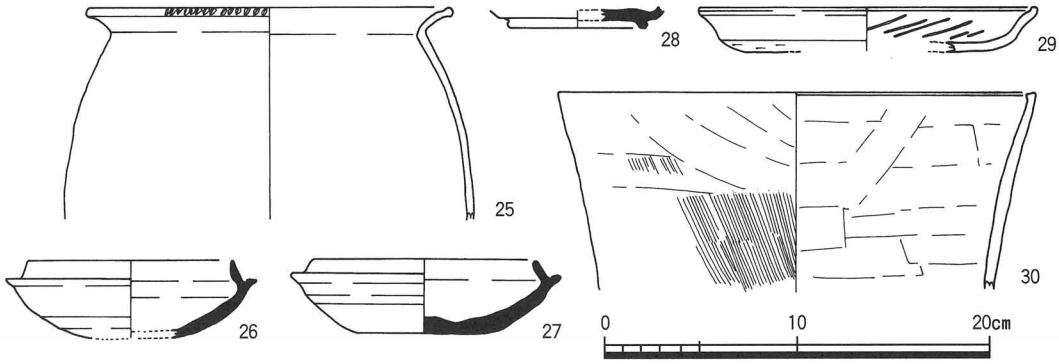
（20）は小破片のため図化できず拓本のみであるが、その形態から壺の体（肩）部片と思われる。簾状文と円形浮文で加飾される。

広口壺（21）は頸部外面に密にヘラミガキが施される。一方（22）の広口壺は、垂下した口縁下端部にキザミ目が施される。

大型鉢（23・24）は双方とも大型に類し、口縁端部を下方に垂下させ、口縁部を含め胴部上半を幅広の簾状文で加飾するもので、該期に盛行をみる。また、（23）には口縁端部に刺突文、さらにその上端にはキザミ目が施される。

〔遺構に伴わない出土遺物〕

遺構に伴わない出土遺物で図化できたものは、古墳時代後期～奈良時代の遺物を含む第３層と弥生時代中期末（河内Ⅳ－４様式）の遺物を含むである第11層からの土器類および砥石やサヌカイト製石器である。以下、層別に個々の遺物について概説する。



第11図　第４層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

＜第３層＞

本層内からは弥生土器甕（25）、須恵器杯身（26・27）、須恵器杯（28）、土師器皿（29）、土師器甑（30）の６点である。

弥生土器甕(25)は層位的に混入品と思われる。体部から外反気味に短く伸びる口縁部が付き、やや肥厚した口縁端部の一部にキザミ目を施す。型式的に弥生時代中期末(河内Ⅳ－４様式)に比定される。

須恵器杯身（26・27）は、立ち上がりの内傾度が強く、端部は単に丸くおさめて面を成さない。中村編年Ⅱ型式２～３段階に比定されよう。

須恵器杯身（28）は、「ハ」[註7]の字形の直立気味な高台が付される。平城宮Ⅱ～Ⅲの所産と思われる。

土師器皿（29）は、平坦な底部から口縁部を外反させた後に端部を内側に肥厚させる。また、口縁部には１段の放射状暗文が施される。時期的に平城宮Ⅱ～Ⅲに併行するものであろう。

甑（30）はＳＤ－105出土の（７）と同種で、内傾する口縁面を有するが、外面はハケ目で調整される。

＜第11層＞

本層内からは水差形土器（31）、広口壺（32・33・35・36）、無頸壺（34）、壺（37～39）、甕（40～44）、高杯（45～47）、鉢（48～50）、台付鉢（51）、底部（52～56）、砥石（57・58）の計28点である。

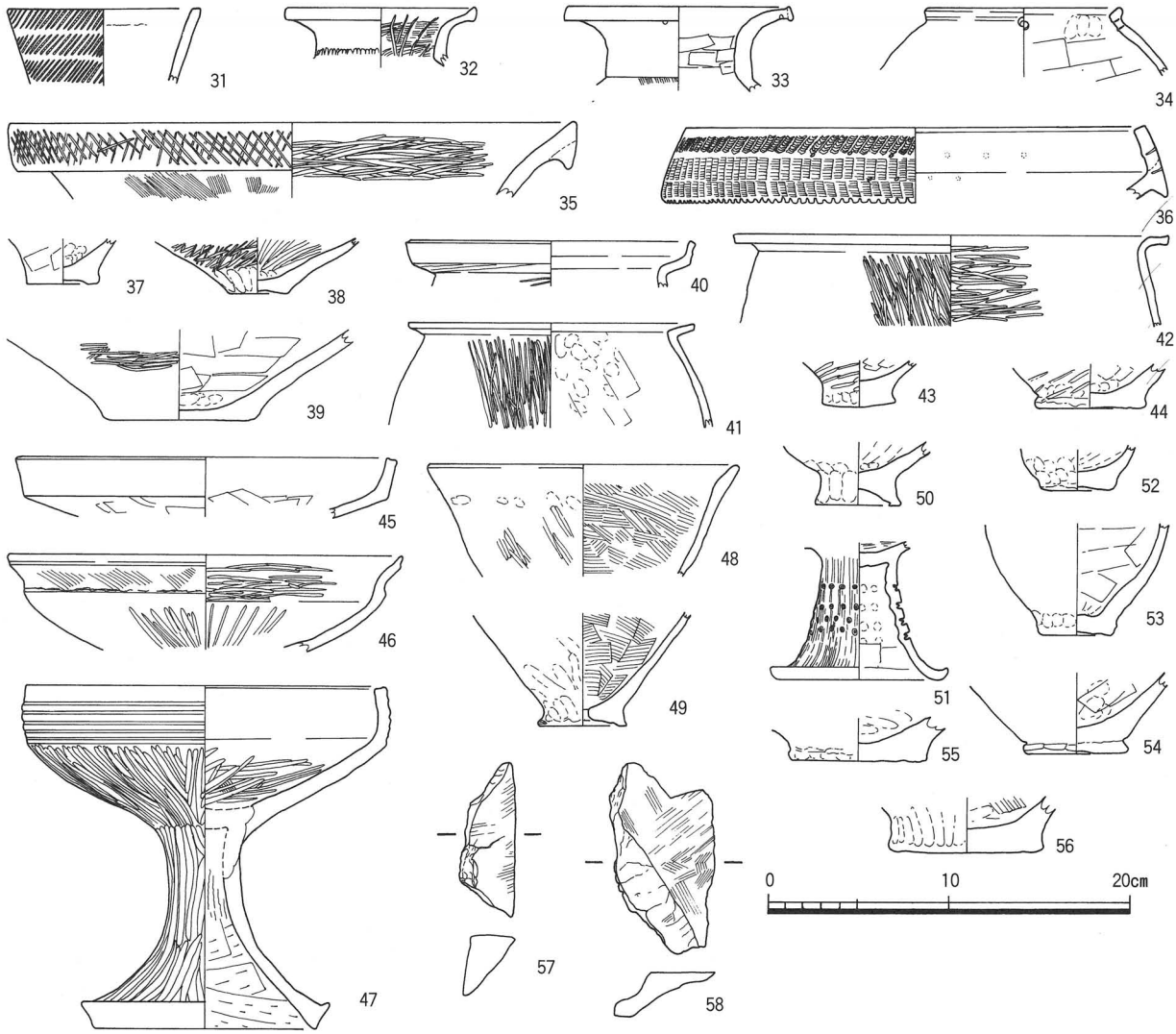
（31）はその形態から水差形土器と思われ、上外方へ直線的に伸びる口縁部に、櫛描列点文が施される。

広口壺（32・33）はいずれも口縁端部を上下に肥厚させ、面を有する。また（33）には口頸部の境目に１箇所だけ刺突穴が見られる。広口壺（35）は、垂下する口縁端部面に斜格子文が施される。広口壺（36）は、垂下させた口縁上に口縁を付加したものである。また、幅広の口縁端部面には１段の櫛描列点文の下位に２段の簾状文と刺突文、さらに下端にはキザミ目を入れるといった加飾の豊かさが窺える。

無頸壺（34）は、口縁を段状に肥厚させ、口縁部と体部の境目に紐孔を有する。

壺（37～39）は、底部のみ残存するもので、（37・38）が上げ底、（39）は平底を呈する。

甕（40～42）３点については、形態および色調・胎土から他地域からの搬入品と思われる。(40)は吉備地域産で、幾重にも接合・成形された口縁部から、さらに摘み上げた受け口状の口縁端部を



第12図　第11層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

有する。（41・42）は瀬戸内系とみられ、双方とも短く水平気味に鋭く外折する口縁部を有し、体部外面には周密に縦方向のヘラミガキが施される。甕（43・44）は、底部のみの残存で、いずれも作りは粗い。

高杯（45）はやや直口気味の口縁を有するもので、河内第Ⅴ様式への移行が窺える。高杯（46）は、杯底部と外反する口縁部との境に稜がめぐる。高杯（46）も（45）と同様、その形態は畿内第Ⅴ様式に盛行する前段階を示唆する。高杯（47）は、直上する口縁部に多条の凹線文がめぐる杯部を有し、裾部は「ハ」の字形を呈して裾端部は面を有する。（47）は時期的に、（45・46）より先出するタイプであろう。

小型鉢（48・49）は該期中でもかなり新しい段階で出現する椀形のものである。（48）は口縁部が体部に比してやや肥厚気味である。（49）は上げ底ふうの底部に一孔を穿つ有孔鉢である。

底部のみ残存するもの（50～56）については、明確に器種が断定できないものである。（50）の上げ底を呈したものは、壺あるいは（49）と同器種の小型鉢とも思われる。（51）は他の類例から鉢の脚台になるものと思われる。脚部外面全体に竹管押捺文が施される。（52～56）については器種が断定できないが、器壁が厚く、粗製である。

砥石（57・58）はいずれも花崗岩質砂岩製のもので、１面にのみ使用痕が確認される。

第４節　出土遺物観察表

※胎土－石→石英、長→長石、雲→雲母、角→角閃石、チ→チャート、赤→赤色斑粒〈（　）内は最大粒径(mm)〉

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量 (cm)　口径 器高	調　整　・　手　法	色　調	胎　土	焼成	遺存度	備　考
1 二	壺 (弥生土器) ＳＤ－103	－ 6.2	底部－ユビオサエ・ナデ	暗灰黄色	石(1)僅・長(3)多・雲(1)僅・角(1)少	良好	底部のみ	
2 二	長頸壺 (須恵器) ＳＤ－103	8.8 －	口縁部－回転ナデ	灰白色	密／長(3)少	良好	口頸部のみ	
3 二	皿 (土師器) ＳＤ－103	20.2 2.6 底径　15.0	口縁部－ヨコナデ 体部－〈外〉ナデ、〈内〉ナデ・放射状暗文 底部－〈外〉ユビオサエ後ナデ、〈内〉ナデ・螺旋状暗文	灰黄褐色	石(5)僅・長(1)多・雲(1)僅・チ(2)僅	良好	１／５	
4 二	甕 (土師器) ＳＤ－103	28.8 －	口縁部－〈外〉ヨコナデ・端部に２条の凹線、〈内〉ヨコナデ後ハケ目 体部－〈外〉ハケ目、〈内〉ヘラナデ・ユビオサエ後ヘラケズリ	黄橙色	長(2)少・雲(0.3)僅・赤(0.5)僅	良好	口縁部～肩部１／５	外面に煤
5 二	杯 (土師器) ＳＤ－105	13.0 3.8	口縁部－ヨコナデ 体部～底部－〈外〉ユビオサエ・ナデ、〈内〉ナデ	浅黄橙色	石(2)少・長(4)多・チ(3)多	良好	完形品	
7 二	甑 (土師器) ＳＤ－105	31.2 －	口縁部－ヨコナデ・ヘラナデ 体部－〈外〉ヘラナデ、〈内〉ヘラケズリ	淡橙色	石(3)僅・長(1)少・雲(1)僅・赤(2)僅	良好	１／４ 底部欠損	
8	広口壺 (弥生土器) ＳＫ－201	10.1 －	口縁部－〈外〉ヨコナデ、〈内〉ヨコナデ・ヘラミガキ	橙色	石(2)多・長(1)少・赤(1)僅	良好	口縁部１／６	
9 二	無頸壺 (弥生土器) ＳＫ－201	11.6 －	口縁部－ヨコナデ・紐孔を有す 体部－〈外〉ナデ(一部ハケ目)、〈内〉ナデ	浅黄橙色	石(1)僅・長(2)少・チ(1)僅・赤(1)僅	良好	口縁部～肩部１／８	
10 二	広口壺 (弥生土器) ＳＫ－201	24.6 －	口縁部－〈外〉簾状文、〈内〉ヘラナデ	にぶい黄褐色	長(4)多・雲(2)僅・角(2)多・赤(1)僅	良好	口縁部１／８	
11 二	壺 (弥生土器) ＳＫ－201	－ － 底径　5.3	底部－〈外〉ヘラミガキ・ユビオサエ・底部穿孔、〈内〉ユビナデ・ユビオサエ	灰黄色	長(3)多・角(2)少・赤(1)僅	良好	底部のみ	
12	同　上	－ － 底径　8.0	底部－〈外〉ヘラミガキ・ナデ、〈内〉ナデ	にぶい黄橙色	石(2)多・長(3)多・チ(1)僅・赤(1)僅	良好	底部１／３	底部穿孔
13 三	甕 (弥生土器) ＳＫ－201	28.6 －	口縁部－ヨコナデ 体部－〈外〉ヘラナデ(一部ヘラミガキ)、〈内〉ヘラナデ・接合痕１条	外－にぶい黄褐色 内－黄灰色	長(2)多・雲(1)僅・角(2)多	良好	口縁部～体部１／６	内面に黒斑
14 三	高杯 (弥生土器) ＳＫ－201	15.0 －	口縁部－ヨコナデ 杯部－ユビオサエ・ナデ 柱状部－〈外〉ヘラナデ・四方孔、〈内〉ナデ・シボリ目	灰褐色	石(2)僅・長(4)多・チ(2)僅・赤(2)僅	良好	口縁部の一部と脚底部欠損	内面に黒斑
16 三	細頸壺 (弥生土器) ＳＤ－202	8.0 －	口縁部－〈外〉ヨコナデ・ヘラミガキ、〈内〉ヨコナデ・ヘラミガキ	浅黄橙色	石(3)少・長(2)少・雲(0.3)多・角(1)少・チ(3)僅・赤(2)僅	良好	口縁部のみ	
17	壺 (弥生土器) ＳＤ－202	－ － 底径　6.4	底部－〈外〉ナデ、〈内〉クモの巣状のハケ目・ユビオサエ	外－褐灰色 内－にぶい橙色	石(7)少・長(2)多・雲(1)少・角(3)少・赤(0.5)僅	良好	底部４／５	内外面に黒斑
18	甕 (弥生土器) ＳＤ－202	17.6 －	口縁部－ヨコナデ 体部－〈外〉ハケ目、〈内〉ヘラナデ	外－にぶい黄橙色 内－淡赤橙色	石(2)少・長(2)少・チ(0.5)僅	良好	口縁部１／５	外面に黒斑
19 三	脚台 (弥生土器) ＳＤ－202	－ － 底径　7.6	底部－〈外〉ヘラミガキ、〈内〉ヘラナデ・ユビオサエ 台部－ユビオサエ・ヘラナデ・ヨコナデ、〈内〉ユビオサエ・ハケ目	黄橙色	石(3)少・長(2)多・雲(0.3)少・チ(3)僅	良好	脚台部のみ	内面に煤
20 三	壺 (弥生土器) ＳＤ－203	－ －	体部－〈外〉簾状文・円形浮文(貼付け)、〈内〉ナデ	灰褐色	石(4)僅・長(3)少・角(1)多	良好	※破片	
21 三	広口壺 (弥生土器) ＳＤ－203	13.6 －	口縁部－ヨコナデ、外面に接合痕１条 頸部－〈外〉ヘラミガキ、〈内〉ヘラナデ・接合痕１条	浅橙色	石(4)多・長(3)多・チ(4)僅	良好	口縁部２／３	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量 (cm) 口径 器高	調　整　・　手　法	色　調	胎　土	焼成	遺存度	備　考
22 三	広口壺 (弥生土器) ＳＤ－203	32.0 －	口縁部－ヨコナデ、端部外面下位にキザミ目、内面に接合痕１条 頸部－〈外〉ハケ目、〈内〉ヘラナデ	灰黄色	石(1)僅・長(3)少・雲(1)少・チ(2)僅	良好	口縁部 １／５	口縁部外面に黒斑
23 三	鉢 (弥生土器) ＳＤ－203	29.8 －	口縁部－〈外〉キザミ目・簾状文・刺突文、〈内〉ヨコナデ 体部－〈外〉簾状文、〈内〉ヘラミガキ	にぶい黄橙色	石(3)僅・長(2)少・角(0.5)少・赤(1)僅	良好	口縁部 破片	
24 三	同　上	31.0 －	口縁部－〈外〉簾状文、〈内〉ヨコナデ 体部－〈外〉簾状文、〈内〉ヘラミガキ	灰褐色	長(3)多・角(3)多・赤(1)僅	良好	口縁部 破片	
25 四	甕 (弥生土器) 第４層	18.6 －	口縁部－ヨコナデ、端部外面の一部にキザミ目 体部－ナデ	浅黄橙色	石(2)僅・長(4)少	良好	口縁部 ～肩部 ２／３	
26 四	杯身 (須恵器) 第４層	10.6 － 受部径12.8 立上り高 1.0	口縁部－回転ナデ 底体部－〈外〉上半－回転ナデ・下半－回転ヘラケズリ、〈内〉回転ナデ	青灰色	密／石(2)僅・長(4)少	良好	１／５	
27 四	同　上	11.6 3.8 受部径13.8 立上り高 0.7	同　上	青灰色	密／石(2)僅・長(5)少	良好	１／３	
28 四	杯身 (須恵器) 第４層	－ － 高台径 7.0 高台高 0.4	底部・高台部－回転ヨコナデ	青灰色	密／長(3)少	良好	高台部 １／３	
29	皿 (土師器) 第４層	17.2 －	口縁部－〈外〉ヨコナデ、〈内〉ヨコナデ後放射状ヘラミガキ 底体部－〈外〉ヘラケズリ、〈内〉ナデ	灰褐色	石(1)僅・長(1)少・雲(0.3)少・赤(1)僅	良好	１／６	
30	甑 (土師器) 第４層	24.6 －	口縁部－ヘラナデ 体部－〈外〉ハケ目、〈内〉ヘラナデ	淡橙色	長(2)少・チ(2)少・赤(2)僅	良好	破片	
31 四	水差形土器 (弥生土器) 第11層	10.4 －	口縁部－〈外〉櫛描列点文、〈内〉ナデ・接合痕１条	黒褐色	長(1)多・角(1)多・赤(1)僅	良好	口縁部 １／３	
32	広口壺 (弥生土器) 第11層	10.4 －	口縁部－ヨコナデ 頸部－〈外〉ナデ・ヘラナデ、〈内〉ヘラミガキ	灰黄色	長(3)少・角(1)多・赤(1)少	良好	口縁部 １／２	
33 四	同　上	12.2 －	口縁部－ヨコナデ、端部外面下位に刺突穴１個有す 頸部－〈外〉ヨコナデ、〈内〉ヘラナデ	橙色	石(1)僅・長(2)少・雲(1)僅・角(1)少・チ(2)少	良好	口縁部 １／６	
34 四	無頸壺 (弥生土器) 第11層	10.5 －	口縁部－ヨコナデ・紐孔を有す 体部－〈外〉摩滅のため不明、〈内〉ユビオサエ・ヘラナデ	明褐色	石(3)僅・長(3)多・角(1)僅	良好	破片	
35 四	広口壺 (弥生土器) 第11層	31.6 －	口縁部－〈外〉斜格子文、〈内〉ヨコナデ 頸部－〈外〉ハケ目、〈内〉ヘラミガキ	外－赤橙色 内－にぶい褐色	石(3)少・長(3)多・雲(1)多・赤(2)少	良好	口縁部 １／４	
36 四	同　上	25.2 －	口縁部－〈外〉櫛描列点文・簾状文・端部下位にキザミ目・刺突文、〈内〉ヨコナデ	にぶい橙色	石(4)僅・長(2)多・雲(1)少・角(0.5)多	良好	破片	
37	壺 (弥生土器) 第11層	－ － 底径　3.8	底部－〈外〉ヘラナデ、〈内〉ユビオサエ	外－黄橙色 内－浅黄色	石(1)僅・長(2)少・雲(2)多	良	底部のみ	外面に黒斑
38 四	同　上	－ － 底径　3.1	底部－ヘラミガキ・ユビオサエ	灰褐色	石(2)僅・長(3)少・雲(0.3)少	良好	底部のみ	外面に黒斑
39 四	同　上	－ － 底径　8.4	底部－〈外〉ヘラミガキ、〈内〉ヘラナデ・ユビオサエ	灰オリーブ～オリーブ黒色	石(6)少・長(6)多・角(2)多	良好	底部 １／２	外面摩滅気味
40	甕 (弥生土器) 第11層	15.3 －	口縁部－ヨコナデ 頸部－ナデ・外面に数条の接合痕	明褐色	石(1)少・長(3)多	良好	口縁部 １／５	吉備系
41 四	同　上	15.7 －	口縁部－ヨコナデ 体部－〈外〉ヘラミガキ、〈内〉ユビオサエ後ヘラナデ	灰黄褐色	長(2)少・角(1)多	良好	口縁部 １／４	瀬戸内系
42 四	同　上	24.0 －	口縁部－ヨコナデ 体部－ヘラミガキ	外－灰黄褐色 内－にぶい黄橙色	石(3)少・長(3)多・チ(3)少	良好	口縁部 １／６	瀬戸内系
43	同　上	－ － 底径　4.0	底部－〈外〉タタキ・ユビオサエ、〈内〉ヘラナデ	明褐色	石(2)少・長(3)多・雲(1)多・角(1)少	良好	底部のみ	
44	同　上	－ － 底径　5.5	底部－〈外〉ユビオサエ後タタキ、〈内〉ヘラナデ・ユビオサエ	灰褐色	石(3)多・長(4)多・チ(3)僅	良好	底部のみ	内面に黒斑

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量 (cm)　口径 器高	調　整　・　手　法	色　調	胎　土	焼成	遺存度	備　考
45 五	高杯 (弥生土器) 第11層	19.8 —	口縁部－ヨコナデ 杯体部－ヘラナデ	浅橙色	石(1)僅・長(0.5)少・雲(0.5)僅	良好	杯部 1／6	外面に黒斑
46 五	同　上	21.6 —	口縁部－〈外〉ヨコナデ後ハケ目・接合痕1条 〈内〉ヨコナデ後ヘラミガキ 杯体部－ヘラミガキ	黄灰色	長(2)多・雲(1)僅・赤(1)僅	良好	杯部 1／4	
47 五	高杯 (弥生土器) 第11層	19.8 18.8 裾径　12.1	口縁部－ヨコナデ・外面に5条の凹線文 杯体部－ヘラミガキ 柱状部－〈外〉ヘラミガキ、〈内〉シボリ目 裾部－〈外〉ヘラミガキ・ヨコナデ、〈内〉ヘラケズリ	にぶい橙色	長(1)多・雲(1)多・チ(2)僅	良好	3／5	外面に黒斑点
48 五	鉢 (弥生土器) 第11層	17.0 —	口縁部－ヨコナデ 体部－〈外〉ユビオサエ後ヘラミガキ、〈内〉ハケ目	にぶい黄橙色	長(3)僅・雲(0.3)少・角(1)僅	良好	1／5	外面に黒斑点
49 五	同　上	— — 底径　4.9	体部－〈外〉ユビオサエ後ヘラナデ、〈内〉ハケ目 底部－ユビオサエ・穿孔	にぶい黄橙色	石(2)少・長(1)多・雲(0.5)少	良好	底部のみ	底部穿孔 外面に黒斑点
50 五	脚台部 (弥生土器) 第10層	— — 底径　4.6	底部－〈外〉ユビオサエ、〈内〉ヘラナデ・ユビオサエ	淡橙色	石(2)少・長(1)多・雲(2)僅	良好	底部 5／6	
51 五	同　上	— — 底径　9.0	底部－〈外〉ハケ目後竹管押捺文・ヨコナデ、〈内〉ナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ	黄灰色	石(3)僅・長(3)少・角(0.5)少	良好	脚底部 3／5	
52	同　上 (弥生土器) 第11層	— — 底径　4.0	底部－ユビオサエ	にぶい橙色	石(1)少・長(4)多・雲(1)少・赤(1)僅	良好	底部のみ	
53	同　上	— — 底径　3.8	底部－〈外〉ナデ・ユビオサエ、〈内〉ヘラナデ	灰白褐色	石(3)多・長(2)少・チ(3)多・赤(0.5)僅	良好	底部のみ	
54 五	同　上	— — 底径　5.3	底部－〈外〉ナデ・ユビオサエ、〈内〉ユビオサエ後ヘラナデ	黄灰色	石(2)僅・長(2)多・角(1)少・赤(1)僅	良好	底部のみ	
55	同　上	— — 底径　8.3	底部－〈外〉ナデ・ユビオサエ、〈内〉ユビオサエ	灰色	石(2)僅・長(3)多・角(3)少	良好	底部のみ	外面に黒斑
56	同　上	— — 底径　8.4	底部－〈外〉ヘラナデ、〈内〉ヘラナデ・ユビオサエ	にぶい橙色	石(2)多・長(3)多・チ(2)多	良好	底部 4／5	外面に黒斑

第3章　まとめ

今回の調査は、公共下水道工事に伴う立坑部分という狭小な調査区ではあったが、主として弥生時代中期末と奈良時代の2時期の生活面を検出することができ、植松遺跡西部における歴史的環境に新たな知見を加える結果となった。奈良時代と同一面で検出した中世については、遺構・遺物の希薄さから該期における遺跡の性格を考察するまでには至らないので、今回は事実報告のみとし、今後周辺における調査の累積をもって改めて検討したい。以下、今回の調査で確認できた弥生時代中期末と奈良時代の2時期について、周辺における既往の調査と照合しながら概観したい。

＜弥生時代中期末＞

該期の遺構については、調査区南半部において構築層下層にあたる第13層からの湧水が著しいため、全容を捉えることができなかったうえに、出土遺物のほとんどが遺構内からではなくその上層にあたる第10層からであり、性格的な位置付けを試みることは困難である。しかしながら、第10層の厚さと土器類以外の石器類、さらにそれらとともに僅かに混在する炭化した獣骨片や木

片から、今回検出した遺構が時間の経過とともに役割を失った後、廃物（ごみ）処理場として当地点が活用されたとすれば、当地点が居住域の一角であったことも考えられよう。いずれにせよ弥生時代中期末頃については当地が生活面を構築するに好条件の安定した土地であったことは否めない。

ここで該期の集落を考える上で周辺における既往の調査をみると、本調査地から南西に約100ｍ地点で平成３年度に八尾市教育委員会によって遺構確認調査が実施されており、T.P.＋6.6～7.3ｍ間で同時期の土器片を含む堆積層が確認されている。[註8]また、跡部遺跡内では本調査地から北西に約120ｍ地点で平成５年度に第12次（ＡＴ93－12）、さらに本調査地からやや西に約200ｍ地点で第13次（ＡＴ93－13）の２件の調査が実施されている。[註9]第12次ではT.P.＋7.3ｍ前後で土器棺墓を１基、第13次では[註10]T.P.＋6.6ｍ前後で溝および河川跡をそれぞれ検出している。以上３件の調査結果からは、本調査地でみつかった遺構との有機的な関連が示唆される。

また、調査区内の土層観察から当地においては弥生時代後期以後古墳時代まで、河川の影響によるところの砂～シルトの層相、さらに層内に含まれる植物遺体や遺物の希薄さ等から、奈良時代頃を迎えるまでは生活域としては不向きな沼沢地であったと想定される。

＜奈良時代＞

該期の遺構についても弥生時代中期末の遺構と同様、４条の溝からだけでその性格を考察するのは困難である。ここで周辺の調査で確認されている同時期の生活面をみると、当地から南西に約120ｍ地点の太子堂遺跡で昭和58年度に当研究会によって実施された共同住宅建設工事に伴う調査（ＴＳ83－１）と、その北側の跡部遺跡で平成３年度に当研究会によって実施された公共下水道工事に伴う[註11]調査（ＡＴ95－21）の２件がある。先の太子堂遺跡ではT.P.＋8.3ｍ前後で方位が墨書されている横板組の井戸や[註12]船材の一部が転用された井戸、さらに径25cm前後の柱根が残る柱穴をはじめ、ピット、土坑、落ち込みといった居住域を明示する遺構が検出されている。また、土師器・須恵器といった多量の出土遺物のなかには数点の墨書土器や土器棺の可能性が強い羽釜、そして土器以外には土馬や馬骨がみつかっている。こういった[註14]遺構・遺物の様相からは「勝軍寺」をはじめとする周辺の古代寺院との有機的な関連が注目される。一方、跡部遺跡では[註15]T.P.＋8.5ｍ前後で先述の太子堂遺跡でみつかった船材が転用されたものと同様の井戸が１基検出されている。これら２件の調査地は今回の調査地とは位置的に近く、居住域が当地まで拡がる可能性が十分考えられる。

以上、今回の調査地の西側に近接した跡部遺跡および太子堂遺跡での調査成果を見た結果、弥生時代中期末および奈良時代の２時期ともに、その生活面が当地から少なくとも西へ拡がっていることは必然である。そのなかでも特に奈良時代については、今回の遺構と太子堂遺跡の第１次調査で指摘されるところの古代寺院あるいは寺域との関わりに興味がもたれる。ここで同遺跡内に目を向けると、当地から距離的に少し離れるが、遺跡南部にあたる地点では当研究会によって第１次～第３次調査（ＵＭ92－１、ＵＭ93－２、ＵＭ93－３）が実施されており、ここでも今回と同時期の２面にあたる生活面が検出されている。なかでも[註16]特筆すべき遺構として、第３次調査（ＵＭ－３）において検出された土坑15基がある。これらの土坑は１箇所に集中しており、[註17]埋土には焼土や灰・炭が確認されることや遺物のなかには農耕祭祀に関わるような土器があることから、調査担当者は豊作祈願や収穫を祝うといった「まつり」が執り行われていたのではないかと

報告している。こういったことから当遺跡では、巨視的にみて西部の居住域に対して南部は生産域であるといった捉え方もできる。[註18] また、当地における該期の歴史的環境を見ると、遺跡内の中央には、河内中北部の往環路の一本にあたる奈良街道（亀瀬越道）が東西に伸びる。北東部に所在する式内社「渋川神社」は、物部一族の祖神を奉ったところとされ、境内には府顕彰天然記念物に指定された樹齢千年の老樹といわれる大楠樹がある。こういった環境からも、とくに奈良時代に関しては、街道の繁栄および神社を基盤とした集落が[註19]当地区に形成されていたことが窺えよう。

註

註１　高木真光　1983.3「第２章　植松遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』八尾市教育委員会

註２　大阪府教育委員会　平成３年度調査

註３　吉田野乃　1992.3「４.植松遺跡（90－433）の調査」『八尾市文化財調査報告26　八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市教育委員会

註４　高萩千秋　1998.3「Ⅰ　植松遺跡第３次調査（ＵＭ93－３）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告59』（財）八尾市文化財調査研究会

註５　代表/森郁夫 1992.9『古代の土器１　都城の土器集成』古代の土器研究会編

註６　寺沢　薫・森岡秀人1989.6『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社

註７　中村　浩　1980.3「第６章　和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ　大阪府文化財調査報告書　第30輯』（財）大阪府文化財センター

註８　前掲３

註９　坪田真一　1994.5「２.跡部遺跡第12次調査（ＡＴ93－12）」『平成５年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

註10　坪田真一　1994.5「３.跡部遺跡第13次調査（ＡＴ93－13）」『平成５年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会

註11　岡田清一　1993.6「Ⅰ　第１次調査（ＴＳ83－１）発掘調査概要報告」『八尾市文化財調査研究会報告26　太子堂遺跡＜第１次調査・第２次調査＞』（財）八尾市文化財調査研究会

註12　高萩千秋　1996.9「Ⅲ　跡部遺跡第21次調査（ＡＴ95－21）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告53』（財）八尾市文化財調査研究会

註13　井戸（ＳＥ－201）は井戸側として横板組を上下２段に組んだもので、下段４枚のうち３枚に小さく縦書でそれぞれ「北一」、「南一」、「西一」の墨書が認められた。「東」の文字は認められなかった。この３枚の横板は、当時の人が方位を意識していたことを物語る好例である。

註14　墨書には、須恵器杯底部に「西」・「寿？」、土師器坏底部に「信」があるが、なかでも土師器高杯の脚底部に「高杯」と墨書されているのが注目される。

註15　現在、八尾市太子堂３丁目の国道25線に面するところに所在する。西暦587年の蘇我・物部戦争の際に聖徳太子が四天王の御加護により戦勝を得ることができたことで、戦地となった当地に建立されたと伝えられる。

註16　①高萩千秋　1993.12「ＸⅥ　植松遺跡第１次調査（ＵＭ92－１）」『八尾市文化財調査研究会報告39　八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』（財）八尾市文化財調査研究会

②高萩千秋　1994.10「Ⅱ　植松遺跡第２次調査（ＵＭ93－２）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告42』（財）八尾市文化財調査研究会

③高萩千秋　1998.3「Ⅰ　植松遺跡（ＵＭ93－３）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告59』（財）八尾市文化財調査研究会

註17　前掲16

註18　住居跡を明示する柱穴・小穴はなく、土坑のみが耕作溝に隣接かつ集中して検出されており、状況的に居住域ではなく生産遺構に関連する農耕祭祀と言うことができる。土坑内から煮炊き用の土器（羽釜・土釜）、移動用竈、日常雑器類等がみつかっている。

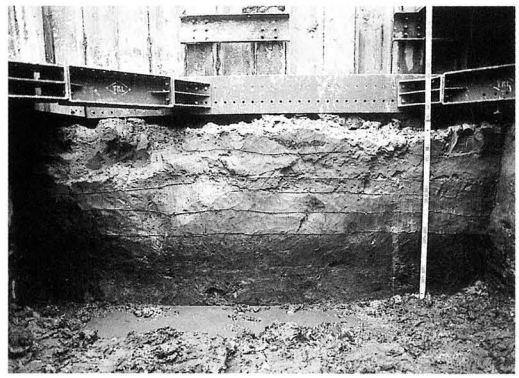
註19　棚橋利光　1987.1『新版　八尾の史跡』

図　　版

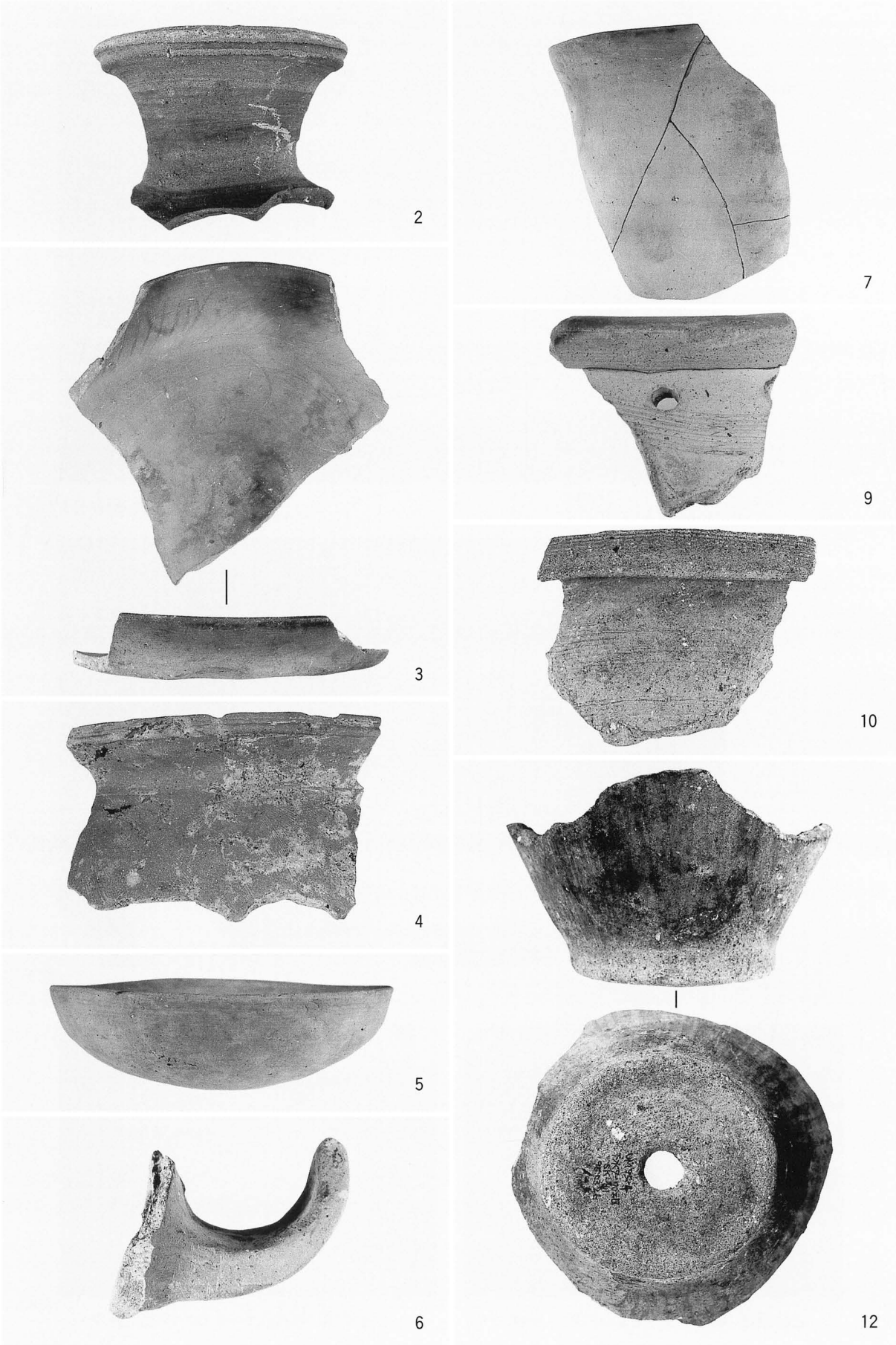
第１遺構面(西から)

第２遺構面(西から)

北壁断面(標高8.0～8.5m付近／南西から)



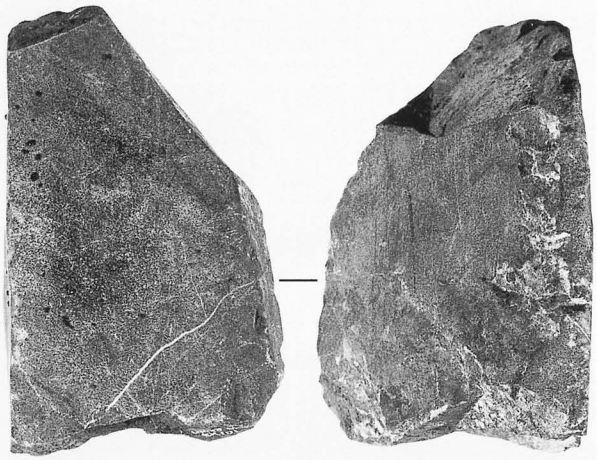
西壁断面(標高6.5～8.0m付近／東から)



ＳＤ－103(１・３・４)、ＳＤ－105(５～７)、ＳＫ－201(９～10・12)　出土遺物

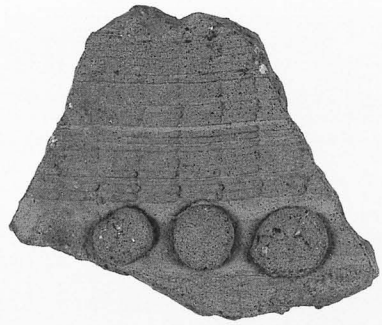
13

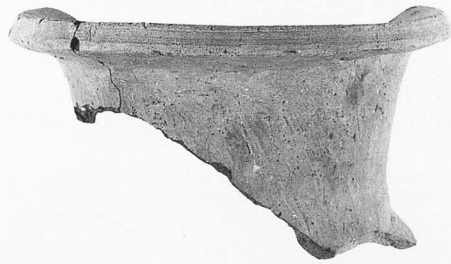
14

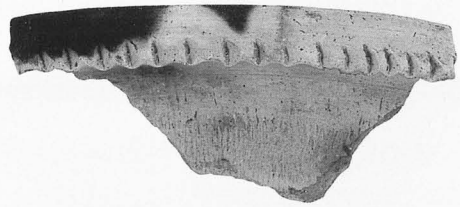

15

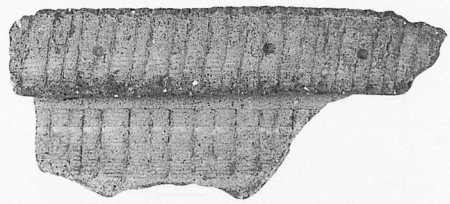
16

19


20


21

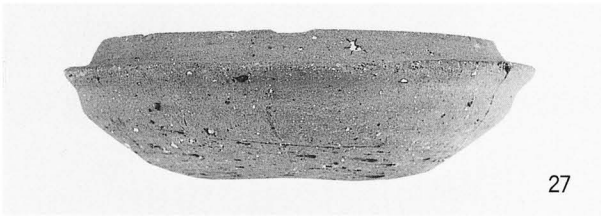

22

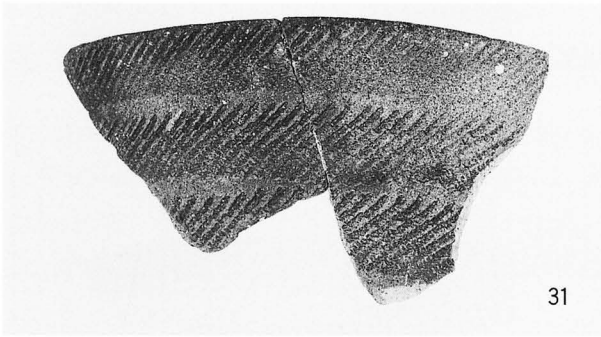

23

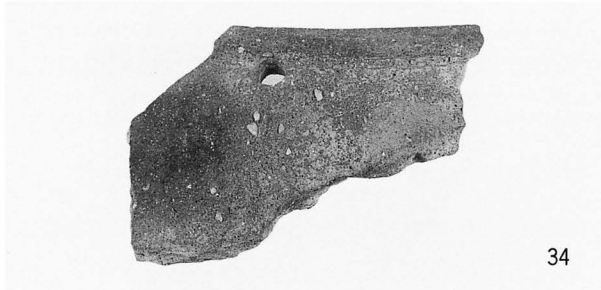
24

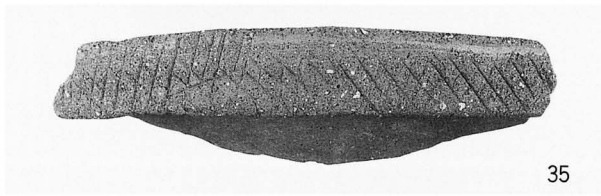
ＳＫ－201(13～15)、ＳＤ－202(16・19)、ＳＤ－203(20～24)　出土遺物

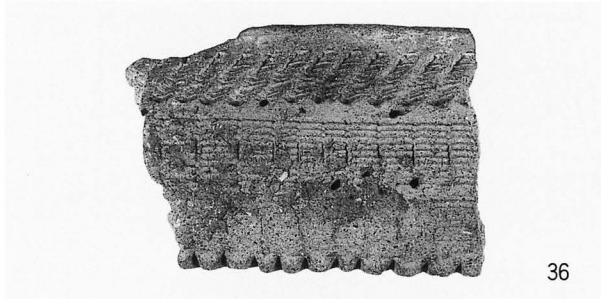
図版四

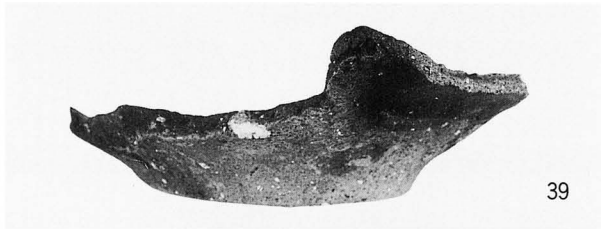






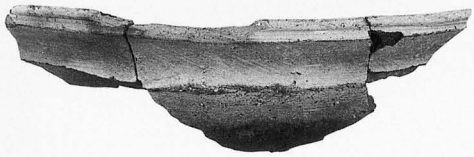




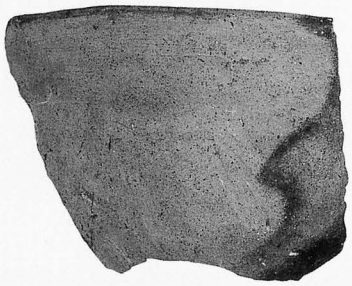


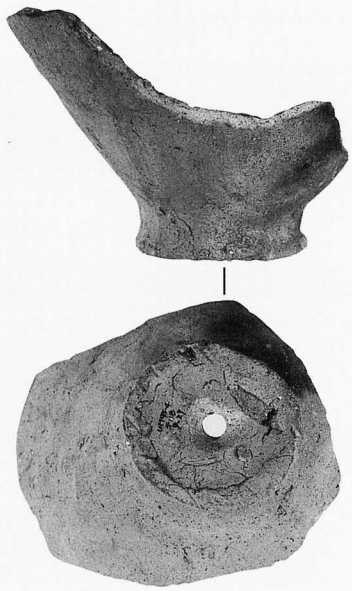
第４層(25～28)、第11層(31・33～36・38・39・41・42)　出土遺物

45


46

47

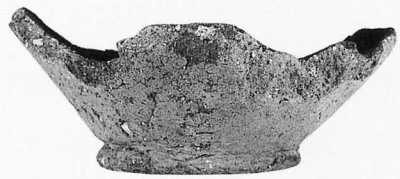

48


49

50

51

53


54

57

58

第11層　出土遺物

Ⅱ　東郷遺跡第50次調査（ＴＧ95－50）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市荘内町1丁目36－1．37番地で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する東郷遺跡第50次調査（ＴＧ95－50）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋509－３号　平成７年12月11日付）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が相馬康男氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成８年１月10日から１月24日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約70㎡を測る。なお、現地調査にあたっては、赤澤茂美・辻野優子・西田真紀・八田雅美・吉田由美恵が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－澤村妙子、遺構・遺物および図面トレース－辻野優子、遺物写真撮影－岡田が行った。

1．調査にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課技師　地村邦夫氏から御教示を得た。ここに記して感謝いたします。

本　文　目　次

第１章　はじめに……15
第２章　調査概要……16
　第１節　調査の方法と経過……16
　第２節　基本層序……16
　第３節　検出遺構と出土遺物……17
第３章　まとめ……20

挿　図　目　次

第１図　調査地位置および周辺図（Ｓ＝１／5,000）……15
第２図　調査区地区割り図（Ｓ＝１／600）……16
第３図　基本層序模式図（Ｓ＝１／20）……17
第４図　遺構平面図（Ｓ＝１／200）……18
第５図　第６層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……19

写　真　目　次

第６層出土遺物写真……19

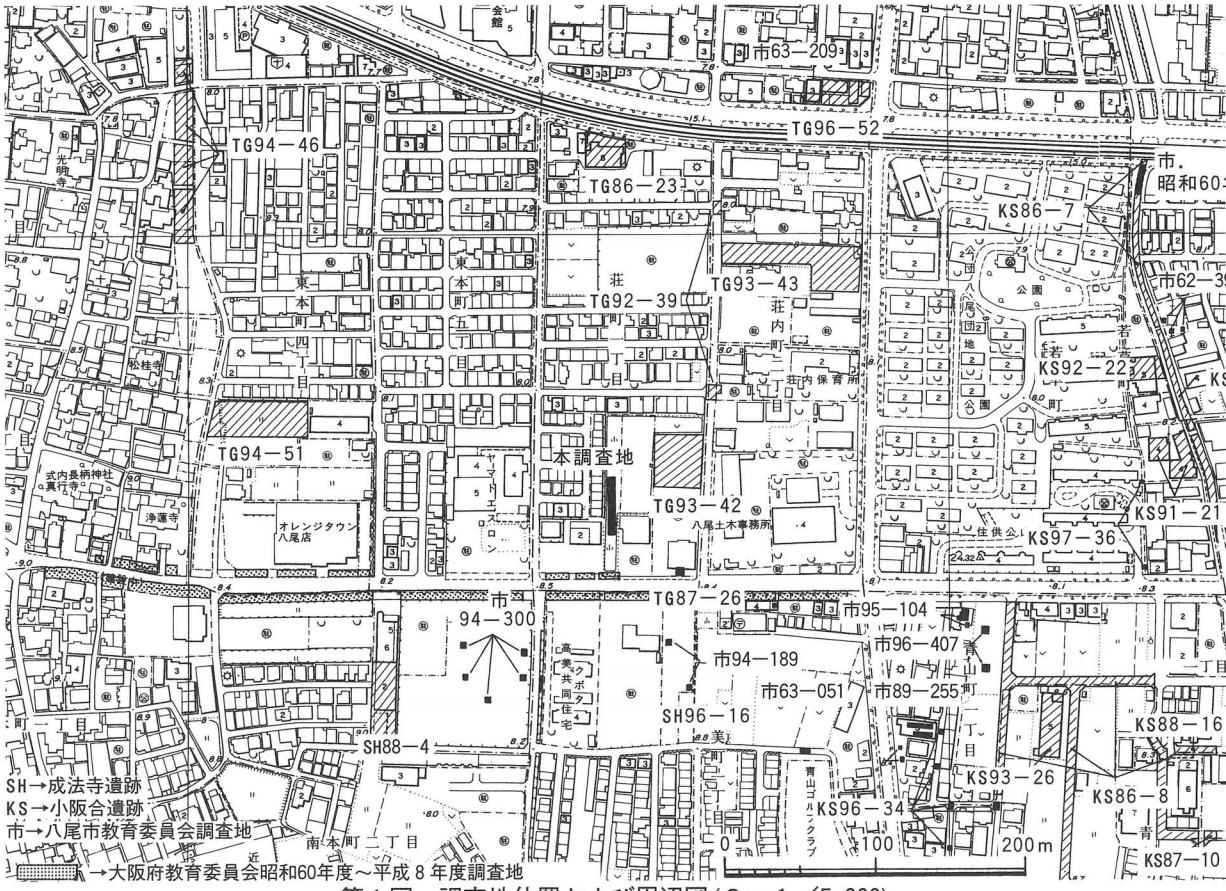
図　版　目　次

図版一　遺構検出面全景(北から)
　　遺構検出面南部(南から)
図版二　遺構面部分＜５区＞(西から)　　遺構面部分＜６区＞(西から)

第１章　はじめに

東郷遺跡は、旧大和川の主流であった楠根川と長瀬川に挟まれた沖積地上に位置する弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、北本町２丁目、東本町１丁目～５丁目、光町１丁目・２丁目、桜ヶ丘１丁目～４丁目、荘内町１丁目・２丁目一帯の東西1.1km・南北0.9kmの範囲にあたる。当遺跡の周辺には北に萱振遺跡、南に成法寺遺跡、西に久宝寺遺跡、南東に小阪合遺跡が隣接している。今回の調査地は遺跡の南東部付近で、東に小阪合遺跡、南に成法寺遺跡が近接する地点である。

当遺跡内では現在までに大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当研究会によって数多くの調査が実施されている。その中でも特筆されるところでは、昭和60年～昭和61年にかけて当研究会が実施した「市立文化会館建設に伴う調査」と、昭和62年～昭和63年にかけて大阪府教育委員会によって実施された「１級河川楠根川改修[註1]工事に伴う調査」がある。前者では、古墳時代前期に比定される方形周溝墓７基・土壙墓１基・土器棺墓２基[註2]が検出され、墓域の存在とともに該期における埋葬形態の究明に重要な資料を提供する結果となった。後者では自然流路から出土した大量の遺物の中に河内以外の吉備・山陰・北陸等の他地域産の土器、さらに弥生時代のものとして近畿では初の出土例となった吉備系の特殊器台や奈良時代から平安時代にかけての遺物の中には、新羅系土器・銅鋺・緑釉陶器・皇朝銭が出土している。ここで、今回の調査地周辺に限ってみると、東方にあたるところで当研究会が第26次と第42次の２件の調査を実施しており、いずれ[註3][註4]



第１図　調査地位置および周辺図（Ｓ＝１／5,000）

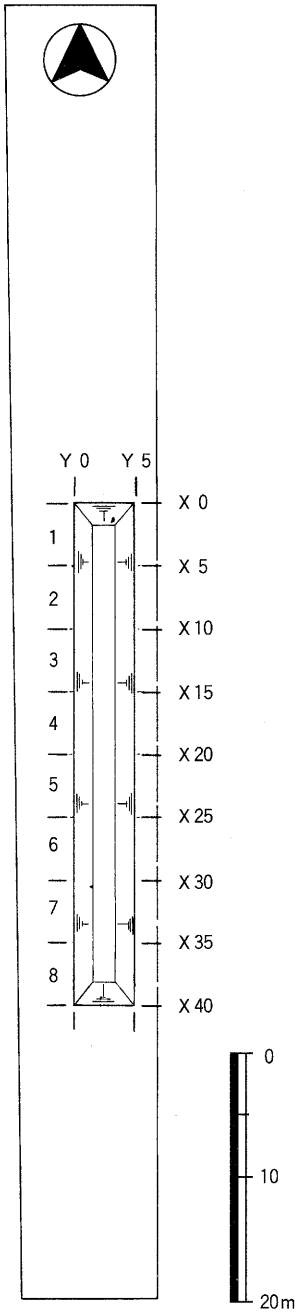
も古墳時代前期の居住域を明示する小穴・土坑・溝が確認されている。また、遺跡名は異なるが南側の成法寺遺跡においては昭和60年以降大阪府教育委員会によって「都市計画道路平野高安線拡幅工事に伴う調査」が継続的に実施されており、その結果、古墳時代前期の集落・円形周溝墓が、奈良時代の自然河川[註5]、中世後期の井戸やピット、近世～近代の集落遺構が検出されている。

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設工事に伴うもので、当研究会が当遺跡内で実施した第50次調査となる。調査対象となる規模は、建物基礎工事によって破壊される南北35m×東西２mの面積約70m²を測る。調査区内の地区割りは、調査区北西隅に任意の基準点を設け、北から５m区画で１区～８区とし、地区表示は北から１区～８区と呼称した。掘削深度は、現地表（T.P.＋8.3m前後）下2.1m前後迄である。掘削方法については敷地内で実施された八尾市教育委員会の遺構確認調査結果をもとに、現地表下1.4m前後の盛土・旧耕土・近代に相当する土層を重機により排除した後、以下0.6m前後を層理に従って人力掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下1.6m前後（T.P.＋6.7m前後）の第７層（2.5Y7/2灰黄色粗粒砂混じり粘土）上面において中世に比定される池状遺構１箇所（**池状遺構－１**）、古墳時代初頭（庄内式期新相）に比定される小穴２個（**ＳＰ－１・ＳＰ－２**）・土坑１基（**ＳＫ－１**）・溝３条（**ＳＤ－１～ＳＤ－３**）・畦畔１条（**畦畔－１**）を検出した。遺物量は全体でコンテナパット１箱である。



第２図　調査区地区割り図(Ｓ＝１／600)

第２節　基本層序

調査区南部では３箇所を数える近代の撹乱によって部分的に削平を受け、周囲付近の土層は青色を帯びたグライ化土壌を呈する。この撹乱については、市内における調査の類例から粘土採取を目的とした「粘土採掘坑」ではないかと推定される。本調査区内では、普遍的に堆積する９層（第１層～第９層）の土層を摘出した。各層とも遺構以外の部分では、変化に富んだ起伏や落込み部分は見られず、フラットな堆積様相を呈する。以下、層毎に記述する。

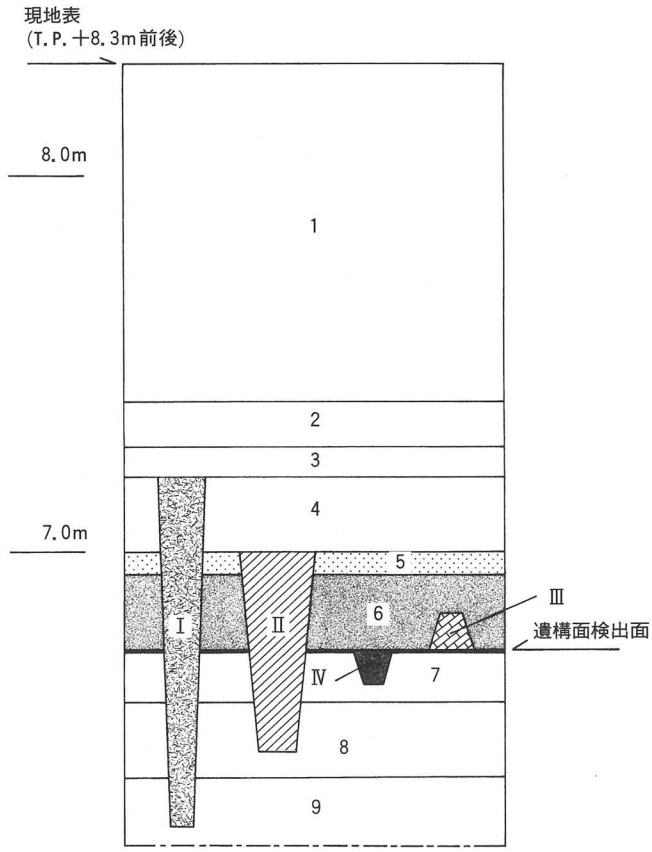
第１層：盛土。層厚90cm前後。客土による現代の整地層である。

第２層：N3/暗灰色シルト。旧耕土。層厚15cm前後。整地される以前の作土層である。

第３層：10BG4/1暗青灰色礫混じりシルト。層厚５～10cm。近世・近代の国産陶磁器片が僅かに含まれる。

第４層：10YR7/1灰白色～5G6/1緑灰色シルト質粘土。層厚20cm前後。須恵器・土師器・瓦器の砕片が含まれる。先述の近代の撹乱は本層上面から掘り込まれる。本層上面の標高は、T.P.＋7.2m前後を測る。

第５層：5YR7/8橙色極細粒砂。層厚５～10cm。河川の氾濫による洪水層と思われるが、本層内に遺物は含まれておらず明確な時期は断定し得ない。しかし、周辺における既往の調査から層位的にみて奈良時代～平安時代頃に推定される。中世の**池状遺構－１**は本層上面から掘り込まれる。本層上面の標高は、T.P.＋7.0m前後を測る。



【層　序】
第１層：盛土
第２層：N3/暗灰色シルト(旧耕土)
第３層：10BG4/1暗青灰色礫混じりシルト
第４層：10YR7/1灰白色～5G6/1緑灰色シルト質粘土
第５層：5YR7/8橙色極細粒砂
第６層：2.5YR5/6明赤褐色～5YR3/2暗赤褐色礫混じりシルト
第７層：2.5YR7/2灰黄色粗粒砂混じり粘土
第８層：10YR7/4にぶい橙色砂質シルト
第９層：N5灰色～5B5/1青灰色粘土

【遺　構】
Ⅰ－撹乱〈粘土採掘坑？〉（近代）
Ⅱ－池状遺構－１（中世）
Ⅲ－畦畔－１（古墳時代初期）
Ⅳ－ピット・土坑・溝（古墳時代初頭）

第３図　基本層序模式図(Ｓ＝１／20)

第６層：2.5YR5/6明赤褐色～5YR3/2暗赤褐色礫混じりシルト。層厚20～25cm。北部にいくほど鉄・マンガン等の酸化沈積物の含有量が多くなる。また、本層内には古墳時代初頭（庄内式期新相）に比定される遺物が僅少ながら含まれる。

第７層：2.5Y7/2灰黄色粗粒砂混じり粘土。層厚10～25cm。南部へいくほど漸次稀薄となる。本層上面は古墳時代初頭（庄内式期新相）に比定される遺構面になると同時に、北部においては該期の水田になる。上面の標高は、T.P.＋6.8m前後を測る。

第８層：10YR7/4にぶい橙色砂質シルト。層厚20cm前後。

第９層：N5/灰色～5B5/1青灰色粘土。層厚20cm以上。近代の撹乱坑は本層まで掘り込まれており、「粘土採掘坑」とする所以の一つである。

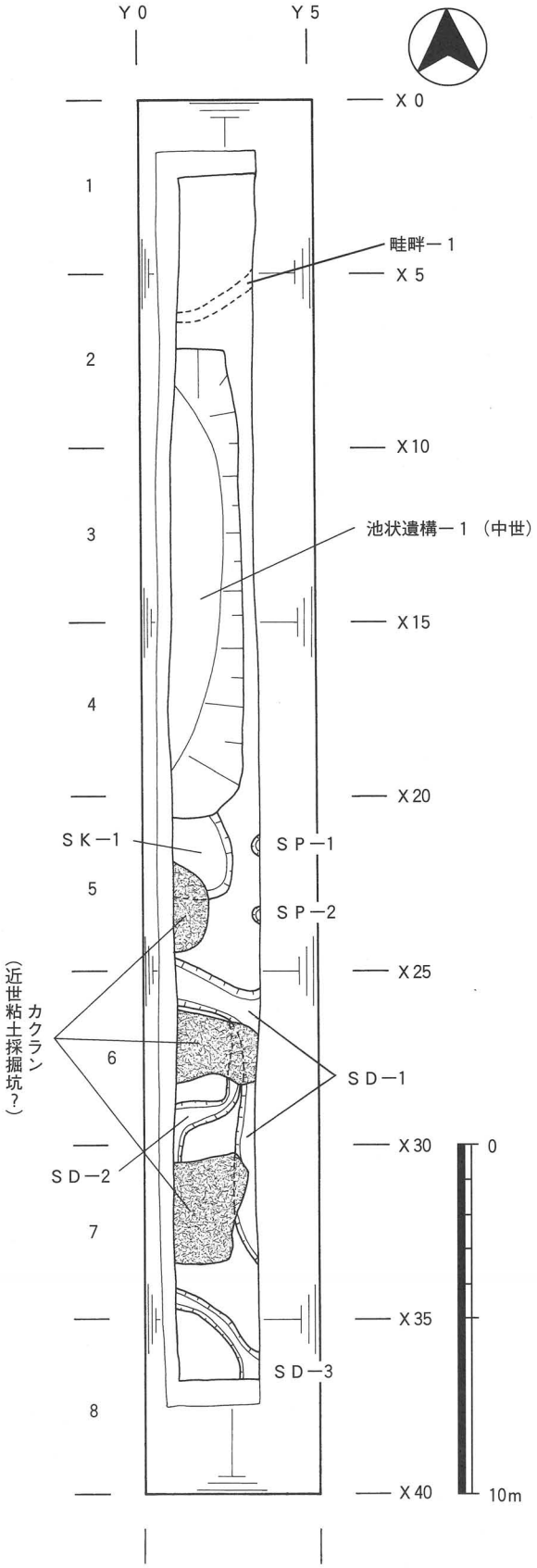
第３節　検出遺構と出土遺物

＜中世＞

池状遺構

池状遺構－１

調査区のほぼ北半部にあたる２区～５区内で検出した。遺構の東肩の掘り込みを確認したのみ



第４図　遺構平面図（Ｓ＝１／200）

で、全容については不明である。検出規模は南北長13.4m・東西長2.0m・深さ0.55mを測る。埋土は褐色系～茶灰色系の礫混じりシルト質粘土と砂質シルトがブロック状に混在しており、短期間に人為的に埋め戻された様子が窺われる。埋土内には、土師器小皿・瓦器・瓦の砕片が少量含まれていたが、明確に時期判定できるものはない。本遺構の性格は、農耕に伴う灌漑用としての貯水場、あるいは農耕上妨げとなる湿地を改善する目的から、ここに集水するよう池状に掘り窪めたものではないかと考えられる。

＜古墳時代初頭（庄内式期新相）＞

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１・ＳＰ－２

５区内で南北に並列する状況で、ＳＰ－１・ＳＰ－２の２個を検出した。いずれも東部は調査区外に至っているため全容は不明である。検出規模は双方とも最大径0.5m・深さ0.1m前後を測る。埋土は黒褐色粘土質シルトの単一層で、遺物は出土しなかった。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

５区で検出した。北部を**池状遺構－１**、南部を近代の攪乱によって部分的に削平されているうえ、西部が調査区外に至っているため全容は不明である。検出規模は、最大径1.7m・深さ0.12mを測る。埋土は黒褐色礫混じりシルトの単一層で、炭化物がブロック状に混入する。内部からは甕・高杯の小破片が出土した。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

６区～７区で検出した。東部は調査区外に至っているが、検出状況から推定して南方から北方に伸びた後、西方へ屈曲して伸

びるものと思われる。規模については確認できるところで、幅1.0m前後・深さ0.07mを測る。埋土はオリーブ黒色シルトの単一層で、内部からは古式土師器の小破片が僅かに出土した。

ＳＤ－２

６区～７区で検出した。南部と北部は近代の撹乱によって削平される。状況的に南部から北部にかけてＳ字状に屈曲して伸びた後、北部でＳＤ－１に合流するものと思われる。規模については確認できるところで、幅0.3～0.7m・深さ0.06mを測る。埋土はオリーブ黒色シルトの単一層で、内部からは古式土師器の小破片が僅かに出土した。

ＳＤ－３

調査区南端部で検出した。南東－北西方向に伸びる溝である。規模は、幅0.4～0.7m・深さ0.09mを測る。埋土はオリーブ黒色シルトの単一層で、内部からは古式土師器の小破片が僅かに出土した。

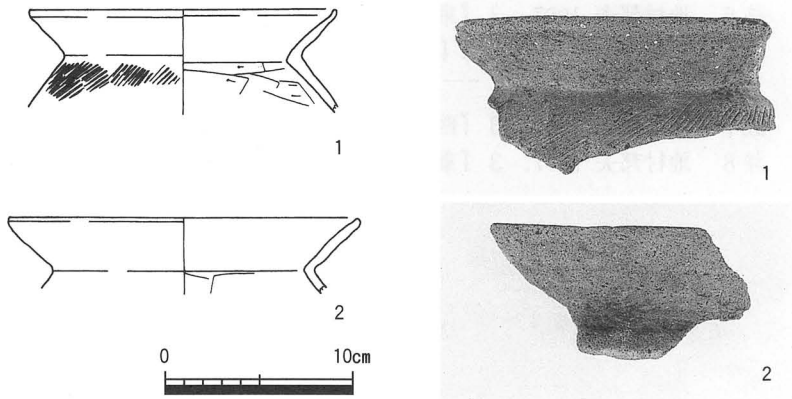
畦畔

畦畔－１

池状遺構－１の北側にあたる調査区北端部で、南西－北東方向に伸びる畦畔１条を検出した。平面的に畦畔を被覆する土層がグライ化し、**畦畔－１**の作土と同化して見極めにくい状況であったが、東西の両壁面の観察から水田に伴う畦畔であると推定される。規模は、東西両壁面と平面の痕跡から推定復原して、幅0.5m・高さ0.2mを測るものと思われる。また、**畦畔－１**の南側は中世の**池状遺構－１**によって掘削・撹乱されているが、北側部分については平坦な上面をもつ土層となっており、ヒトの足跡らしき窪みが数箇所で確認された。

・遺構に伴わない出土遺物

遺構に伴わない出土遺物のうちで、図化できたものは古墳時代初頭（庄内式期新相）に比定される甕２点（１・２）である（**第５図**）。出土層位および地点はいずれも第６層内・５区のＳＫ－１に近いところである。法量は口径が推定復原で、（１）が16.1cm、（２）が18.5cmを測る。調整はいずれも口縁部－ヨコナデ・肩部内面－ヘラケズリであるが、（１）の肩部外面には極細のタタキメ（７本/cm）が顕著にみえる。（２）については、外面の摩滅が著しく明瞭ではないが、（１）と同様のタタキメが施されていると思われる。いずれも胎土色調は淡茶灰色で、0.5mm以下の長石・石英・雲母・角閃石が多量に含まれる。これらの甕は河内型庄内式甕の中でも新段階に位置付けられるものであろう。



第５図　第６層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）および遺物写真（右）

第3章　まとめ

今回の調査では、中世と古墳時代初頭の２時期の生活面を検出した。近代の撹乱については、重機掘削対象部分にあたり綿密な調査はできなかったが、既述したようにその状況から「粘土採掘坑」と考えたい。この類例としては、大阪府堺市の「小阪遺跡」[註6]・大阪府藤井寺市の「西大井遺跡」の２件の調査で、計画的に採掘された粘土採掘坑が確認されている。調査報告では、採掘された粘土[註7]が焼き物に使用された以外に、水田などにおいて水の浸透性を低くするために床土等に利用されたと考えられている。

中世の池状遺構については既述したように、性格的には土質を乾燥させるための地盤改良に伴う施設と思われるが、面的に不十分なところもあり、今後さらなる付近の調査が必要とされる。本調査地付近では現在のところ、該期に関して遺物は散見されるが遺構面が確認されておらず、今回の調査が初めてであり、こういったことからも今後周辺の調査に期待がかかる。

古墳時代初頭（庄内式期新相）の遺構面では、調査区南部で居住域を示唆する小穴・土坑・溝が検出され、東郷遺跡南東部における該期の遺構の広がりを究明する上で有意義であった[註8]。居住域について近隣の調査をみると、既述した南東の第26次および東の第42次で今回より一時期新しい古墳時代前期（布留式期古相）の居住域が検出されている。さらに南側の大阪府教育委員会による一連の「都市計画道路平野中高安線建設工事に伴う東郷遺跡・成法寺遺跡」の調査でも第26次・第42次と同時期の居住域が検出されている。これらを考え合わせると、当地から東方および南方への居住域の移動が想定される。一方、今回調査区北部で検出した畦畔については、狭小な面的制約からすると容認し難いところも多分にあり、生産域の広がりについては今後周辺における調査成果の累積をもって再度検討したい。

註

註１　原田昌則 1987「Ⅲ　東郷遺跡（第20次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　昭和61年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告13（財）八尾市文化財調査研究会

註２　奥 和之 1989．3『東郷遺跡発掘調査概要・Ⅰ —八尾市桜ヶ丘・旭ヶ丘所在—』大阪府教育委員会

註３　高萩千秋 1988「15東郷遺跡（第26次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16（財）八尾市文化財調査研究会

註４　岡田清一 1995「Ⅱ　東郷遺跡（第42次調査）」『東郷遺跡』（財）八尾市文化財調査研究会報告48（財）八尾市文化財調査研究会

註５　地村邦夫 1997．3『東郷・成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅸ』大阪府教育委員会

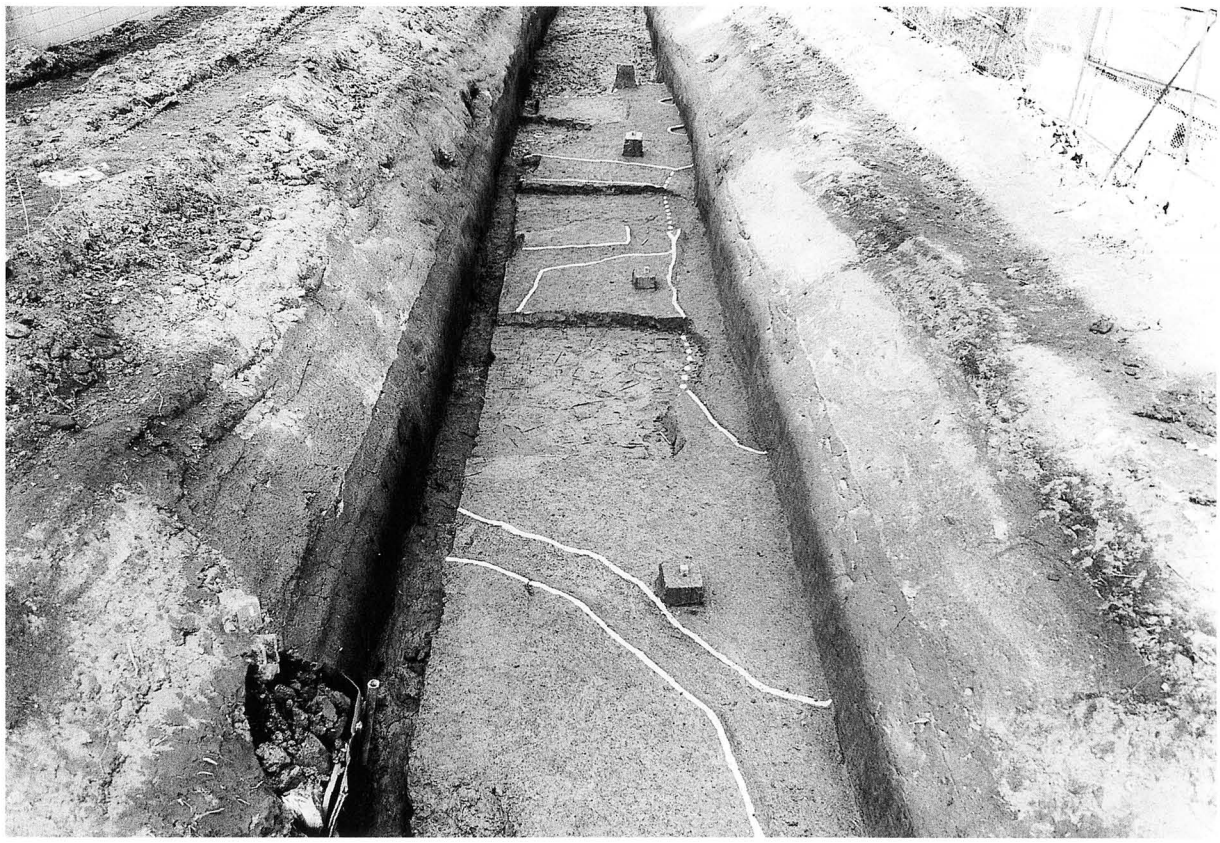
註６　三好孝一他 1989．3『小阪遺跡（南　その１）－調査の概要－』大阪府教育委員会　（財）大阪文化財センター

註７　酒井泰子 1992．3『西大井遺跡発掘調査概要　1990年度』大阪府教育委員会

註８　地村邦夫 1997．3『東郷・成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅸ』大阪府教育委員会

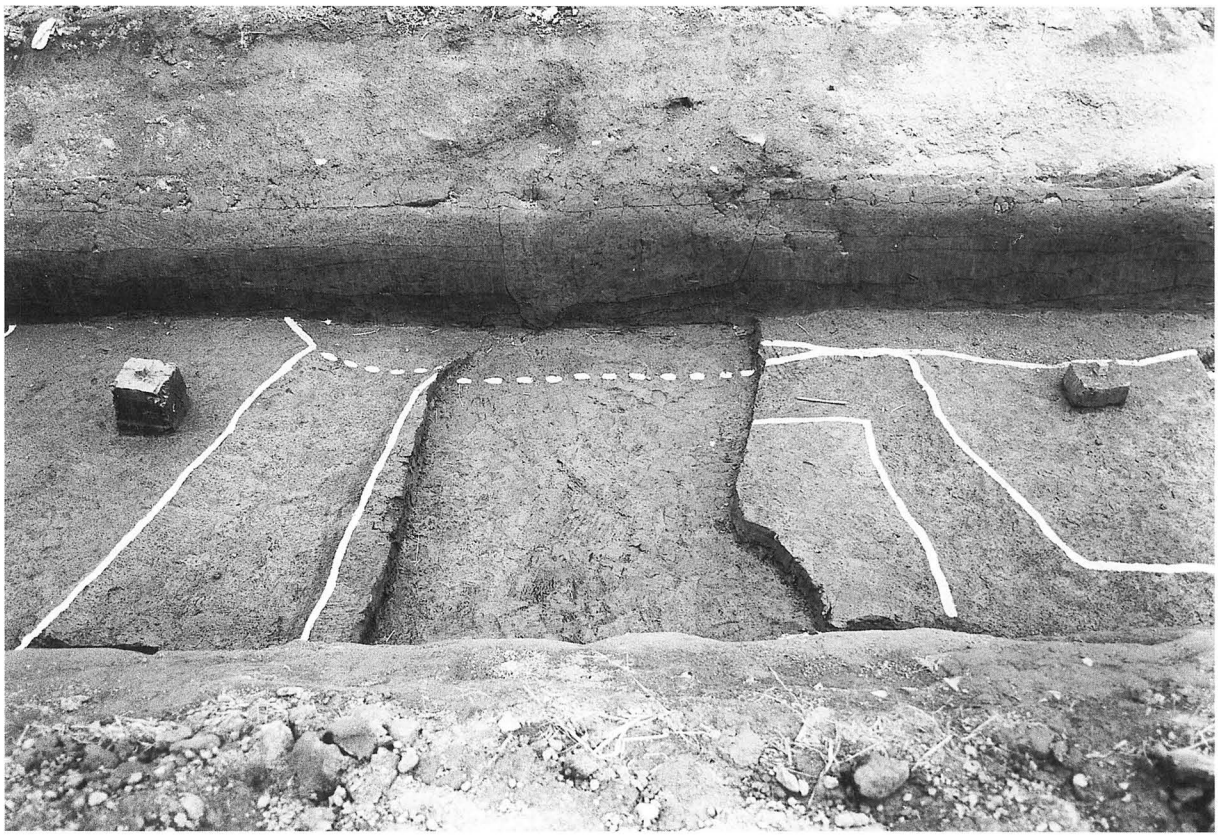
図　　版

遺構検出面全景(北から)



遺構検出面南部(南から)

遺構面部分〈５区〉（西から）



遺構面部分〈６区〉（西から）

Ⅲ　八尾寺内町遺跡第１次調査（ＹＣ95－１）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市本町３丁目106・107番地で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する八尾寺内町遺跡第１次調査（ＹＣ95－１）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋86－４号　平成７年３月14日付）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が巽住宅株式会社から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成７年６月７日～６月22日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約200㎡を測る。なお、現地調査にあたっては、高柳恵美・辻野優子・村井俊子が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－澤村妙子、遺構および遺物の図面トレース－辻野、遺物写真撮影－岡田が行った。

1．石材の鑑定については、八尾市立曙川小学校教諭　奥田 尚氏に御教示を賜った。

本　文　目　次

第１章　はじめに……21
第２章　調査概要……22
　第１節　調査の方法と経過……22
　第２節　基本層序……22
　第３節　検出遺構と出土遺物……24
　第４節　出土遺物観察表……32
第３章　まとめ……34

挿　図　目　次

第１図　調査地位置および周辺図（Ｓ＝１／5,000）……21
第２図　調査区地区割り図（Ｓ＝１／600）……22
第３図　基本層序模式図（Ｓ＝１／40）……23
第４図　第１面　ＳＤ－101平面図（Ｓ＝１／100）……25
第５図　第２面　畦畔痕平面図（Ｓ＝１／100）……25
第６図　第３面遺構平面図および北壁断面図（Ｓ＝１／100）……26
第７図　ＳＫ－302出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……27
第８図　ＳＩ－301出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……28
第９図　ＳＫ－303出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……28
第10図　ＳＫ－303西部　土器出土平面図（Ｓ＝１／20）……30
第11図　下層確認における自然河道検出平面図（Ｓ＝１／200）……31
第12図　第８層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……31
第13図　第９層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……32

写　真　目　次

写真１　調査地近景……35

図　版　目　次

図版一　ＳＤ－101（北から）　第２面 畦畔痕（南から）・同 足跡検出状況（北東から）
図版二　第３面全景（西から）　ＳＩ－301（南から）
図版三　ＳＫ－303（南西から）　ＳＫ－303土器出土状況（西から）　調査区南壁面（北東から）
下層確認トレンチ南壁面（北東から）　調査風景（北西から）
図版四　ＳＫ－302・ＳＩ－301・ＳＫ－303　出土遺物
図版五　ＳＫ－303・第８層　出土遺物
図版六　第８層・第９層　出土遺物

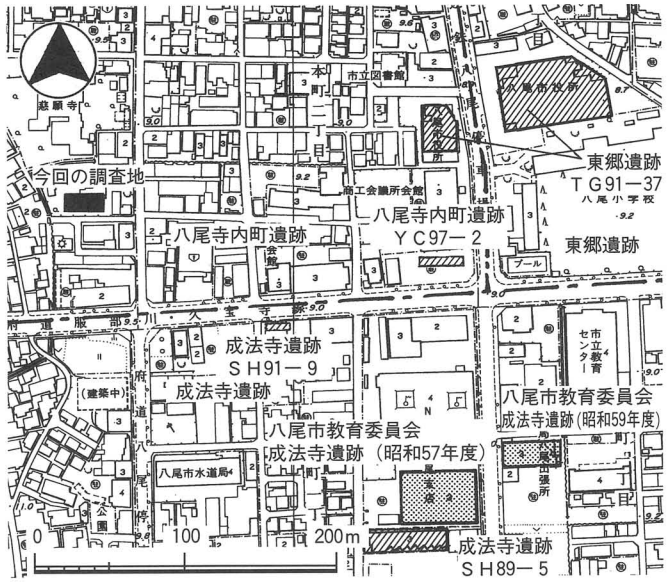
第１章　はじめに

八尾寺内町遺跡は、八尾市の北西部に位置する弥生時代中期～近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、本町２～５丁目一帯の南北0.5km・東西0.3kmがその範囲とされている。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川左岸に形成された沖積地に位置する。周辺の遺跡には、北に宮町遺跡、東に東郷遺跡、南に成法寺遺跡、西に久宝寺遺跡が隣接する。

遺跡名に由来する八尾寺内町は、久宝寺寺内町の住人であった森本七郎兵衛ら17人と慈願寺が久宝寺寺内町を出て、慶長十一年（1606年）に長瀬川沿いの荒野の地を開拓したことに始まるもので、その翌年、東本願寺の掛所として大信寺御坊が建立され、やがて大信寺を中核とする寺内町が形成された。森本七郎兵衛らが久宝寺寺内を出る要因となったのは、同村の土豪であった安井氏の独裁的な特権行為にある。安井氏は天正九年（1581年）に織田信長から制礼を受け、久宝寺屋敷一邑の支配権を付与された後、独裁的かつ専制的な支配権を握った。これに反抗した森本七郎兵衛らは幕府に安井氏排斥を訴えたが、安井氏の勝訴となった為、彼らは新たな自主権を獲得するために久宝寺寺内町を出て現在地を求めたのである。したがって、八尾寺内町成立の経緯については、久宝寺寺内町のように久宝寺門徒集団によって寺家が一切の支配権をもって形成された寺内町とは性格を異にする。

八尾寺内町は、久宝寺寺内町とともにその成立以後現在に至るまで景観保存が計られており、大阪府下においても有数の優れた町並みを残すところである。したがって、遺跡として認識はされているものの、現在まで大規模な開発もなく、発掘調査を通じた寺内町形成以前の考古学的知見については未知なる部分が多いのが現状である。今回実施した当研究会による第１次調査は（ＹＣ95－１）、八尾市教育委員会が実施している小規模な遺構確認調査を除けば、はじめての本格的な発掘調査と言える。

今回の調査地は、行政区画上においては八尾寺内町の南端部に位置するが、実際のところ当時の寺内町区割内に含まれていたか否かについては問題があり、この件に関しては後述する。調査地の北側には、弘安三年（1280年）に河内国渋川郡橘島の久宝寺（現在の八尾市久宝寺）に初代法心が、真宗の道場を建立したのに始まるという「慈願寺」が在する。また、周辺における既往の調査では、当地から南東へ約150ｍ地点で成法寺遺跡第９次（ＳＨ91－９）、東へ約400ｍ地点で東郷遺跡第37次（ＴＧ91－37）の２件の調査が、いずれも平成３年度に当研究会によって実施されている。前者の成法寺遺跡では、弥生時代後期～古墳時代後期に至る土坑・小穴・溝といった集落遺構が検出されている。後者の東郷遺跡では、古墳時代前期の



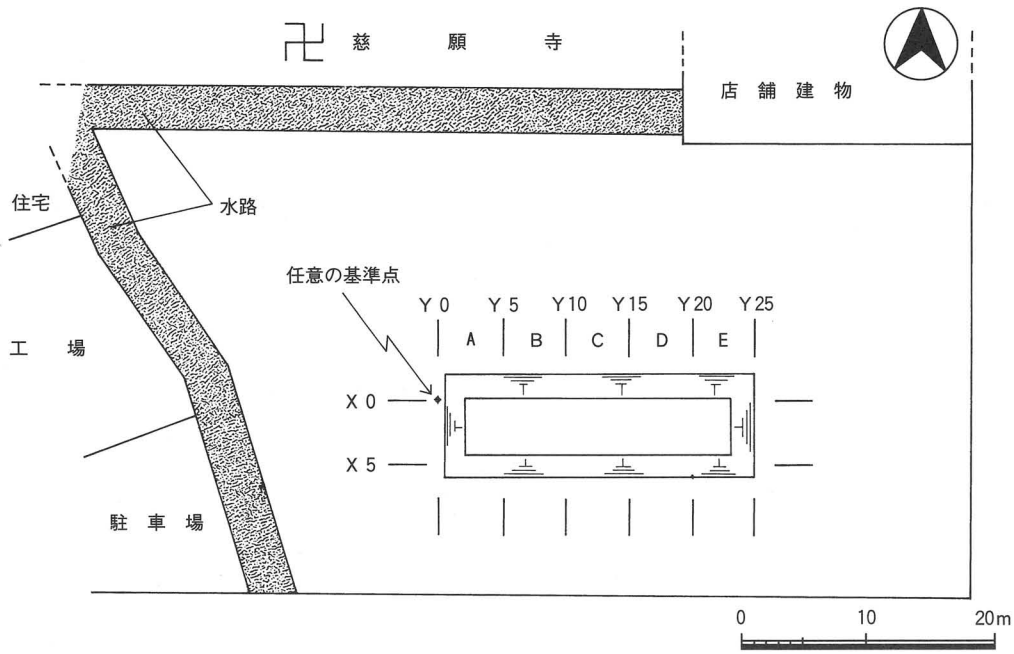
第１図　調査地位置および周辺図（Ｓ＝１／5,000）

溝、古墳時代後期～飛鳥時代にかけての水田および河川、平安時代後期の井戸、近世初頭における屋敷の敷地を区画する溝（堀）が検出されている。

第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設工事に伴うもので、当研究会が当遺跡内で実施する第１次調査（ＹＣ95―１）となる。調査区の規模は、建物基礎工事によって破壊される南北長８ｍ×東西長25ｍで面積200㎡を測る。調査区の位置については、八尾市教育委員会の調査指示書に従って重機により表土部分を掘削したところ、旧建物基礎解体時の撹乱部分が調査区壁面の崩壊を招き、調査に支障をきたすと判断されたことから、協議の結果、調査区全体を今回の工事開発予定位置より南に約８ｍ程移動させることとなった。調査区の地区割りは、調査区北西部に任意の基準点を設置し、西から５ｍ区間で区切り、各地点表示を西からＡ区～Ｅ区と呼称した（**第２図**参照）。掘削方法は八尾市教育委員会の遺構確認調査資料を基に、現地表（T.P.＋8.6m前後）から1.5m前後迄の堆積層を重機により除去した後、以下1.1m前後の土層については人力により掘削・精査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。なお、調査終了後は調査区中央において、東西長18ｍ×南北長１ｍのトレンチを設定し、最終遺構検出面（T.P.＋6.0m前後）からさらに１ｍ前後の深さ迄下層確認調査を実施した。



第２図　調査区地区割り図（Ｓ＝１／600）

第２節　基本層序

当地においては第０層とする現地表（T.P.＋8.6m前後）下0.6m前後間は、旧建物の基礎によ

って撹乱、あるいは客土（盛土）がなされるが、部分的にそれ以前の旧耕土（現代）が残存する。第１層～第３層間はシルトまたは粘土質シルトを主とする層相で、僅少ではあるが近世～近代の国産陶磁器類の破片が含まれる。また、これらの３層については、いずれも水平堆積を呈し、滞水状態にあった溝あるいは水溜り状の土地が、時間の経過とともに徐々に埋没した状況を想起させる。これに関して一考を促す資料に「河内国若江郡八尾郷絵図」（京都大学文学部地理学教室蔵）がある。絵図には寺内町の周囲にめぐらされた堀および土塁状の盛土が描かれており、それによれば当地は位置的に堀内にあることが読み取れる。ゆえに第１層～第３層については、溝あるいは水路部分に相当する可能性が高く、時間の経過に伴い徐々に埋没した結果の埋土と推察される。

以下、下層調査も含め、調査区内で確認できた16層について列記する。

第０層：現代客土（盛土）および撹乱層。層厚0.5～1.0m。撹乱部分はすべて今回の調査以前に稼働していた工場並びに倉庫等の基礎部分あたるものである。

第１層：5G6/1緑灰色シルト。層厚10～30cm。還元状態に見られるグライ化土壌である。染付磁器をはじめとする国産陶磁器類の破片が本層以下第３層迄に包含される。

第２層：7.5YR7/3にぶい橙色粘土質シルト。層厚10～20cm。

第３層：10BG6/1青灰色粘土質シルト。層厚10cm前後。

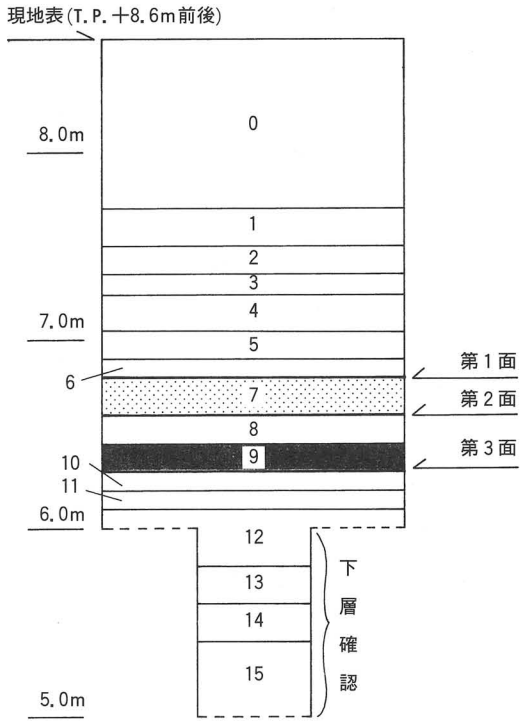
第４層：5BG7/1明青灰色シルト～極粗粒砂。層厚15～20cm。水成による堆積層である。

第５層：5BG7/1明青灰色粘土質シルト。層厚15cm前後。

第６層：N6/灰色粘土質シルト。層厚10cm前後。かなり摩滅した土師器や瓦器片が含まれる。

第７層：5PB7/1明青灰色粗粒砂～極粗粒砂。層厚15～25cm。本層内に含まれる瓦器椀片の形態から、鎌倉時代頃の洪水層と考えられる。本層上面（T.P.＋6.8m前後）で中世末頃に比定される溝１条（ＳＤ－101）を検出した。

第８層：N3/暗灰色粘土質シルト。層厚10～20cm。本層の上半部は、水田耕土形成時の耕起によるものか、全体的に淘汰不良である。下半部には古墳時代中期～後期の遺物が含まれる。本層上面（T.P.＋6.6m前後）で鎌倉時代頃に河川の氾濫に



【層　序】
第０層：現代客土(盛土)および撹乱層
第１層：5G6/1緑灰色シルト
第２層：7.5YR7/3にぶい橙色粘土質シルト
第３層：10B6/1青灰色粘土質シルト
第４層：5BG7/明青灰色シルト～極粗粒砂
第５層：5BG7/1明青灰色粘土質シルト
第６層：N6/灰色粘土質シルト
第７層：5PB7/1明青灰色粗粒砂～極粗粒砂
第８層：N3/暗灰色粘土質シルト
第９層：N2/黒色シルト質粘土
第10層：5G6/1緑灰色シルト
第11層：5GY6/1オリーブ灰色砂質シルト
第12層：7.5GY8/1明緑灰色砂質シルト
第13層：N6/灰色粘土
第14層：N3/暗灰色粘土質シルト
第15層：10GY7/1明緑灰色粘土質シルト

第３図　基本層序模式図(Ｓ＝１／40)

よって埋没したとみられる水田跡を検出した。

第９層：N2/黒色シルト質粘土。層厚15cm前後。弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式期古相）の遺物が含まれる。西部は比較的層厚が厚く遺物も多く含まれるが、東部へ行くほど層厚も遺物も希薄となる。

第10層：5G6/1緑灰色シルト。層厚10cm前後。本層上面（T.P.＋6.3m前後）で弥生時代後期末～古墳時代初頭（庄内式期古相）の遺構を検出した。

第11層：5GY6/1オリーブ灰色砂質シルト。層厚10cm前後。下方に細粒化が認められる。

＜以下、下層確認調査＞

第12層：7.5GY8/1明緑灰色砂質シルト。層厚20～30cm。本層上面（T.P.＋6.1m前後）から切り込まれる弥生時代後期以前と考えられる２条の埋没河川ＮＲ－401・ＮＲ－402を検出した。

第13層：N6/灰色粘土。層厚20cm前後。植物遺体が僅かに含まれる。

第14層：N3/暗灰色粘土質シルト。層厚20cm前後。植物遺体を多量に含む。

第15層：10GY7/1明緑灰色粘土質シルト。層厚40cm以上。植物遺体がラミナ状に含まれる。

第３節　検出遺構と出土遺物

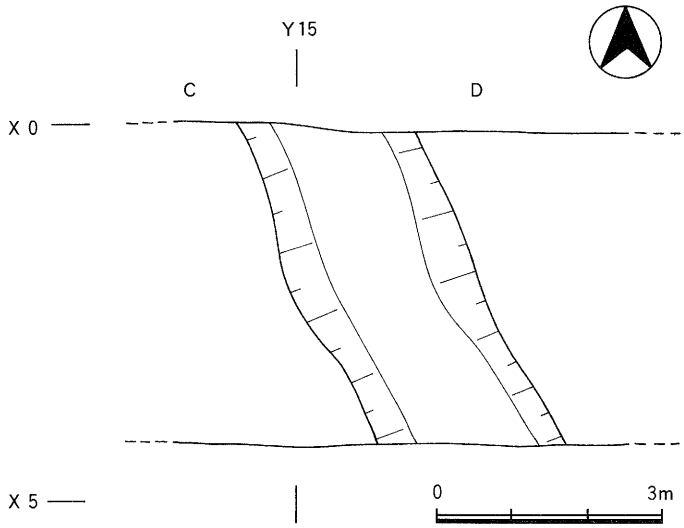
調査の結果、第１面ではT.P.＋6.8m前後で中世の溝１条（ＳＤ－101）、第２面ではT.P.＋6.6m前後で鎌倉時代頃に比定される水田面、第３面ではT.P.＋6.3m前後で古墳時代前期に比定される土坑２基（ＳＫ－301・ＳＫ－302）・小穴１個（ＳＰ－301）・溝１条（ＳＤ－301）、さらに同一面で弥生時代後期末に比定される竪穴住居１棟（ＳＩ－301）・土坑２基（ＳＫ－303・ＳＫ－304）・小穴２個（ＳＰ－302・ＳＰ－303）・落ち込み状遺構１箇所（ＳＯ－301）を検出した。さらに下層確認調査では、T.P.＋6.1m前後から切り込まれる弥生時代後期以前の自然河道を２条（ＮＲ－401・ＮＲ－402）検出した。出土遺物量は包含層も含め、全体でコンテナバット３箱分を数える。以下、各遺構面毎に記す。

第１面

＜中世末＞

溝（ＳＤ－101）

Ｃ・Ｄ区間で検出した。北西－南東方向に伸びる溝である。規模は幅2.0～2.3m・深さ0.2m前後を測る。断面の形状は浅い皿形を呈する。埋土は7.5YR3/3暗褐色砂質シルトの単一層である。内部から土師器の小破片が僅少出土したが、明確に時期決定できるものはなかった。層位的には後述する下層の水田面と、さほど時期差がないものと思われる。本遺構面では、溝１条のみの検出であったが、調査区壁面においては畝を想定させる起



第４図　第１面　ＳＤ－101平面図（Ｓ＝１／100）

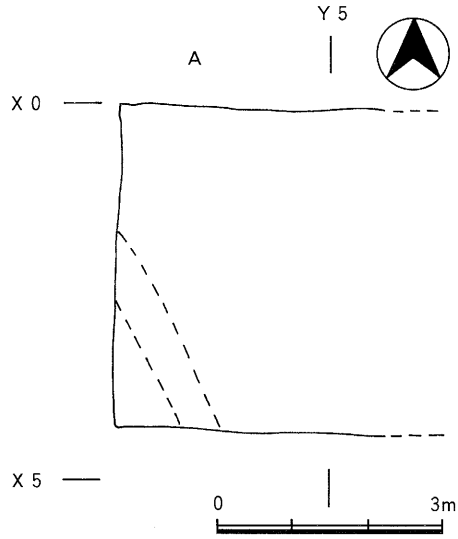
伏が部分的に観察されることから、本溝は畠地等の生産域に伴う遺構であった可能性が高い。

第２面

＜鎌倉時代＞

水田遺構（畦畔痕）

Ａ区で水田耕作に伴う畦畔１条と、調査区西部のＡ・Ｂ区間で人および牛と見られる偶蹄目の足跡を確認した。畦畔については、平面では痕跡しか確認することができなかったが、壁面観察から幅40cm・高さ５cm前後の規模を測るものであることがわかった。足跡には、特に規則性を見出せる箇所はなかった。本遺構面は、洪水層である第７層内に含まれる瓦器椀の破片から、鎌倉時代頃に河川の氾濫によって埋没したものと考えられる。



第５図　第２面　畦畔痕平面図（Ｓ＝１／100）

第３面

＜古墳時代初頭（庄内式期古相）＞

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－301

Ｃ区で検出した。遺構の北部分は調査区外に至るため、全容は不明である。検出規模は東西3.1m・南北0.95m・深さ0.23mを測る。埋土は2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルトの単一層である。内部からは複合口縁壷の口縁部片が出土したが、図化するまでには至らなかった。

ＳＫ－302

Ｃ区で検出した。遺構の南部分は調査区外に至るため、全容は不明である。検出規模は東西3.8m・南北0.6m・深さ0.19mを測る。埋土は10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトの単一層である。内部からは壷・甕・小型鉢が出土した。そのうち図化できたものは、小型鉢１点（１）・壷３点（２～４）・甕３点（５～７）の計７点である。（１）の小型鉢は、口縁部径が体部径を凌駕し、底部外面はドーナツ底を呈する。（２）の直口壷は、口縁部内外面をヨコナデした後、丁寧にハケメ調整される。（３）は口径36.2cmを測る比較的大型の複合口縁壷で、口縁部下端外面には竹管押圧円形浮文が加飾される。（４）は壷の底部で、突出度の低い平底を呈する。（５・６）の甕はいずれも口縁部が外反して伸びるが、（５）の口縁端部は摘み上げられ、（６）は丸みをもって終わるといった相違が窺える。（７）の甕の体部はやや球形を呈するものと推定される。

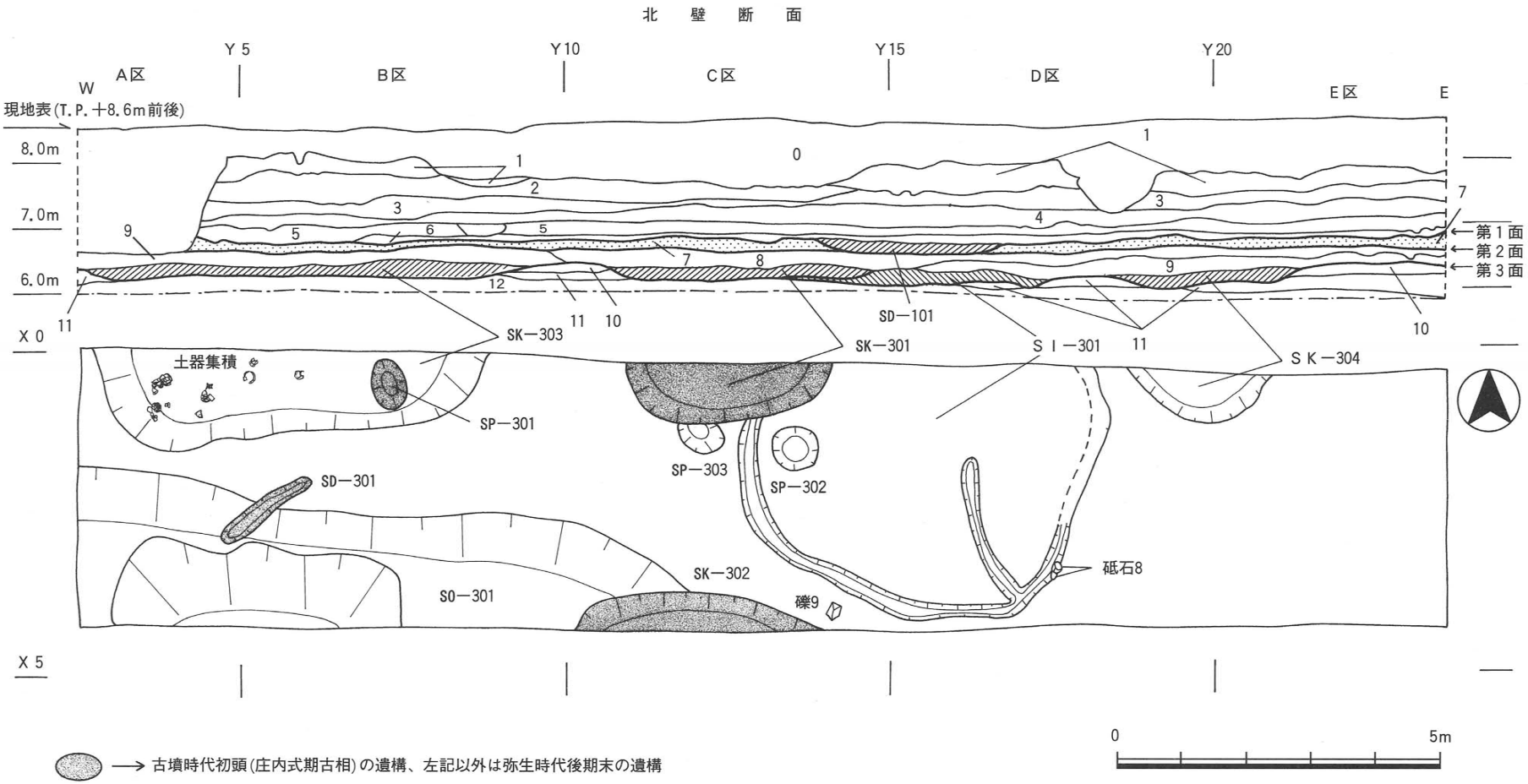
ＳＰ－301

ＳＩ－301内で検出した。平面の形状は南北に長い楕円形を呈する。規模は長径0.8m・短径0.55m・深さ0.1mを測る。断面の形状は、椀形を呈する。埋土は10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトの単一層である。内部からは古式土師器の破片が数点出土した。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－301

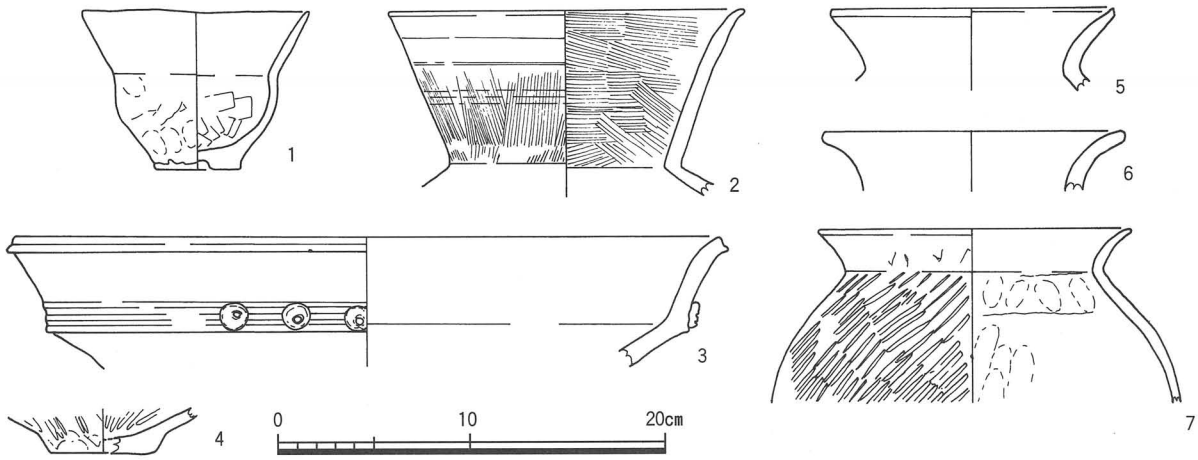
Ａ・Ｂ区間で検出した。南西－北東方向に伸びる溝である。検出規模は、全長1.7m・幅0.3m・深さ0.05mを測る。断面の形状は、半円形を呈する。内部からは古式土師器の破片が僅かに



第6図　第3面遺構平面図および北壁断面図(S＝1／100)

【層　序】
第0層：現代客土(盛土)および撹乱層
第1層：5G6/1緑灰色シルト
第2層：7.5YR7/3にぶい橙色粘土質シルト
第3層：10BG6/1青灰色粘土質シルト
第4層：5BG7/1明青灰色シルト～極粗粒砂
第5層：5BG7/1明青灰色粘土質シルト
第6層：N6灰色粘土質シルト
第7層：5PB7/1明青灰色粗粒砂～極粗粒砂
第8層：N3/暗灰色粘土質シルト
第9層：N2/黒色シルト質粘土
第10層：5G6/1緑灰色シルト
第11層：5GY6/1オリーブ灰色砂質シルト
第12層：7.5GY8/1明緑灰色砂質シルト

【遺構内埋土】(※北壁内)
SD−101→7.5YR3/3暗褐色砂質シルト
SK−301→2.5Y4/2暗灰黄色粘土質シルト
SI−301
SK−304
SK−303
N3/暗灰色粘土質シルト



第７図　ＳＫ－302出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

出土した。

＜弥生時代後期末＞

竪穴住居（ＳＩ）

ＳＩ－301

Ｃ・Ｄ区間で検出した。遺構の北西部をＳＫ－301に切られ、さらに北部分は調査区外に至るため詳細は不明であるが、検出状況から一辺４ｍ前後を測る隅丸方形の平面プランを呈するものと推定される。壁溝が明確に捉えられるのは南側部分にあたる全体の約1/2程で、炉跡は確認できなかった。主柱については遺構内の西端で検出したＳＰ－302がその一部とも見られるが、他に桂穴は認められず断定できない。ＳＰ－302の規模等詳細については後述する。壁溝については幅0.2～0.3ｍ・深さ0.05～0.1ｍで、断面は半円形を呈する。また、壁溝の南東部から中央に向かって伸びる小溝を１条確認した。規模は全長2.5ｍ・幅0.2ｍ・深さ0.05ｍを測り、断面は半円形を呈する。この小溝は、排水溝あるいは間仕切り溝とも推定される。壁溝および小溝の埋土はいずれもN3/暗灰色粘土質シルトの単一層で、小溝の埋土には炭化物が混入する。

遺物は床面から弥生時代後期末に比定される甕の体部片数点と、南東部にあたる壁溝内から砥石が２点出土した。このうち図化できたものは砥石２点（８・９）のみである。（８）は複輝石安山岩製で、３面に使用痕が認められる（**第８図**参照）。（９）は砂岩製で、チャート・石英・花崗岩といった鉱物を多量に含み、淡い緑灰色を呈する。

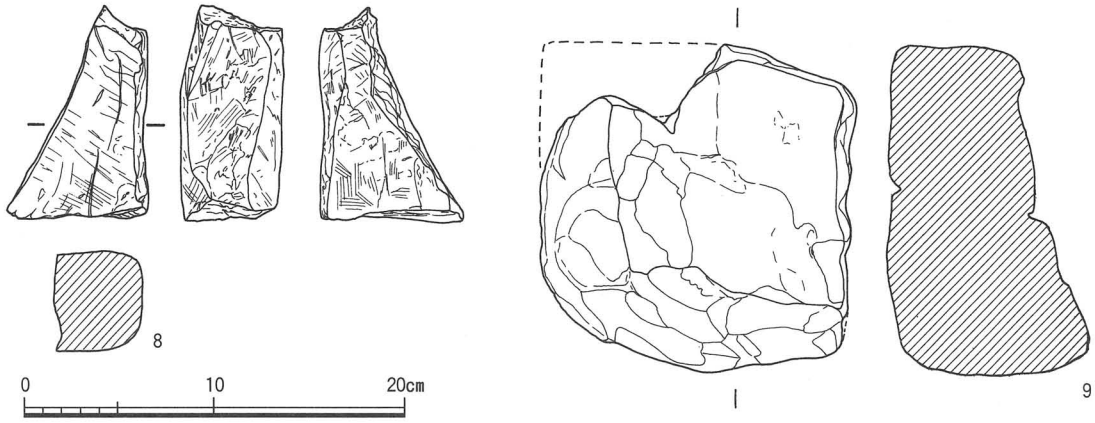
土坑（ＳＫ）

ＳＫ－303

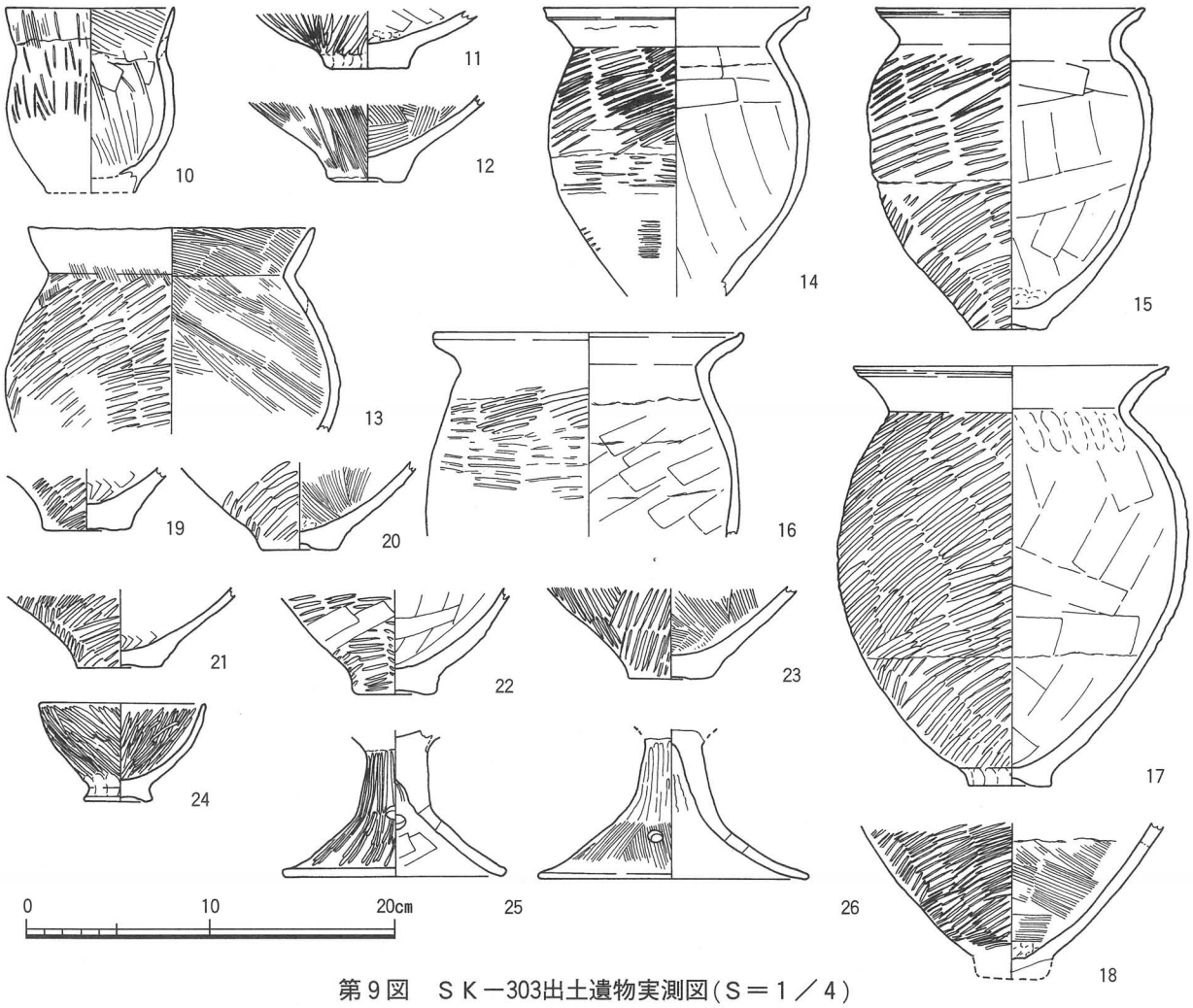
調査区北西部のＡ・Ｂ区間で検出した。遺構の北部は調査区外に至るため、全容は不明である。また、遺構内東部の一部が古墳時代初頭の小穴ＳＰ－301によって切られる。検出規模は東西6.0ｍ・南北1.1～1.6ｍ・深さ0.1～0.2ｍを測る。埋土はN3/暗灰色粘土質シルトの単一層で、内部からは弥生時代後期末に比定される壷・甕・鉢・高杯が出土した。

出土した遺物のうち図化できたものは、壷３点（10～12）・甕11点（13～23）・小型鉢１点（24）・高杯２点（25・26）の計17点である。

（10）の小型短頸壷は該期から目立つもので、球形に近い体部から内彎気味に短く伸びる口縁部がつく。（12）に見られるドーナツ状の底部分からは、底部作成時に輪台を作り、粘土を充填



第８図　ＳＩ－301出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）



第９図　ＳＫ－303出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

させる手法が窺える。

（13・14・16・17）の甕については胴部の最大径が中位にあって、かつ球形化が認められるもので該期を特徴付けるものといえる。さらに分割成形による口縁部の付加から、明瞭にくびれの残る様子が顕著にみられる。また、口縁端部のみに限って見ると、（13・16）が丸く収めるのに対し、（14・15・17）はやや摘み上げで外に面を有する。（18）は底部が欠損しているが、残存状況から接合手法が明瞭に観察できる。底部のみ図化できた（20～23）の４点はすべてドーナツ底

を呈する。

(24)は、該期に目立つ高台風の上げ底を有する小型の鉢である。

(25・26)は高杯の脚部で、いずれも杯部を欠く。杯部については該期における他の出土例から、これらのように低く安定感をもつ脚部には、浅い椀形を有するものが多いことがわかっているが、断定は避けたい。

ＳＫ－304

調査区北東部のＤ・Ｅ区間で検出した。遺構の北部が調査区外に至るため、全容は不明である。検出規模は東西2.3m・南北0.8m・深さ0.07mを測る。埋土はN3/暗灰色粘土質シルトの単一層で、内部からは弥生土器の小破片が僅かに出土した。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－302

Ｃ区で検出した。ＳＩ－301の主柱の可能性も考えられるが、先述したように遺構の性格は断定できない。規模は径0.7m前後・深さ0.11mを測る。平面形状は円形、断面は椀形を呈する。埋土はN3/暗灰色粘土質シルトの単一層で、内部からは弥生土器の小破片が僅かに出土した。

ＳＰ－303

Ｃ区で検出した。遺構の北部はＳＫ－301によって削平されるが、検出状況から見て平面の形状はほぼ円形を呈するものと思われる。規模は推定で径0.7m・深さ0.09mを測るものと思われる。埋土はN3/暗灰色粘土質シルトの単一層で、内部からは弥生土器の小破片が僅かに出土した。

落ち込み（ＳＯ）

ＳＯ－301

調査区南西部のＡ～Ｃ区間で検出した。調査区中央から西側および南側の調査区外に向かって落ち込むもので、遺構の中ほどでさらに段を成して深くなる部分が確認される。また、遺構の北方と東方の肩の一部が古墳時代初頭の溝ＳＤ－301およびＳＫ－302によって切られる。規模は検出できたところで、東西9.5m・南北1.7～2.5m・深さは浅いところで0.08m・深いところで0.25mを測る。遺構の西部および南部は調査区外に至るため全容は不明である。埋土はN3/暗灰色粘土質シルトの単一層で、内部からは壷・甕・鉢・高杯の小破片が数点出土したが、図化できるものはなかった。

＜下層確認調査＞

自然河道（ＮＲ）

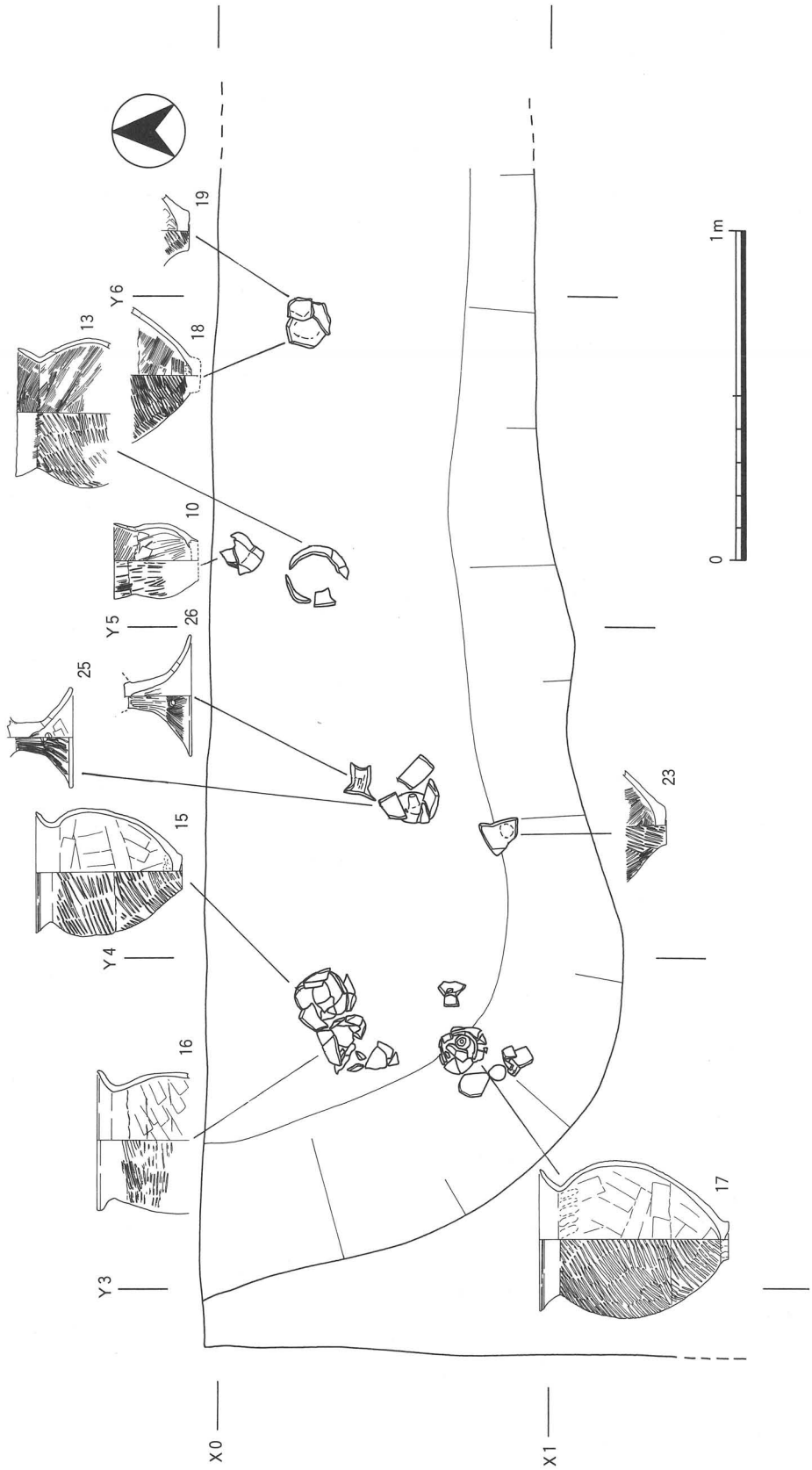
ＮＲ－401

Ａ・Ｂ区間で検出した。南東－北西方向に伸びる。規模は幅1.85m・深さ0.5m前後を測る。断面の形状は椀形を呈する。埋土は上層が灰白色極細粒砂・下層が灰色砂質シルトの２層に分層される。遺物は出土しなかった。

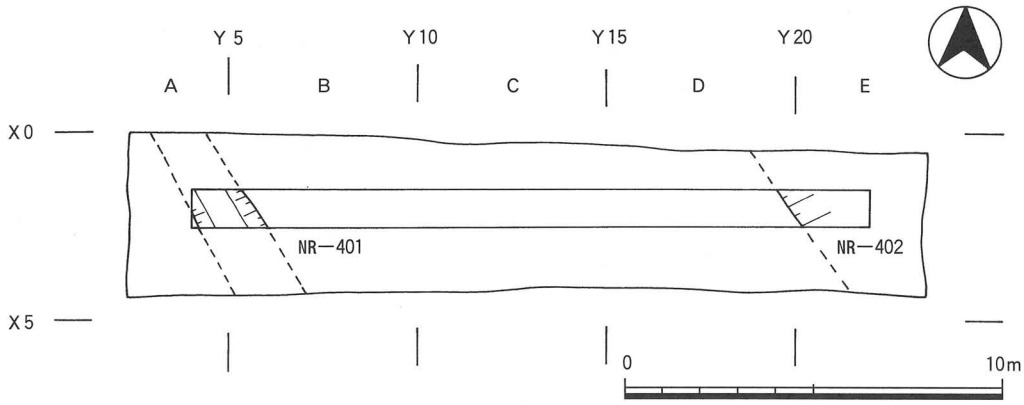
ＮＲ－402

Ｄ・Ｅ区間で検出した。東肩（岸）は調査区外に至るため、全容は不明である。検出できた規模は、幅2.5m・深さ0.5m前後を測る。埋土は上層が灰白色極細粒砂、下層が黒褐色砂質シルトの２層に分層される。下層には流木や植物遺体が多量に含まれる。遺物は出土しなかった。

＜遺構に伴わない出土遺物＞



第10図　ＳＫ－303西部　土器出土平面図（Ｓ＝１／20、遺物復原図Ｓ＝１／８）



第11図　下層確認における自然河道検出平面図（Ｓ＝１／200）

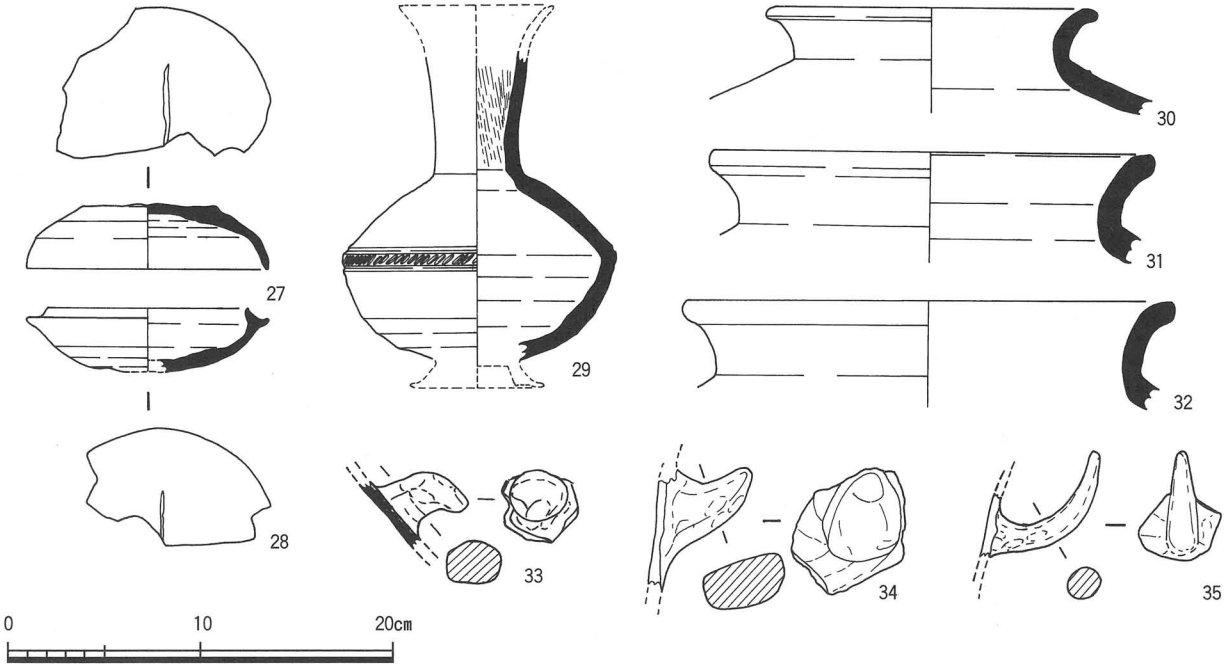
図化できたものは、第８層出土の古墳時代中期～後期のもの９点(27～35)と、第９層出土の弥生時代後期末～古墳時代初頭のもの７点(36～42)である。

・第８層出土遺物

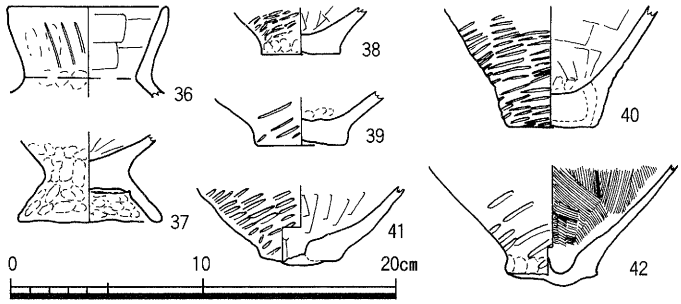
(27)の須恵器杯蓋の天井部外面は平坦に仕上げられ、「－」のヘラ記号が線刻されている。一方の(28)の杯身の底部外面にも（27）同様に「－」のヘラ記号が認められる。(29）は体部の形態から、底部に「ハ」の字形の高台が付く台付長頸壺と思われる。肩部と体部の境目には２条の沈線が廻り、その間に刺突文が施される。(30～32）の須恵器甕は、いずれも口縁部が外彎して端部を丸く収めるものである。先端が丸身をもつ把手（33）は、提瓶の肩部に付すものであろう。以上（27～33）の７点の須恵器類は、６世紀末～７世紀初頭頃の所産となろう。(34・35）は土師器把手で、(34）が斜上方へ伸びる舌状であるに対し、(35）は細長く上外方へ内彎して伸びる牛角状を呈する。

・第９層出土遺物

（36）の直口壺は内彎気味に伸びる口縁部で、端部は丸く収める。弥生時代後期末から見られる。(37）の脚台は手づくねによるもので、粗さが目立つ。(38～40）は甕の底部と思われ、



第12図　第８層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）



第13図　第９層出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

（38・39）はドーナツ底をする。（40）はドーナツ底を呈さないが、（38・39）も含め、底部接合から底部作成時に輪台を作り、粘土を充填させる手法が窺える。（41・42）は甕あるいは小型鉢の底部と思われる。（41）の底部には孔があけられた後、何らかの理由で再度粘土によって詰め直されている。（42）の方は内部から孔をあけようとした痕跡が窺えるが、貫通しないまま中断されており、内部から押し込んだ分が外部に突出した状態となっている。（41・42）は類例の少ない興味深いものである。

第４節　出土遺物観察表

※胎土－石→石英、長→長石、雲→雲母、角→角閃石、チ→チャート、赤→赤色斑粒〈（　）内は最大粒径(mm)〉

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量 (cm)　口径 器高	調　整　・　手　法	色　調	胎　土	焼成	遺存度	備　考
1 四	小型鉢 (古式土師器) ＳＫ－302	11.7 8.2 底径　4.4	口縁部－ヨコナデ 体部－〈外〉ユビオサエ・ナデ、〈内〉ヘラナデ 底部－ナデ	にぶい橙色	石(4)僅・長(5)多・雲(1)僅・チ(1)少	良好	３／４	外面に煤
2 四	直口壺 (古式土師器) ＳＫ－302	18.3 －	口縁部－〈外〉ヨコナデ後ハケ目、〈内〉ハケ目 体部－〈外〉ナデ、〈内〉ヘラケズリ	淡黄色	石(0.5)僅・長(5)多・チ(4)少	良好	口縁部 ５／６	外面に煤
3 四	複合口縁壺 (古式土師器) ＳＫ－302	36.2 －	口縁部－〈外〉ヨコナデ後凹線２帯・竹管押圧円形浮文(３個)貼付け、〈内〉ヨコナデ	明赤褐色	石(1)僅・長(3)多・雲(1)少・赤(1)僅	良好	口縁部 １／８	摩滅
4	壺 (古式土師器) ＳＫ－302	－ － 底径　5.6	底部－〈外〉ユビオサエ後ヘラミガキ、〈内〉ヘラミガキ	浅黄橙色	石(2)僅・長(3)多・雲(1)少・チ(2)多	良好	底部 １／２	外面に煤
5	甕 (古式土師器) ＳＫ－302	14.4 －	口縁部－ヨコナデ	橙色	石(2)少・長(4)多・チ(3)多	良好	口縁部 １／６	
6	同　上	15.2 －	口縁部－ヨコナデ	橙色	長(2)多・チ(2)少	良好	口縁部 １／４	
7 四	同　上	16.1 －	口縁部－ヨコナデ・外面に接合痕(部分) 体部－〈外〉タタキ、〈内〉ユビオサエ・ナデ・接合痕２条	外－浅黄橙色、内－淡黄色	石(0.5)僅・長(2)多・雲(0.5)僅・赤(0.5)僅	良好	口縁部～肩部 １／４	内外面に煤
10 四	小型短頸壺 (弥生土器) ＳＫ－303	9.1 10.0 体部最大径 9.0	口縁部－〈外〉ヨコナデ後ヘラミガキ・接合痕１条、〈内〉ヨコナデ後ハケ目・接合痕２条 体部－〈外〉ナデ後ヘラミガキ、〈内〉ナデ後ハケ目	灰褐色	石(1)僅・長(1)多・雲(1)僅・チ(2)僅	良好	３／５	内外面に黒斑
11 四	壺 (弥生土器) ＳＫ－303	－ － 底径　4.5	底部－〈外〉ヘラミガキ・ユビオサエ、〈内〉ヘラミガキ	外－浅黄橙色、内－淡黄色	石(0.5)僅・長(2)多・雲(0.5)僅・赤(0.5)僅	良好	口縁部～肩部 １／４	内外面に煤
12	同　上	－ － 底径　4.3	底部－ハケ目・ナデ	淡黄色	長(4)多・雲(1)少・角(3)僅	良好	底部のみ	内外面に黒斑
13 四	甕 (弥生土器) ＳＫ－303	15.5 －	口縁部－〈外〉ヨコナデ後ハケ目 体部－〈外〉タタキ(一部タタキ後ハケ目)、〈内〉ハケ目・接合痕１条	にぶい黄橙色	石(2)僅・長(6)多・雲(0.5)少・角(2)僅・チ(3)僅	良好	１／４	外面に煤
14 四	同　上	14.1 － 体部最大径 14.0	口縁部－ヨコナデ・外面に接合痕１条 体部－〈外〉タタキ・接合痕２条、〈内〉ヘラナデ・接合痕１条	にぶい黄橙色	石(2)僅・長(6)多・雲(0.5)少・角(2)僅・チ(3)僅	良好	２／３	内外面に煤 ２次焼成
15 五	同　上	14.6 17.4 体部最大径 15.4 底径　4.0	口縁部－ヨコナデ・端部外面に凹線１条・外面に接合痕１条 体部－〈外〉タタキ・接合痕１条、〈内〉ヘラナデ 底部－ユビオサエ・ナデ	橙色	長(5)多・雲(2)少・チ(6)多	良好	３／４	外面に煤 ２次焼成
16 五	同　上	16.9 －	口縁部－ヨコナデ 体部－〈外〉タタキ・接合痕１条、〈内〉ナデ・ヘラナデ・接合痕３条	外－橙色、内－浅黄橙色	長(4)多・雲(3)少・角(2)僅・チ(2)多・赤(2)僅	良好	１／２	

遺物番号 図版番号	器　種 出土地点	法量　口径 (cm)　器高	調　整・手　法	色　調	胎　土	焼成	遺存度	備　考
17 五	甕 (弥生土器) ＳＫ－303	17.1 22.7 体部最大径 18.9 底径　4.5	口縁部－ヨコナデ・凹線文１条 体部－〈外〉タタキ・接合痕１条、〈内〉ユビナデ・ヘラナデ・接合痕１条 底部－〈外〉ユビオサエ、〈内〉ナデ	橙色	石(1)僅・長(5)多・雲(0.5)僅	良好	5／6	外面に煤
18 五	同　上	－ －	体部－〈外〉タタキ、〈内〉ハケ目・接合痕１条 底部－〈内〉ユビオサエ	にぶい黄橙色	石(0.5)多・長(4)少・雲(2)僅	良好	下半部のみで底部は欠損	内外面に煤
19	同　上	－ － 底径　4.7	底部－〈外〉タタキ、〈内〉ヘラナデ	にぶい黄橙色	長(3)多・雲(1)多	良好	底部のみ	内面に煤
20 五	同　上	－ － 底径　4.1	底部－〈外〉タタキ、〈内〉ハケ目	外－淡橙色、内－褐灰色	長(4)多・石(1)僅・雲(0.5)僅・チ(1)僅	良好	底部のみ	
21	同　上	－ － 底径　4.7	底部－〈外〉タタキ、〈内〉ヘラナデ	橙色	長(4)多・雲(0.5)僅・赤(2)僅	良好	底部のみ	外面に煤
22 五	同　上	－ － 底径　4.5	底部－〈外〉タタキ(一部ヘラナデ)、〈内〉ヘラナデ	にぶい橙色	石(2)僅・長(4)多・雲(0.5)僅・チ(4)僅	良好	底部のみ	内外面に煤
23 五	同　上	－ － 底径　4.6	底部－〈外〉タタキ、〈内〉ハケ目	明褐灰色	石(2)僅・長(5)多・雲(0.5)少・角(2)少・チ(4)僅	良好	底部のみ	内外面に煤
24 五	小型鉢 (弥生土器) ＳＫ－303	9 5.3 底径　3.8	口縁部～体部－ヘラミガキ 底部－ユビオサエ	にぶい赤褐色	石(1)僅・長(2)多・雲(2)多	良好	3／4	
25 五	高杯 (弥生土器) ＳＫ－303	－ － 裾径　12.1	柱状部－〈外〉ヘラミガキ、〈内〉シボリ目 裾部－〈外〉ヘラミガキ・ヨコナデ・四方孔、〈内〉ヘラナデ・ヨコナデ	浅黄橙色	石(2)僅・長(2)多・雲(2)少・チ(3)少	良好	裾部3／4	裾部内外面に黒斑
26 五	同　上	－ － 裾径　14.6	柱状部－〈外〉ヘラミガキ・三方孔、〈内〉シボリ目 裾部－〈外〉ハケ目・ヨコナデ、〈内〉ナデ	にぶい橙色	石(1)僅・長(2)多・雲(2)少・チ(2)僅	良好	裾部5／6	
27 五	杯蓋 (須恵器) 第８層	12.4 3.4	口縁部－回転ナデ 底体部－〈外〉１／３回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	暗青灰色	長(1～3)少	良好	1／3	天井部外面に「－」のヘラ記号
28 六	杯身 (須恵器) 第８層	10.4 3.3 立上り高 5.0 受部径 12.6	口縁部－回転ナデ 底体部－〈外〉１／２回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	灰白色～青黒色	長(0.5～1)少	良好	1／3	底部外面に「－」のヘラ記号
29 六	長頸壺 (須恵器) 第８層	－ － 体部最大径 14.2	頸部－〈外〉回転ナデ、〈内〉シボリ目 体部－〈外〉下部１／５回転ヘラケズリ・中位に刺突列点文、〈内〉回転ナデ	灰白色～青黒色	長(0.5～1)少	良好	体部2／3	外面に自然釉
30 六	甕 (須恵器) 第８層	16.8 －	口縁部～肩部－回転ナデ	灰色	長(0.5～1)少	良好	口縁部～肩部1／6	
31 六	同　上	23.1 －	同　上	灰白色	長(0.5～1)少	良好	口縁部1／6	
32 六	同　上	25.5 －	同　上	暗青灰色	長(0.5)僅	良好	口縁部1／4	内外面に自然釉
36 六	直口壺 (弥生土器) 第９層	8.4 －	口縁部－〈外〉ヨコナデ後ヘラミガキ、〈内〉ヨコナデ後ヘラナデ	淡黄橙色	石(2)僅・長(4)多・雲(1)僅・角(2)少・赤(1)僅	良好	口縁部1／2	
37 六	脚台 (弥生土器) 第９層	－ － 底径　7.4	底部－〈外〉ユビオサエ・ユビナデ・内側に接合痕１条、〈内〉ヘラナデ	にぶい黄橙色	石(1)僅・長(4)多・雲(1)僅・チ(2)少・赤(2)僅	良好	脚台部のみ	
38	甕 (弥生土器) 第９層	－ － 底径　4.0	底部－〈外〉タタキ・ユビオサエ、〈内〉ヘラナデ	橙色	石(1)僅・長(6)多・雲(2)少・チ(3)少	良好	底部のみ	
39	同　上	－ － 底径　4.8	底部－〈外〉タタキ、〈内〉ユビオサエ・ナデ	褐色	石(1)少・長(3)多・雲(1)少・チ(2)少	良好	底部のみ	外面に煤
40 六	同　上	－ － 底径　4.3	底部－〈外〉タタキ、〈内〉ヘラナデ・ユビオサエ	浅黄橙色	石(1)僅・長(7)多・雲(0.5)少	良好	底部2／3	外面に煤
41	甕又は鉢 (弥生土器) 第９号	－ － 底径　4.0	同　上	黄橙色	長(5)多・雲(0.5)僅・チ(1)僅	良好	底部のみ	
42	同　上	－ － 底径　4.0	底部－〈外〉タタキ・ユビオサエ、〈内〉ハケ目	浅黄色	石(1)僅・長(4)多・雲(2)少・角(2)僅	良好	底部のみ	内外面に黒斑

第3章　まとめ

今回の調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の居住域と、鎌倉時代に埋没した水田遺構およびそれより時期的にやや新しい生産域に伴う遺構（溝）と、細分すれば4時期の遺構面を検出することができた。以下、時代毎に概観する。

弥生時代後期末～古墳時代初頭の居住域については、当地では遺構および遺物内容から2時期にわたって形成された生活面であったことが窺われる。それはまた、該期に相当する堆積土層の状況からも、当地が比較的安定した生活地盤であったことを物語っている。遺物のみに限って言えば、弥生時代後期末の遺構ＳＫ－303、そして古墳時代初頭の遺構ＳＫ－302の2箇所の一括土器類は、器種的には豊富であり、2時期の比較・検討を行うには格好の資料と言えるであろう。

ここで近隣における既往の調査結果を見ると、当地から南東約400ｍ地点の成法寺遺跡内で当研究会が実施した第9次調査（ＳＨ91－9）では、弥生時代後期に比定される土坑・小穴といった居住域を示唆する遺構が検出されている。当地との有機的な関係に興味がもたれるが、現段階では面的な広がりを捉えるに至らず、今後の調査の累積を要する。

中世については、水田遺構などの生産域に関わる溝を検出するに至り、該期における条里復原をはじめ、当地の性格的位置付けを考察するにあたっては貴重な一資料を得ることができた。また、この時期については先述の弥生時代後期末～古墳時代初頭の頃とは違い、砂質シルト～砂の互層が優勢な水成堆積土層が顕著なことから、度重なる河川の氾濫等、居住域を形成するには不向きな土地柄であったことも同時に推察される。

最後に、今回の調査において面的に捉えることができなかった中世末～近世までの様相について、調査区内で見つかった該期に相当する僅少な遺物と堆積土層、そして文献を交えながら若干の考察を試みたい。

当該期に相当する第1層～第3層の粘土質シルト層は、いずれも水平堆積を呈し、土質からは滞水状態にあった溝が埋没した状況が想像できる。南北朝時代以後、八尾寺内町の開発が行われる以前の土地の様相を文献から探ると「当時、西郷の地蔵菩薩を本尊とする常光寺の門前をもとにして、南北朝時代の八尾城名残りの土地として、周囲に堀をめぐらしていた跡を残しているところであって、旧大和川沿いの縁辺の地は、荒蕪地として放任されていた…」（八尾市史「前近代」本文編1988）とある。この内容から、当地も寺内町成立以前はこういった「空閑地」であったことが想定される。

近世においては、該期に相当する遺物の出土はあっても寺内町の町並みを復原できる遺構が確認されない。これは「基本層序」の項でも記したように、「河内国若江郡八尾郷絵図」を見る限りにおいて、本調査地の位置が寺内の外縁にあたり、堀あるいは水路となっていることに起因しよう。これだけ見れば、今回の調査地は行政上の遺跡推定地とは異なり、寺内町範囲外であった可能性が高いと言える。もちろん断定するには、今後の調査も踏まえ多角的な検討が要される。

以上、今回の調査結果を文献等も含め時代別に概観したが、何よりも調査面積に比して弥生時代後期末～中世に至る生活面が重層的に遺存していることが検証されたことは大きな成果であった。今回の調査は、本格的な発掘調査としての第1次調査であり、今後さらなる調査によって八

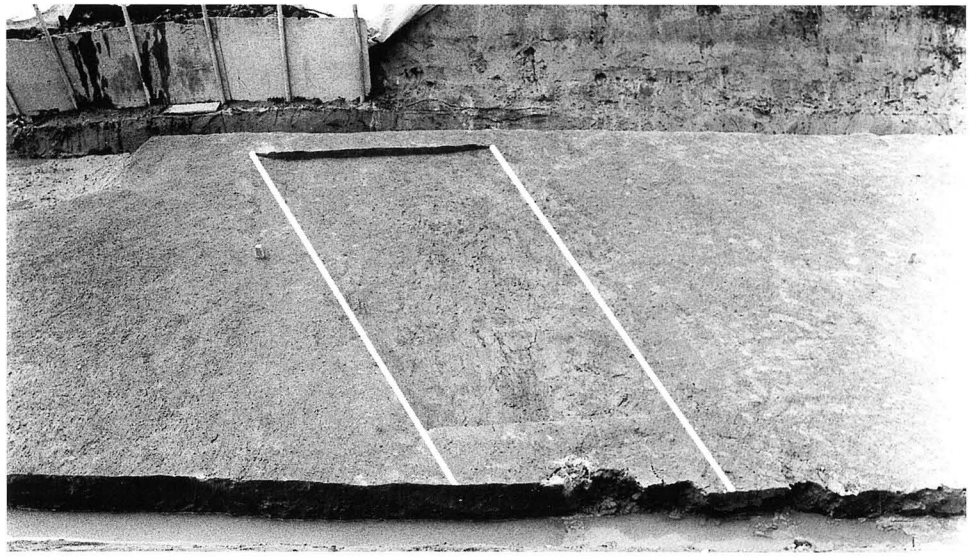
尾寺内町の町割りに関する遺構はもとより、隣接する成法寺遺跡および東郷遺跡との面的に連なる考古学的知見が漸次解明されるであろう。

＜参考文献＞
◎棚橋利光 1981『大阪市・市史双書１　八尾・柏原の歴史』松籟社
◎棚橋利光 1987『新版 八尾の史跡』八尾市市長公室広報課　八尾郷土文化研究会
◎沢井浩三　1988「＜歴史編＞第三章　第六節　二、八尾寺内町の形成と発展」『八尾市史（前近代）本文編』八尾市史編集委員会　八尾市役所
◎櫻井敏雄　大草一憲　1988「四、(一)「八尾郷絵図」にみられる寺内町の構成」『寺内町の基本計画に関する研究 ―久宝寺寺内と八尾寺内を中心として―』八尾市教育委員会
◎西村公助　1993「ＸⅣ　成法寺遺跡　第９次調査（ＳＨ91－９）」『八尾市文化財調査研究会報告39　八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財) 八尾市文化財調査研究会
◎原田昌則他　1992「Ⅱ　９．東郷遺跡第37次調査（ＴＧ91－37)」『平成３年度　(財) 八尾市文化財調査研究 会事業報告』(財) 八尾市文化財調査研究会

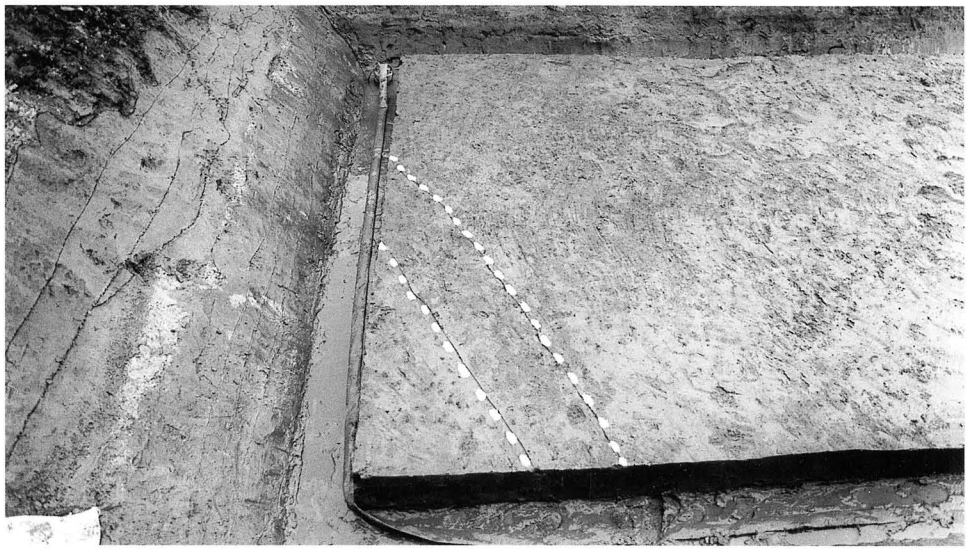
※注　東郷遺跡第37次調査（ＴＧ91－37）は、南北に伸びる府道(近鉄八尾停車場線)を挟んで西区と東区の２箇所の調査区で実施され、西区については位置的に八尾寺内町遺跡の範囲で、寺内町の東端部にあたる。因みに、本文中に記述した近世初頭の屋敷の敷地を区画する溝(堀)は、西区内で確認された。

写真１　調査地近景(右上―慈願寺／南東から)

図　　版

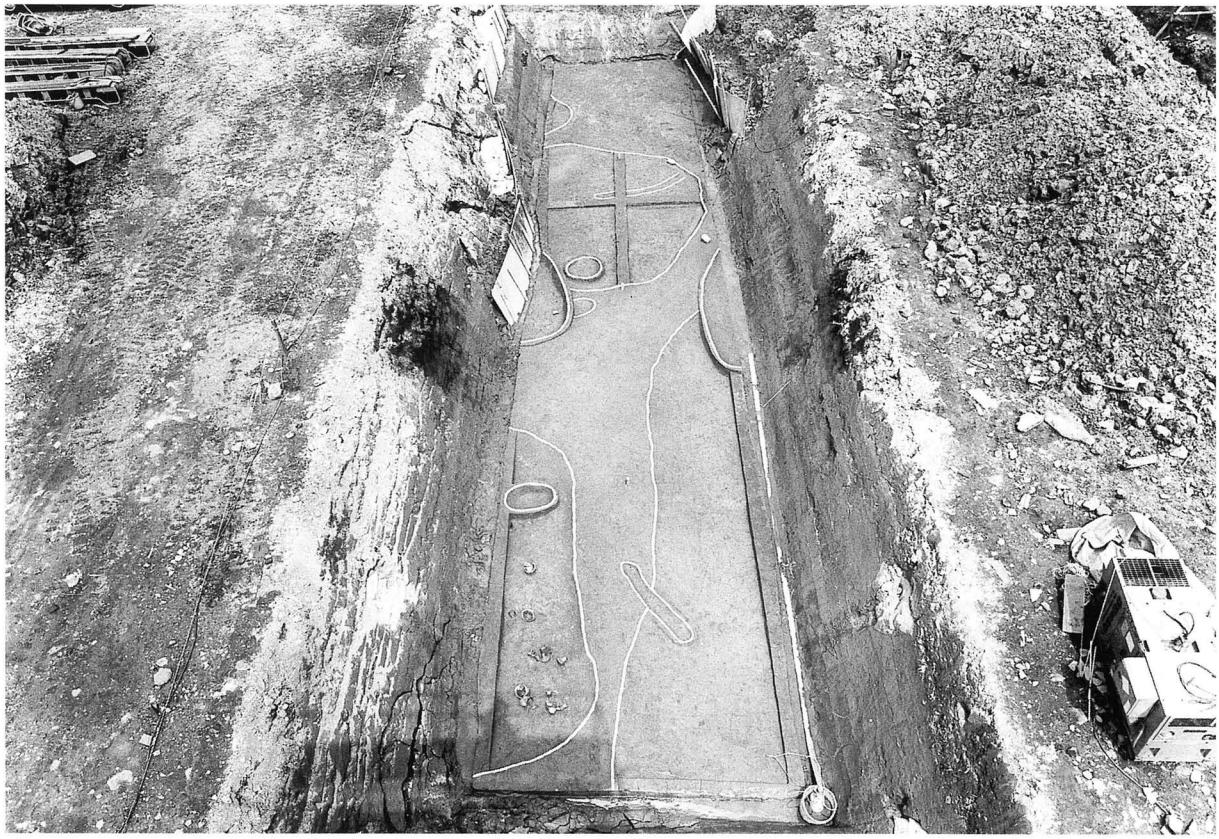


ＳＤ－101(北から)

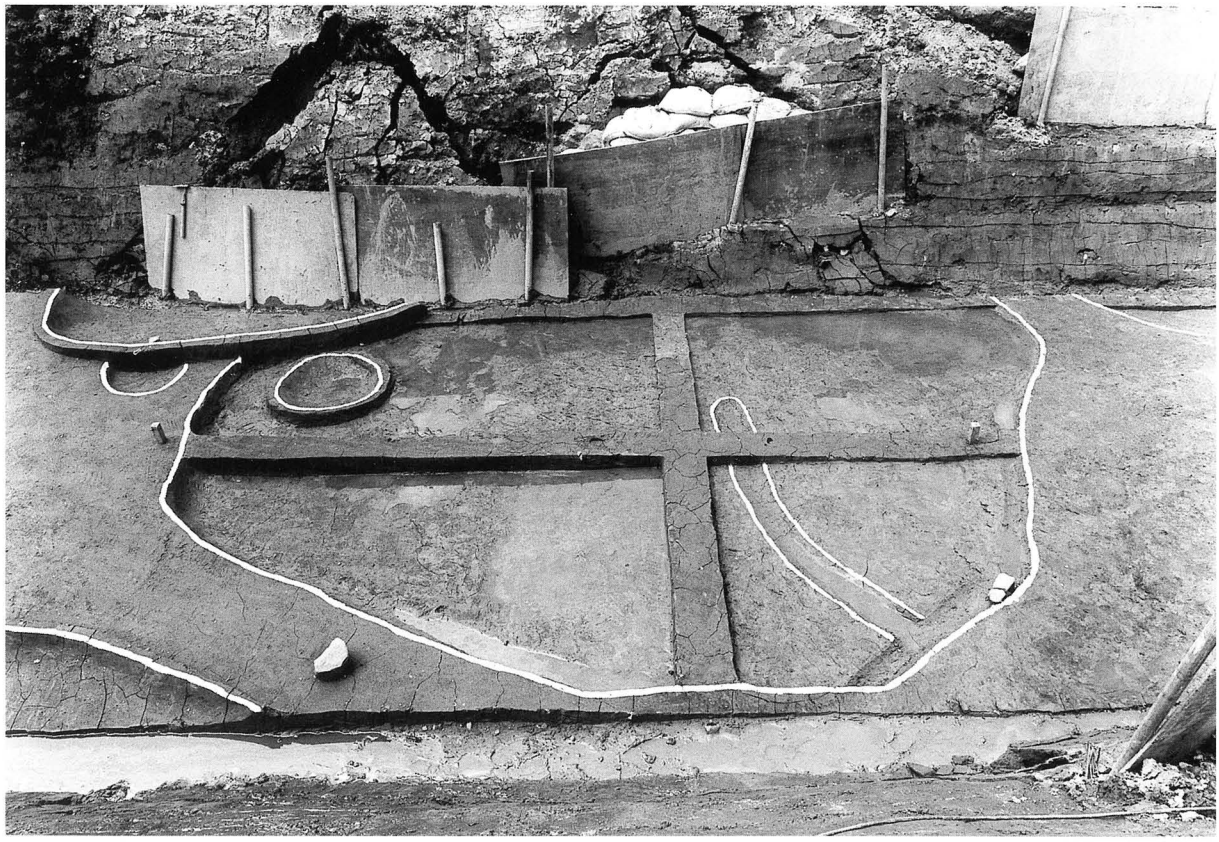


第２面　畦畔痕(南から)

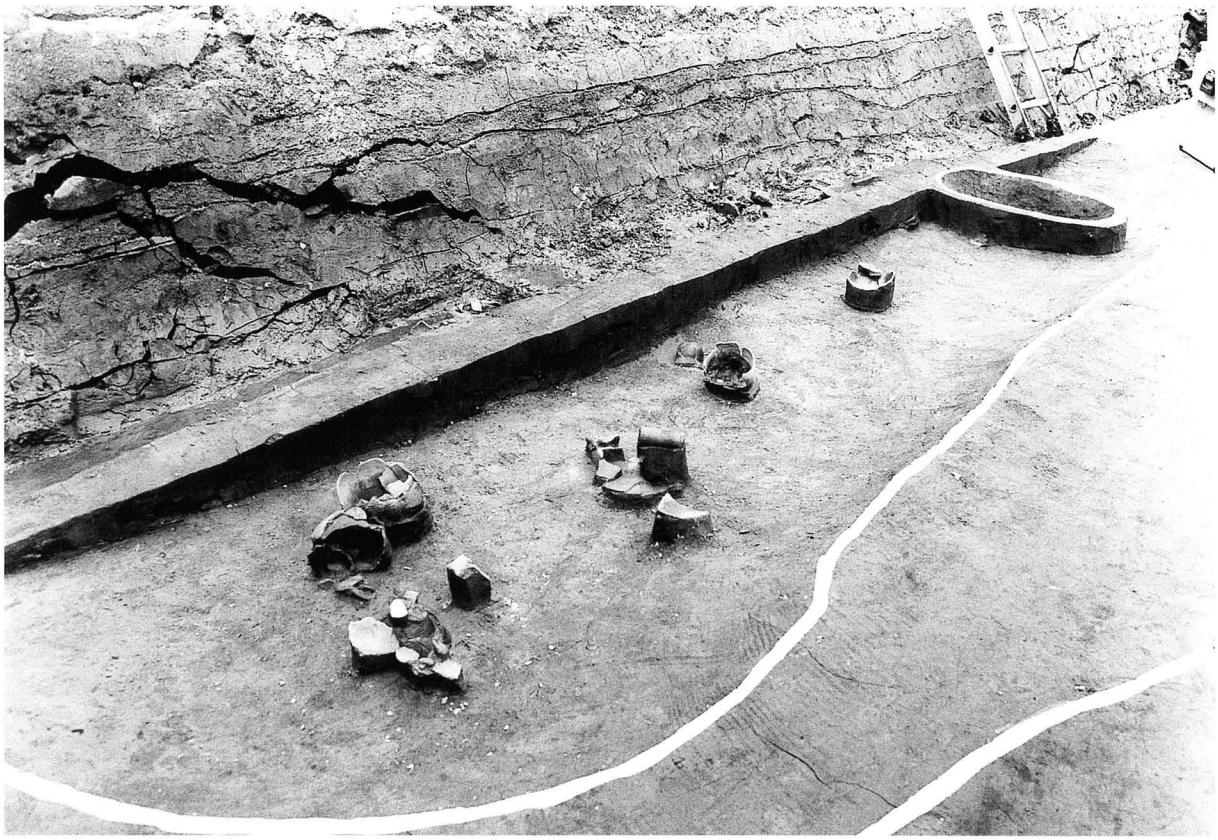
同上　足跡検出状況(北東から)



第３面　全景(西から)



ＳＩ－301(南から)



ＳＫ－303(南西から)

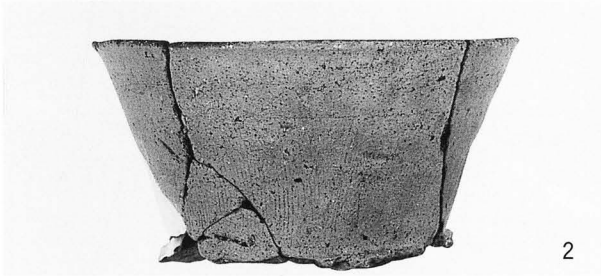
ＳＫ－303土器出土状況(西から)

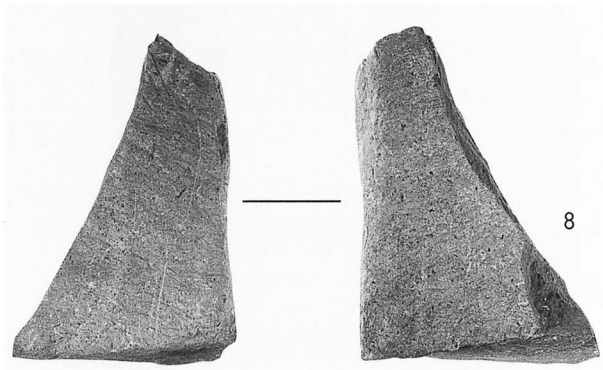
調査区南壁面(北東から)

下層確認トレンチ南壁面(北東から)

調査風景(北西から)

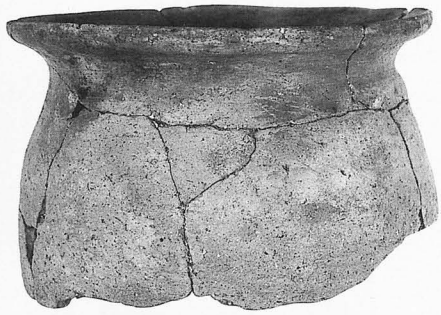
図版四

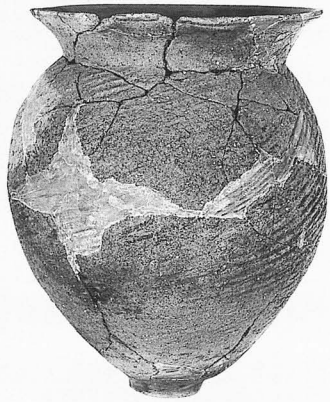




ＳＫ－302(１～３・７)、ＳＩ－301(８・９)、ＳＫ－303(10・11・13・14)　出土遺物

15


16


17

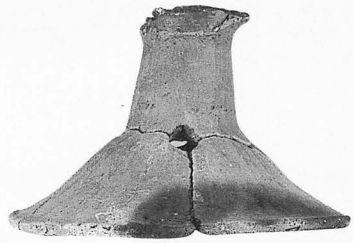
18

20

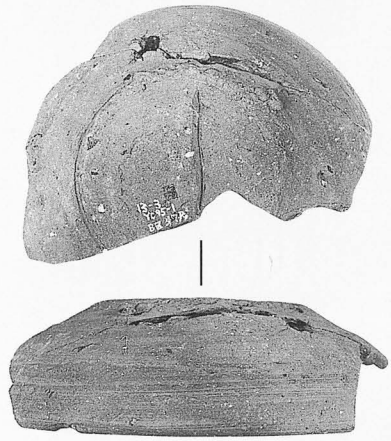
22

23

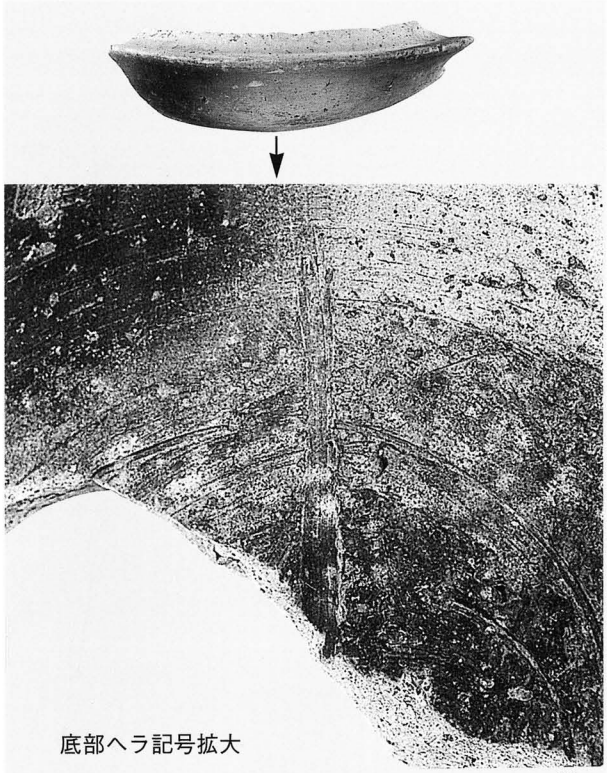
24


25

26


27

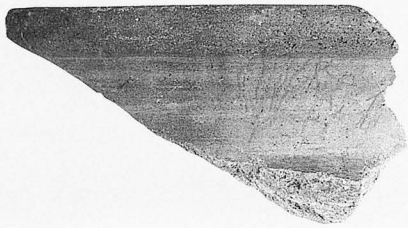
ＳＫ－303(15～18・20・22～26)、第８層(27)　出土遺物



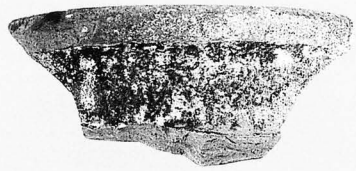
28

29

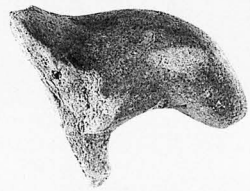
30



31



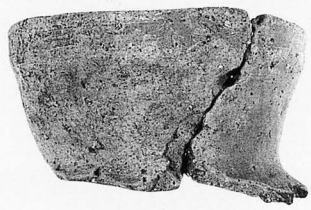
32



33

34

35



36

37

40

第８層(28～35)、第９層(36・37・40)　出土遺物

Ⅳ　八尾南遺跡第23次調査（ＹＳ95－23）

例　　言

1．本書は大阪府八尾市若林町３丁目202－１他２筆で実施した共同住宅建設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する八尾南遺跡第23次調査（ＹＳ95－23）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第埋433－３号　平成６年12月20日付）に基づき財団法人八尾市文化財調査研究会が藤田典俊氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成７年４月５日から４月13日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。調査面積は約200㎡を測る。なお、現地調査にあたっては、国方真奈美・辻野優子・吉田由美恵が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－澤村妙子・辻野、遺物および図面トレース－辻野、遺物写真撮影－岡田が行った。

1．現地における「長原遺跡 標準層序」との対応関係については、財団法人 大阪市文化財協会田中清美氏から御教示および御指導を賜りました。ここに記して感謝いたします。

本　文　目　次

第１章　はじめに……37
第２章　調査概要……39
　第１節　調査の方法と経過……39
　第２節　基本層序……39
　第３節　検出遺構と出土遺物……42
第３章　まとめ……44

挿　図　目　次

第１図　調査地位置および周辺図（Ｓ＝１／5,000）……37
第２図　調査区地区割り図（Ｓ＝１／500）……39
第３図　基本層序模式図（Ｓ＝１／20）……40
第４図　遺構平面図（Ｓ＝１／100）……41
第５図　ＳＥ－201下部掘形 平・断面図（Ｓ＝１／50）……42
第６図　ＳＥ－201出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）……43
第７図　遺構に伴わない出土遺物実測図＜第３層・第４層＞（Ｓ＝１／４）……44

表　目　次

第１表　中世末～近世　小穴(ＳＰ)一覧表……42
第２表　弥生時代後期末　小穴(ＳＰ)一覧表……43

図　版　目　次

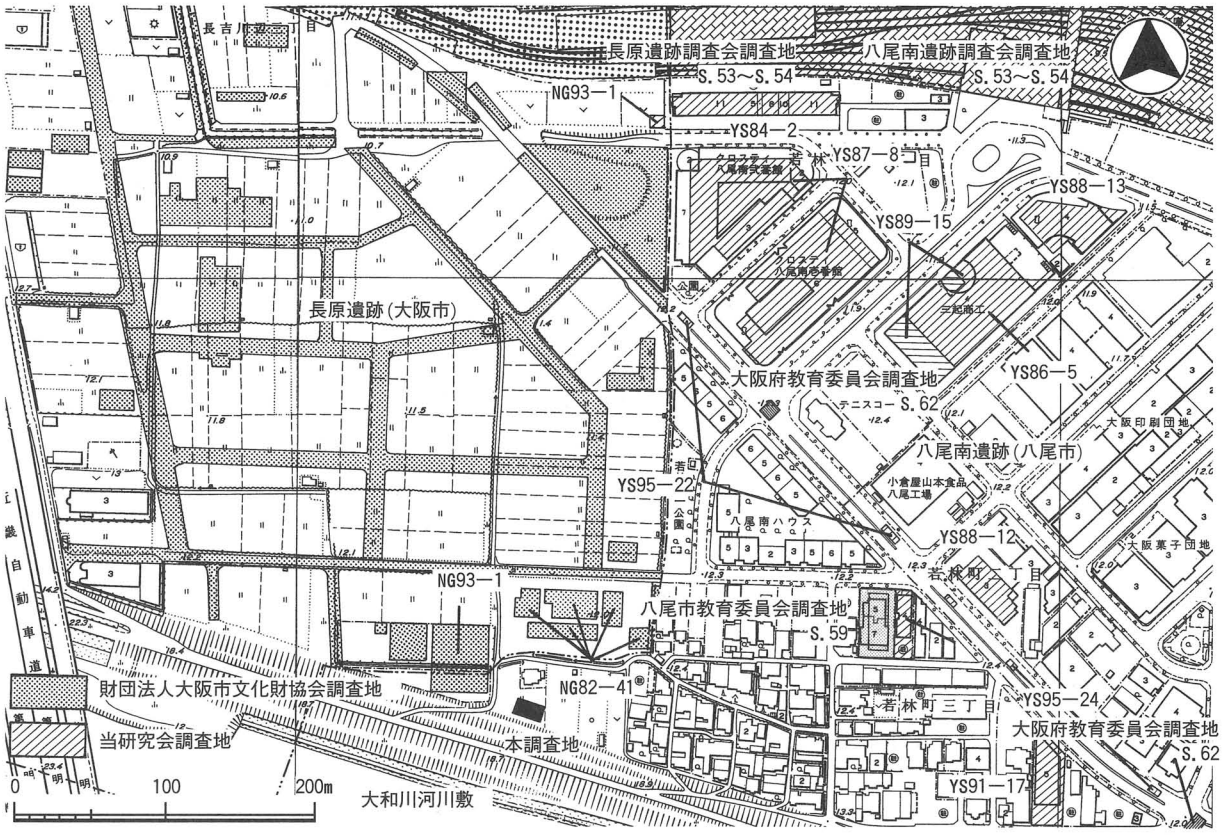
図版一　全景(西から)　同上(東から)
図版二　ＳＥ－201・第４層　出土遺物

第１章　はじめに

八尾南遺跡は、八尾市南西部に位置する後期旧石器時代～中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、若林町１～３丁目・西木の本１～４丁目・木の本３丁目一帯の東西約0.5km・南北約1.3kmの範囲に広がる。隣接する遺跡には、東に木の本遺跡・太田遺跡、市域を境とする大阪市側には、北に城山遺跡・西に長原遺跡、南には現大和川を挟んで藤井寺市の津堂遺跡がある。地理的には、羽曳野丘陵北端部にあたり、中位段丘状の河内台地に立地する。また、当遺跡の南側には、奈良県内から大阪平野を東西に横断して大阪湾に流下する現大和川が存在する。

当遺跡は、昭和53～54年度にかけて実施された地下鉄谷町線八尾南駅建設工事に伴う調査によって認識されるようになった。その調査に至った要因の一つに、昭和49年に大阪市側で実施された同地下鉄線延長工事に伴う調査によって長原遺跡が発見されたことが挙げられる。八尾南遺跡では、後期旧石器時代のサヌカイト製ナイフ形石器、縄文時代後期～晩期の河道と石棒、弥生時代前期～後期の集落、古墳時代前期～後期の集落と水田、平安時代～鎌倉時代の水田耕作とその灌漑に関連する遺構といった多岐にわたる生活面が重層して検出され、遺跡内での推移が明らかにされた。とくに後期旧石器時代については、長原遺跡・八尾南遺跡ともに中位段丘構成層から沖積層下部にかけて旧石器が出土しており、該期の標識遺跡として広く周知されている。

当遺跡南部で西側に接するところの長原遺跡内では、現在もなお財団法人大阪市文化財協会によって土地区画整理事業に伴う調査が実施されている。その中で今回の調査地に近い「東南地区」



第１図　調査地位置および周辺図（Ｓ＝１／5,000）

に限って見ると、５～６世紀の古墳11基をはじめ、飛鳥～奈良時代の水田、平安時代の掘立柱建物、鎌倉時代の条里に関連する区画溝等が検出されている。また、長原遺跡内で今回の調査地に隣接するところでは、北部でＮＧ82－41、西部でＮＧ93－１の２件の調査が実施されている。北部のＮＧ82－41では、弥生時代後期末の方形周溝墓群、同中期の水田、古墳時代中期の方墳群・韓式系土器を伴った井戸・ピット群が検出されている。つづいて西部のＮＧ93－１では、旧石器時代～縄文時代の石器ブロック、弥生時代中期初頭以前の水田および関連遺構、弥生時代中期後半の土器埋納壙、古墳時代中期の掘立柱建物・溝・井戸、江戸時代以後の坪境溝や野井戸等が検出されている。

以下、地下鉄線建設工事を除く八尾南遺跡内の現在までの調査成果で、特筆すべき遺構・遺物について時代順に記す。

後期旧石器に相当する堆積層が第２次・第８次・第13次・第17次・第20次の５箇所で確認されており、第13次では鍵層とする黒色帯（第16層－火山灰の堆積土）の存在が認められている。

縄文時代では第２次・第８次で草創期に比定される有舌尖頭器が出土しているのをはじめ、第20次では後期～晩期の相当層、第15次では唯一該期の遺構として晩期にあたる竪穴住居が１棟確認されている。

弥生時代前期では第５次で掘立柱建物・甕棺墓のほか、堰（しがらみ）を伴う自然河川が見つかっている。堰は大小60本余りの杭が合掌形に打ち込まれており、堰の中からは弥生時代前期古段階に比定される壷が出土している。中期では、第13次で当遺跡内では最古となる水田遺構、第17次では該期の居住域に関連した遺構群が検出されている。後期では第１次で方形周溝墓12基、第５次・第10次・第13次の３箇所で水田遺構、第４次・第８次・第21次・第22次では井戸・土坑・小穴・溝といった居住域に関連した遺構が検出されている。また、特筆すべき遺物として第２次では該期に比定される小型仿製鏡（連弧文銘帯鏡）が出土している。第５次および第13次の水田遺構と第８次の居住域については、３地区の位置関係から有機的な関係の強いものとして捉えることができる。

古墳時代前期に比定される遺構では第７次でのみ水田16筆・畦畔20条といった生産域が確認されている。中期の集落は、北部の第３次・第18次、中央部の第８次で見つかっている。また、該期の方墳が第１次で５基、第２次で１基、第８次で３基検出されているほか、第12次では中期～後期前半にかけての方墳が４基検出されている。後期では第７次で水田26筆と畦畔30条、第19次では居住域に伴う遺構が見つかっている。

奈良時代では、現在のところ第２次でのみ小穴１個と土師器杯１点が検出されているだけで該期については不明なところが多く、今後の調査に期待される。

平安時代では、第１次で掘立柱建物・井戸・焼土坑といった居住域に伴う後期に比定される遺構が検出され、そのなかの焼土坑からは多量の瓦器椀・瓦器小皿・土師器皿などが出土している。また、同調査では自然河道が検出されているが、報告によるとこれは条里坪境復原ラインに該当することから、条里に規制されて流路を選定された可能性があるとされている。第６次・第７次・第10次では、平安時代末期に比定される水田遺構が検出されている。これらは洪水によって埋没したものであるが、同時期の水田遺構が東に隣接する木の本遺跡内においても検出されており、該期にこの付近一帯を大規模な洪水が襲ったことを明示する。

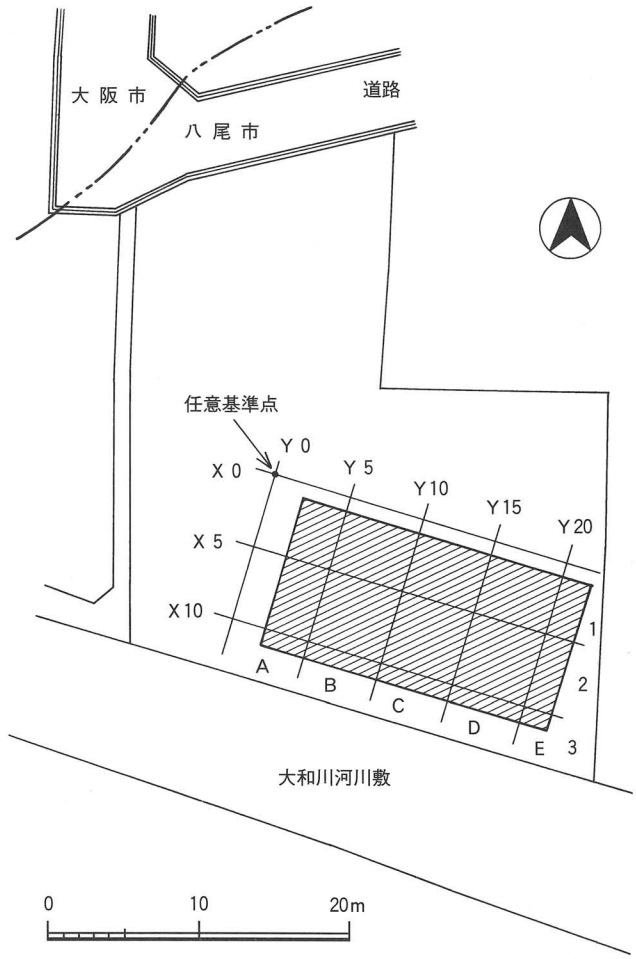
第２章　調査概要

第１節　調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設工事に伴うもので、当研究会が当遺跡内で実施する第23次調査となる。調査対象となる規模は、建物基礎工事によって破壊される南北10m×東西20mの面積200㎡を測る。調査区内の地区割りは、敷地内の土地開発区域南側の境界線南北方向を算用数字（１～３）・東西方向をアルファベット（Ａ～Ｅ）とし、１区画を５m四方で区割し、１Ａ区～３Ｅ区と呼称した。

掘削方法は、八尾市教育委員会の遺構確認調査結果をもとに、現地表面（T.P.＋12.6m前後）から0.3m前後の現耕作土および床土部分を重機によって除去した後、以下0.3m前後の土層を人力により掘削・精査し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査の結果、現地表下0.4m前後（T.P.＋12.2m前後）において、中世末～近世にかけての小穴４個（ＳＰ－101～ＳＰ－104）・溝５条（ＳＤ－101～ＳＤ－105）、さらに同一面で弥生時代後期末に比定される井戸１基（ＳＥ－201）・小穴10個（ＳＰ－201～ＳＰ－210）・溝８条（ＳＤ－201～ＳＤ－208）の概ね２時期にわたる遺構面を検出した。



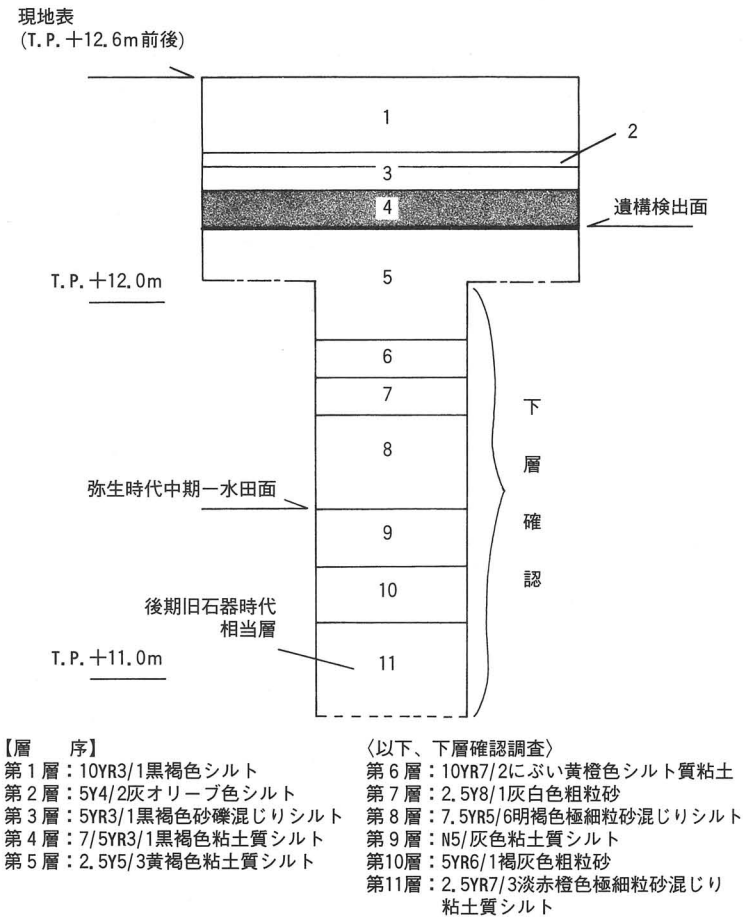
第２図　調査区地区割り図(Ｓ＝１／500)

なお、調査終了後に下層確認調査として、調査区四隅の壁面沿いに平面１m×１mの規模のグリットを設定し、人力掘削最終面よりさらに深さ１m前後（T.P.＋12.0m～T.P.＋11.0m間）迄掘削した。その結果、弥生時代中期の水田耕土および後期旧石器時代に相当する２時期の土層を確認した。

出土遺物量は包含層も含め、全体でコンテナバット１箱分である。

第２節　基本層序

現代の耕作土以下、下層確認を含め11層の堆積層を確認した。既述の本調査地西側の長原遺跡内で実施された調査(ＮＧ93－１)と同様、全体的に南から北に向けて緩やかに傾斜する様相を呈する。以下、各層毎に列記する。なお、各層の表記末尾には「長原遺跡南部標準層序」と対応すべく、[長原○層]を付記した。



第3図　基本層序模式図(S＝1／20)

第1層：10YR3/1黒褐色シルト。層厚20cm前後。現代の耕作土である。[長原1層]

第2層：5Y4/2灰オリーブ色シルト。層厚5cm前後。床土部分にあたる。[長原1層]

第3層：5YR3/1黒褐色砂礫混じりシルト。層厚15cm前後。瓦器・土師器片が僅少ながら含まれる。NG93－1の調査結果から中世末～近世にかけての堆積層と考えられる。[長原2層]

第4層：7.5YR3/1黒褐色粘土質シルト。層厚15cm前後。弥生時代後期末に比定される土器が含まれる。[長原7Biii層]

第5層：2.5Y5/3黄褐色粘土質シルト。層厚30cm前後。本層上面が中世末～近世および弥生時代後期末の遺構検出面となる。[長原8A層]

＜以下、下層確認調査＞

第6層：10YR7/2にぶい黄橙色シルト質粘土。層厚10～15cm。[長原8A層]

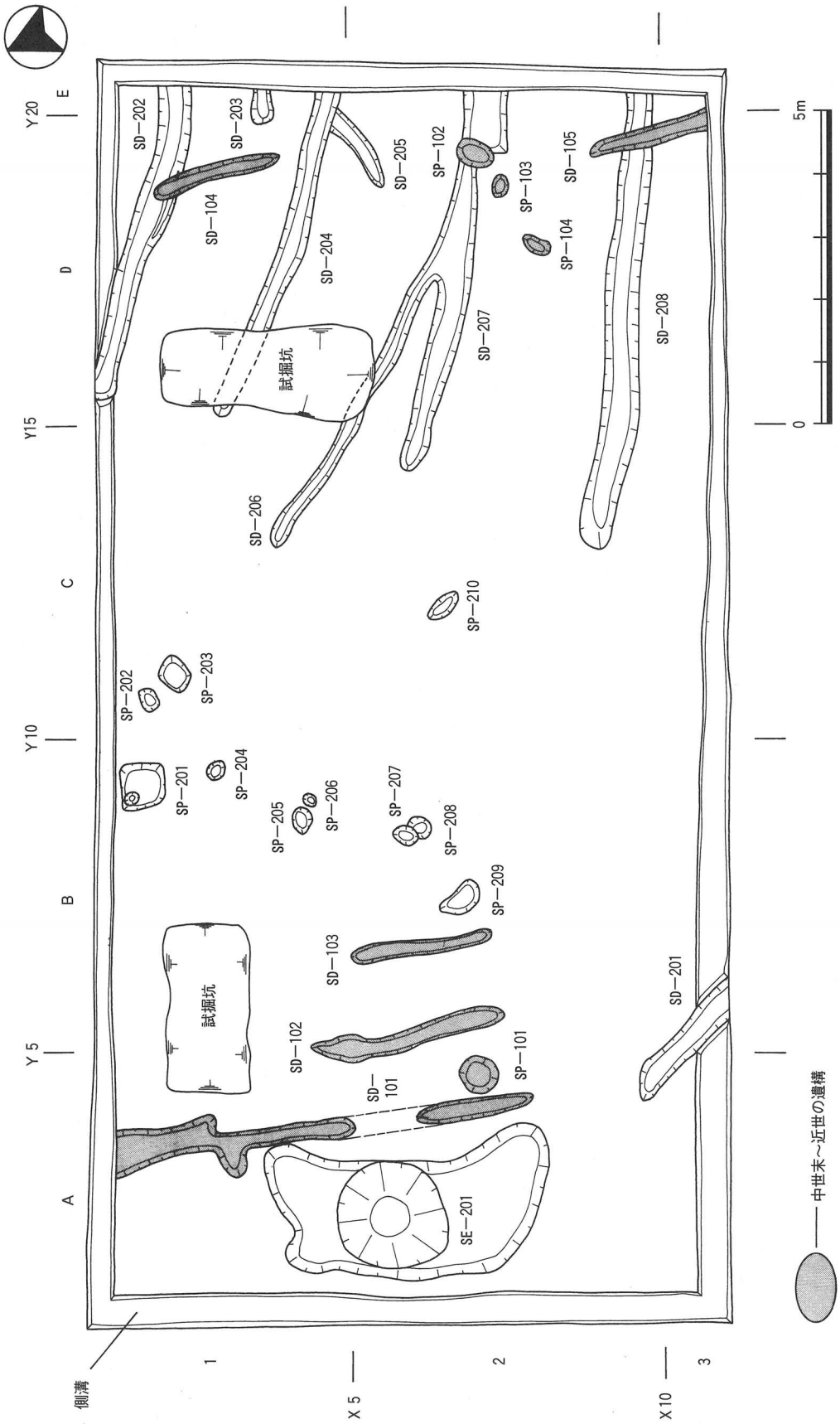
第7層：2.5Y8/1灰白色粗粒砂。層厚10～15cm。弥生時代後期以前の洪水層と考えられる。層厚10～15cm。[長原8B層]

第8層：7.5YR5/6明褐色極細粒砂混じりシルト。層厚20cm前後。NG93－1の調査結果から、下位の水田耕土を覆う堆積層と思われる。[長原8Cii層]

第9層：N5/灰色粘土質シルト。層厚20cm前後。弥生時代の水田耕土にあたる堆積層で、本層上面ではヒトの足跡が確認された。[長原9A′層]

第10層：5YR6/1褐灰色粗粒砂。層厚15cm前後。[長原9Ciii層]

第11層：2.5YR7/3淡赤橙色極細粒砂混じり粘土質シルト。層厚25cm以上。後期旧石器時代の相当層にあたる。[長原13A層・13B層]



第４図　遺構平面図（Ｓ＝１／100）

第３節　検出遺構と出土遺物

＜中世末～近世＞

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－101～ＳＰ－104

２Ａ区でＳＰ－101、２Ｄ区でＳＰ－102～ＳＰ－104の計４個を検出した。各小穴の規模は径25～60cm、深さ２～７cmを測る。埋土はすべて灰色シルト質粘土で、遺物はどの小穴からも出土しなかった。これらの小穴はその検出状況から見て住居に伴うものではなく、後述する同時期の溝(耕作溝)同様、農耕に関連するものではないかと考えられる。なお、各小穴の法量等詳細については第１表に掲載した。

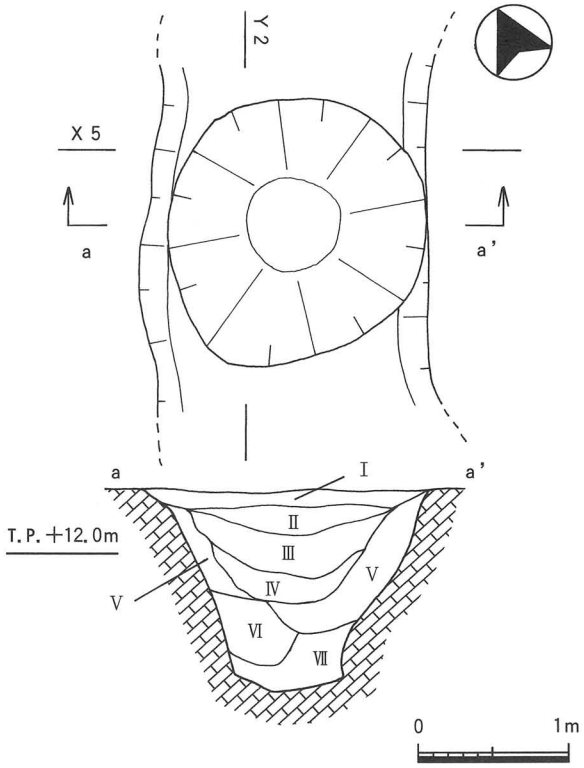
第１表　中世～近世　小穴(ＳＰ)一覧表

ＳＰ番号	地区	短径－長径(cm)	深さ(cm)	平面形状	断面形状
ＳＰ－101	２Ａ	55－60	7	円　形	皿　形
ＳＰ－102	２Ｄ	40－58	5	楕円形	皿　形
ＳＰ－103	２Ｄ	26－37	2	楕円形	皿　形
ＳＰ－104	２Ｄ	25－46	3	不定形	皿　形

溝(ＳＤ)

ＳＤ－101～ＳＤ－105

１Ａ区～１Ｂ区・２Ａ区～２Ｂ区でＳＤ－101～ＳＤ－103の３条、１Ｄ区でＳＤ－104、２Ｄ区～３Ｄ区でＳＤ－105の２条の計５条を検出した。これらの溝は先述の小穴遺構でも触れたように、検出状況から見て耕作溝であると考えられる。各溝は、ほぼ南北方向に並行して伸びる。各溝の規模は幅20～30cmで、深さ３～６cmを測る。ＳＤ－101の北端部では幅70cm前後を測る幅広もあるが、これは鋤溝の重複によるものではないかと推定される。断面の形状は深さの度合いによって皿形と半円形の２種に分かれ、埋土は先述の小穴遺構と同様、灰色シルト質粘土である。遺物はどの溝からも出土しなかった。



【層　序】
Ⅰ－N3/暗灰色粗粒砂混じりシルト
Ⅱ－N3/暗灰色中粒砂混じりシルト
Ⅲ－N3/暗灰色細粒砂混じりシルト
Ⅳ－2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルト
Ⅴ－2.5Y4/2暗灰黄色シルト
Ⅵ－2.5Y4/2暗灰黄色砂礫混じり粘土質シルト
Ⅶ－5B4/4暗青灰色シルト質粘土

第５図　ＳＥ－201平・断面図(Ｓ＝１／50)

＜弥生時代後期末＞

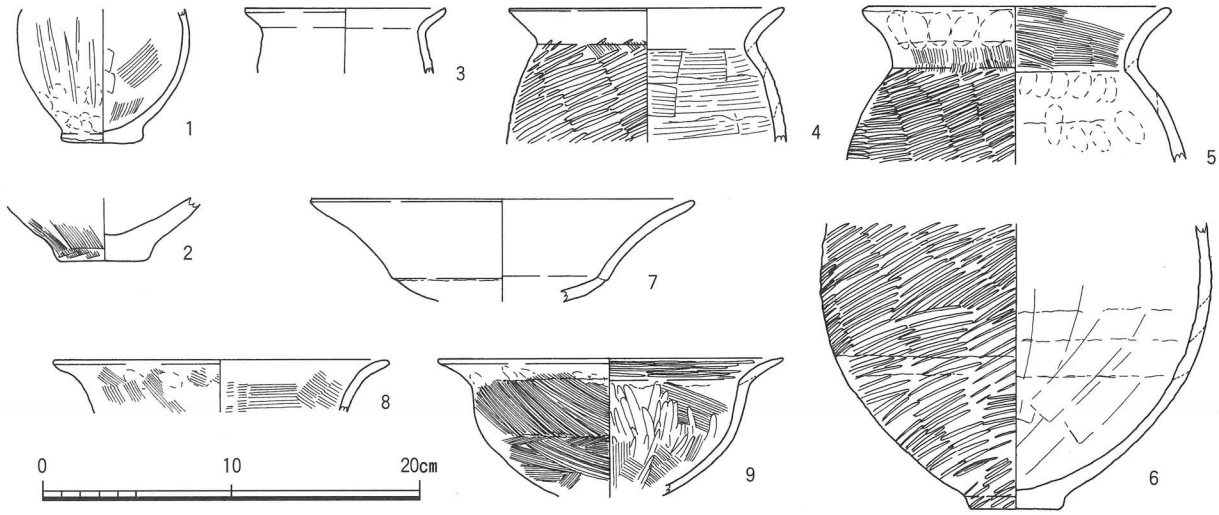
井戸（ＳＥ）

ＳＥ－201

１Ａ区～２Ａ区で検出した。二段掘りで井戸側を伴わない素掘りの井戸である。平面の形状は、上部の掘形が南北に長い楕円形を呈し、その中央に円形の掘形を有す。規模は、上部の掘形が南北3.7～4.6m・東西1.9m前後、深さ0.05～0.07mで底面は平坦で、埋土は黒灰色砂礫混じりシルトの単一層である。つづいて下部の掘形は、径1.7m前後・深さ1.3mで、断面の形状は逆台形を呈する。埋土は概ね暗灰色系のシルトと粘土質シルトの６層で構成される（第５図参照）。遺物は下部の掘形埋土の上層にあたる第Ⅰ～Ⅲ層内から弥生時代後期末に比定される土器が出土した。出土した土器の中

で図化できたものは、壷２点（１・２）、甕４点（３～６）、高杯１点（７）、鉢２点（８・９）の９点である。

（１）は該期に多く見られる小型壷である。（３）の小型甕は、口縁部径が胴部径を若干凌ぐものとみられる。（４～６）の甕は、いずれもやや胴長で体部最大径が中位に位置するものと思われる。（５）の甕の口縁部は、指頭圧痕と接合痕が明瞭に残る粗雑な造りである。（６）の甕には該期の特徴を表す体部下半部の分割成形が顕著にみられる。（７）の高杯も該期特有のもので、口縁部が発達し外反度を増す。（８・９）の外反する口縁部を持つ椀形の鉢は、いずれも体部内外面をハケメ調整するが、（９）の内面にはさらにヘラミガキが施されている。これらの鉢の底部には突出する高台が付されるものと思われる。



第６図　ＳＥ－201出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－201～ＳＰ－210

１Ｂ区～１Ｃ区・２Ｂ区～２Ｃ区においてＳＰ－201～ＳＰ－210の10個の小穴を検出した。各小穴の規模は径20～75cm、深さ２～８cmを測る。埋土はすべて黒灰色粘土質シルトの単一層で、遺物はＳＰ－210からのみ土器の細片が出土した。これらの小穴には、建物を構成するとみられる規則的な柱列は見出せなかったが、一部に柱穴を示唆する掘形もみられることから、住居跡の可能性は強い。なお、各小穴の法量および形状等については第２表に掲載した。

第２表　弥生時代後期末　小穴（ＳＰ）一覧表

ＳＰ番号	地区	短径－長径(cm)	深さ(cm)	平面形状	断面形状
ＳＰ－201	１Ｂ	75	4	方　形	皿　形
ＳＰ－202	１Ｃ	28－33	6	方　形	皿　形
ＳＰ－203	１Ｃ	42－48	4	方　形	皿　形
ＳＰ－204	１Ｂ	28	7	方　形	半円形
ＳＰ－205	１Ｂ	34－38	2	楕円形	皿　形
ＳＰ－206	１Ｂ	20	6	方　形	半円形
ＳＰ－207	２Ｂ	35	6	楕円形	皿　形
ＳＰ－208	２Ｂ	35－39	２～５	楕円形	皿　形
ＳＰ－209	２Ｂ	37－65	5	不定形	逆台形
ＳＰ－210	２Ｃ	25－55	8	楕円形	半円形

溝（ＳＤ）

ＳＤ－201～ＳＤ－208

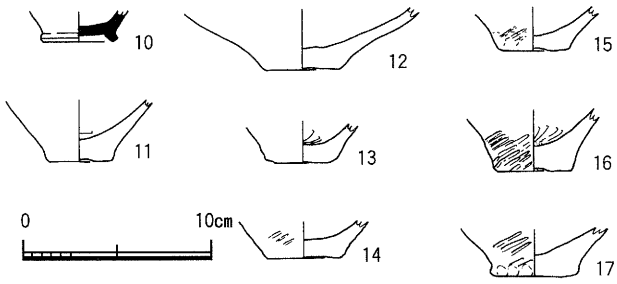
２Ａ区～２Ｂ区・３Ａ区～３Ｂ区で１条（ＳＤ－201）、東部で７条（ＳＤ－202～ＳＤ－208）の計８条を検出した。ＳＤ－201は南東－北西方向に伸びるが、北西部はＳＥ－201に削平されるかのように途切れる。一方、東部で検出した溝のうち、ＳＤ－205を除く６条の溝はすべて東西

方向に並行して伸び、中央の小穴群付近で途絶える。各溝の規模は、20～50cm・深さ２～10cmを測る。断面の形状はその深さによって、皿形と半円形の２種に分類できる。埋土はすべて黒灰色粘土質シルトの単一層である。遺物はＳＤ－207からのみ甕の体部片が出土した。これらの溝の性格としては、生産域に見る耕作溝と考えられる。

・遺構に伴わない出土遺物

第３層内出土で図化できた遺物は、混入品と考えられる須恵器小型壷（10）と弥生土器壷（11）の２点だけである。（10）は倒卵形の体部をもつと見られるもので、底部の切り離しはヘラ切りである。平安時代初頭頃の所産と思われる。（11）の底部はドーナツ底を呈する。摩滅が著しいが、弥生時代後期末に比定される。

第４層内では、すべて弥生時代後期の所産とみられる壷１点（12）と甕５点（13～17）の底部のみ計６点が図化できた。甕のほとんどは外面タタキメ・内面はクモの巣状にヘラナデが施されている。



第７図　遺構に伴わない出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）
〈第３層－10・11、第４層－12～17〉

第３章　まとめ

今回の調査ではT.P.＋12.2m前後の同一面において、中世末～近世期と弥生時代後期末頃の２時期の遺構面を捉えることができた。出土遺物については弥生時代後期末が全体の７割を占め、残りの２割強は中世末～近世期、１割弱が古墳時代～平安時代に比定されるものである。古墳時代～平安時代については遺物が稀薄だけでなく、遺構面も確認されなかった。その要因として、中世末以降の農耕地形成による削平が挙げられよう。なお、当地西側で実施されたＮＧ93－１の調査では、鎌倉時代以降の耕作に伴う鋤溝群や人・牛馬の足跡群、さらに江戸時代の島畑に関わる溝や坪境溝をはじめ、灌漑用の野井戸などが検出されている。報告によると江戸時代の遺構については出土した陶磁器類から宝永元年（1704年）の大和川付け替え以後に属するものとされている。

弥生時代後期末については、北側のＮＧ82－41の調査で方形周溝墓６基（ＳＸ01～ＳＸ06）が検出されている。位置的に、これらの墓域を占有する集団居住域が、当地を含む周辺に存在するという見方ができる。しかし、西側のＮＧ93－１では該期の遺構は見つかっておらず、弥生時代中期後半の土器埋納壙をはじめとする遺構の上層は、古墳時代中期の井戸・溝・掘立柱建物といった居住域に伴う遺構となっている。その解釈には、当地より西側は弥生時代後期の遺構面が、古墳時代前期～中期にかけての居住域形成の際に削平を受けたか、あるいは当地より東側に弥生

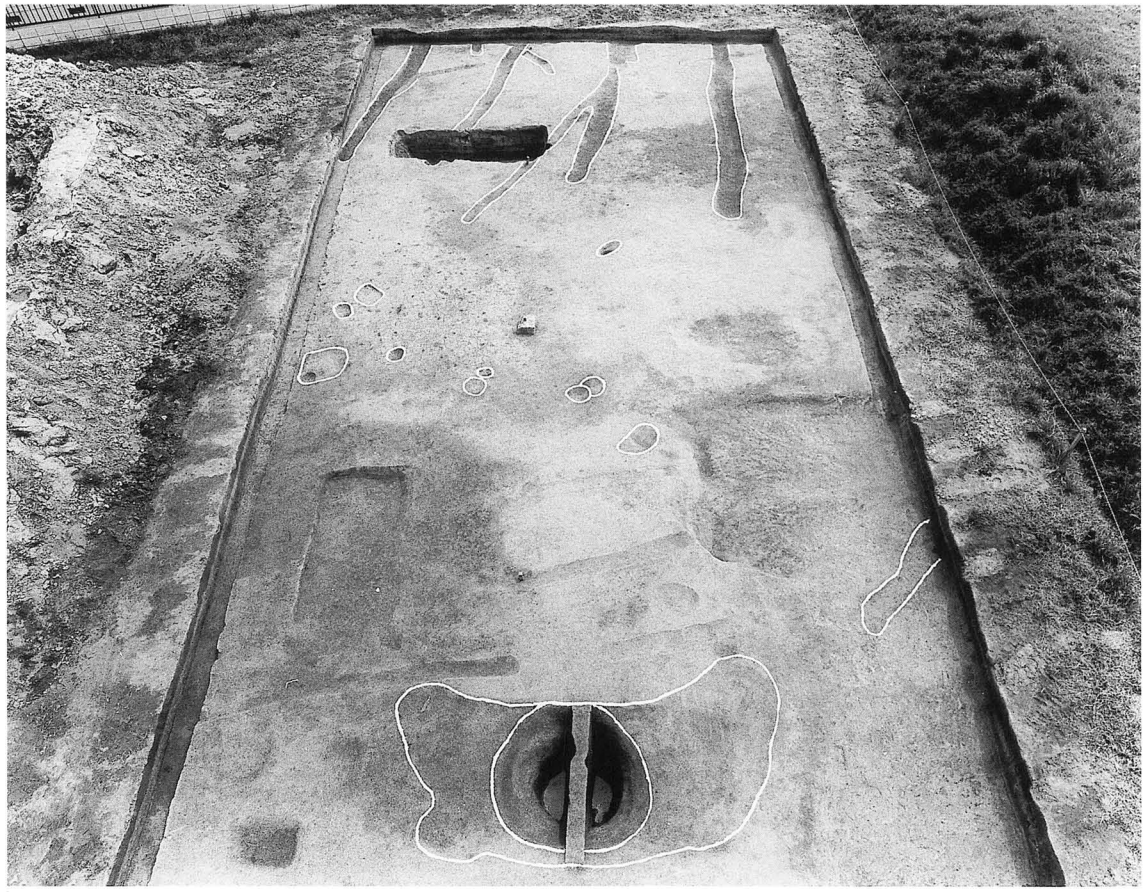
時代後期の居住域が広がるものか等、多角的検討が必要とされる。ちなみに、古墳時代中期の居住域についてはＮＧ93－１をはじめとする当地付近の調査において、掘立柱建物群のみで構成された居住域や加耶・百済系の軟質土器や陶質土器を中心とする韓式系土器が検出されていることから、朝鮮半島南部地域の渡来人の存在が示唆される。今後、当地より東方の八尾南遺跡の調査が進めば、弥生時代後期における居住域と墓域の位置的関係をはじめ、弥生時代中期の水田遺構に見られる生産域から居住域の推移の実態が明らかにされよう。

調査終了後の下層調査では、現地表下1.0m前後（T.P.＋11.6m前後）で「長原遺跡南部標準層序」の長原８Ｃii層に対応する弥生時代中期の水田耕土、さらにそれより0.6m前後（標高11.0m前後）において、後期旧石器時代の相当層となる長原13Ａ層・13Ｂ層に対応する土層を確認することができた。いずれも遺物の出土は見なかったが、今回の調査面よりさらに下層において２時期の生活面が想定される。

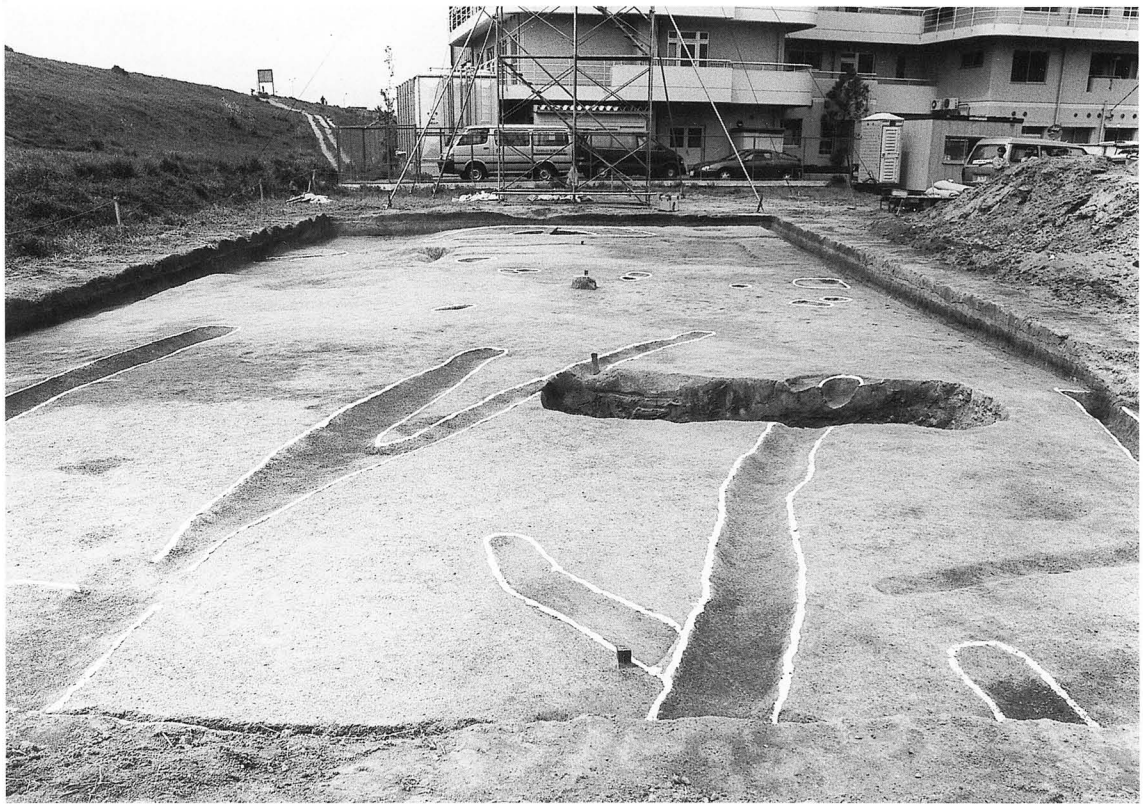
＜参考文献＞

◎山本　昭他　1981.3『八尾南遺跡　－大阪市高速電気軌道２号線建設に伴う発掘調査報告書－』八尾南遺跡調査会
◎永島暉臣慎他　1978.3　1982.3改訂『大阪市平野区　長原遺跡発掘調査報告　―大阪市交通局地下鉄谷町線延長工事、第31・32工区の発掘調査―』長原遺跡調査会　改訂版　財団法人大阪市文化財協会
◎積山　洋他　1993.3「第Ⅱ章　調査の結果　第４節　長原遺跡東南地区の調査（ＮＧ86－54①･54②･58①･58②･70次調査）」『大阪市平野区　長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅵ　1986年度大阪市長吉瓜破地区　土地区画整理事業施工に伴う発掘調査報告書』（財）大阪市文化財協会
◎1983.9『長原遺跡（ＮＧ82－41）現地説明会資料』大阪市教育委員会　（財）大阪市文化財協会
◎永島暉臣慎・田中清美　1993『大阪市民生局による建設工事に伴う　長原遺跡発掘調査（ＮＧ93－１）略報』財団法人　大阪市文化財協会
◎駒沢　敦　1984「３　八尾南遺跡」『昭和58年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告５　（財）八尾市文化財調査研究会
◎駒沢　敦　1985「１　八尾南遺跡（第２次調査）」「３　八尾南遺跡（第４次調査）」『昭和59年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告７　（財）八尾市文化財調査研究会
◎駒沢　敦　1988「７　八尾南遺跡（第５次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告16　（財）八尾市文化財調査研究会
◎西村公助　1987.12「４　八尾南遺跡（第６次調査）」『昭和61年度事業概要報告』（財）八尾市文化財調査研究会報告14　（財）八尾市文化財調査研究会
◎西村公助　1993「Ⅵ　八尾南遺跡第７次調査（ＹＳ86－7）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』（財）八尾市文化財調査研究会報告41　（財）八尾市文化財調査研究会
◎原田昌則・駒沢　敦　1995「Ⅰ　八尾南遺跡第８次調査（ＹＳ87－８）発掘調査報告」『八尾南遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告47』（財）八尾市文化財調査研究会
◎成海佳子　1994「Ⅱ　八尾南遺跡第10次調査（ＹＳ87－10）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告40　（財）八尾市文化財調査研究会
◎原田昌則　1995「Ⅱ　八尾南遺跡第12次調査（ＹＳ88－12）発掘調査報告」『八尾南遺跡　財団法人　八尾市文化財調査研究会報告47』（財）八尾市文化財調査研究会
◎成海佳子・駒沢　敦　1989「23　八尾南遺跡（第13次調査）」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告25　（財）八尾市文化財調査研究会
◎原田昌則　1995「Ⅲ　八尾南遺跡第17次調査（ＹＳ90－17）発掘調査報告」『八尾南遺跡　財団法人　八尾市文化財調査研究会報告47』（財）八尾市文化財調査研究会
◎西村公助　1994「Ⅷ　八尾南遺跡第19次調査（ＹＳ93－19）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告43』（財）八尾市文化財調査研究会
◎高萩千秋　1996「Ⅶ　八尾南遺跡第20次調査（ＹＳ94－20）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告50』（財）八尾市文化財調査研究会
◎坪田真一　1998「Ⅵ　八尾南遺跡（第21次調査）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告61』
◎高萩千秋　1996「Ⅶ　八尾南遺跡第22次調査（ＹＳ95－22）」『財団法人　八尾市文化財調査研究会報告54』（財）八尾市文化財調査研究会

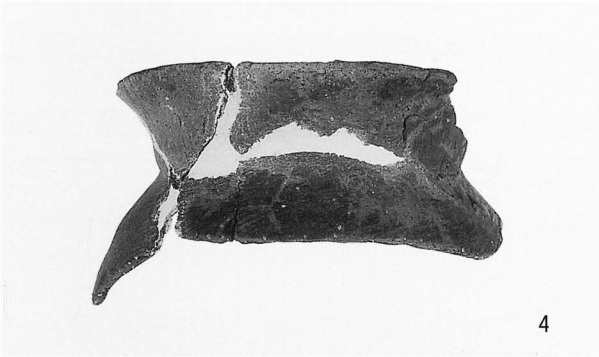
図　　版

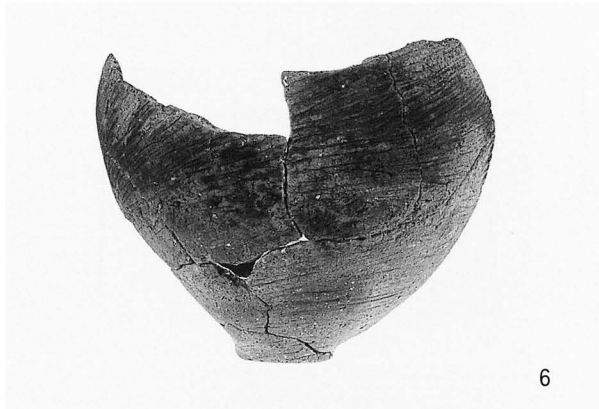


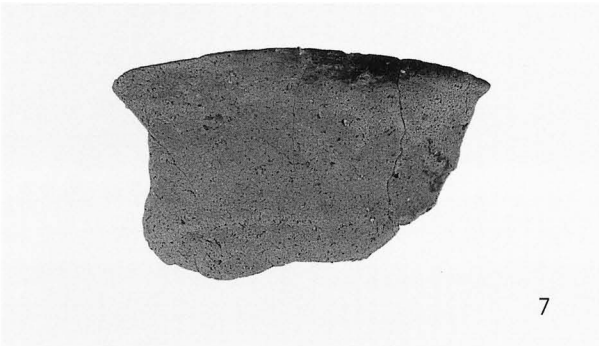
全景(西から)



同上(東から)







ＳＥ－201（１・４～６・７・９）、第４層（12・16）　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく63
書名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告 63
副書名	Ⅰ　植松遺跡（第４次調査）　Ⅱ　東郷遺跡（第50次調査）　Ⅲ八尾寺内町遺跡（第１次調査） Ⅳ　八尾南遺跡（第23次調査）
巻次	
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	63
編著者名	岡田清一
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821　大阪府八尾市幸町４丁目58－２　TEL・FAX　０７２９－９４－４７００
発行年月日	西暦１９９９年３月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
植松遺跡（うえまついせき） （第４次調査）	大阪府八尾市植松町（おおさかふやおしうえまつちょう） ３・５丁目地内	27212		34度36分44秒	135度35分45秒	19960318～19960327	43.2	公共下水道工事
東郷遺跡（とうごういせき） （第50次調査）	大阪府八尾市荘内町（おおさかふやおししょうないちょう） １丁目36－１．37番地	27212		34度37分23秒	135度36分38秒	19960110～19960124	約70	共同住宅建設工事
八尾寺内町遺跡（やおじないまちいせき） （第１次調査）	大阪府八尾市本町（おおさかふやおしほんまち） ３丁目106,107番地	27212		34度37分22秒	135度36分01秒	19950607～19950622	約200	共同住宅建設工事
八尾南遺跡（やおみなみいせき） （第23次調査）	大阪府八尾市若林町（おおさかふやおしわかばやしちょう） ２丁目202－１他２筆	27212		34度35分25秒	135度34分54秒	19950405～19950413	約200	共同住宅建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
植松遺跡 （第４次調査）	集落遺構	弥生時代中期末	土坑・溝	弥生土器（Ⅳ様式）・石器	弥生時代中期末の居住域の一端を確認。 奈良時代の集落域の拡がりを確認。
		奈良時代	溝	土師器・須恵器	
		中世	溝	土師器・瓦質土器	
東郷遺跡 （第50次調査）	集落遺構 生産移行	古墳時代初頭	土坑・溝・小穴・畦畔	庄内式土器	古墳時代初頭の居住域と生産域を同一面で確認。
	生産遺構	中世	池状遺構	土師器・瓦器・瓦	
八尾寺内町遺跡 （第１次調査）	集落遺構	弥生時代後期末	竪穴住居・土坑・溝・小穴・落込み状遺構	弥生土器（Ⅴ様式）・石器	弥生時代後期末～古墳時代前期にかけての居住域を確認。 中世の条里制に関連する水田遺構を確認。
		古墳時代前期	土坑・溝・小穴	土師器・須恵器	
	生産遺構	中世	溝・畦畔・足跡	土師器・瓦質土器	
八尾南遺跡 （第23次調査）	集落遺構	弥生時代後期末	井戸・溝・小穴	弥生土器（Ⅴ様式）・石器	弥生時代後期末と中・近世の生活面を同一面で確認。 下層調査で後期旧石器時代の土層を確認。
	生産遺構	中世末～近世	耕作溝・小穴	なし	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告63

Ⅰ　植松遺跡（第４次調査）
Ⅱ　東郷遺跡（第50次調査）
Ⅲ　八尾寺内町遺跡（第１次遺跡）
Ⅳ　八尾南遺跡（第23次遺跡）

発　行　平成11年３月
編　集　財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町４丁目58番地の２
TEL・FAX（0729）94－4700
印　刷　㈱近畿印刷センター
表　紙　レザック66　＜70Kg＞
本　文　書籍用紙　＜70Kg＞
図　版　マットアート　＜135Kg＞

015